

門真市・寝屋川市・交野市・枚方市所在

讚良郡条里遺跡、
寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、
倉治遺跡、津田城遺跡

～一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書～

2003年9月

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

今回の確認調査は、国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路の建設に先立って行われました。この道路は、大阪府門真市・寝屋川市・四條畷市・交野市・枚方市を経て京都府久御山町（近畿道門真J.C～久御山J.C）へとつながります。事業予定地内には、随所に各時代の指標となる資料を伴う旧知の遺跡が点在していますが、これまでの確認調査により、その範囲がより明確に示されることとなりました。

枚方丘陵とこれに連なる交野台地上では、旧石器時代に属する遺物の出土が認められています。この地域が農耕社会生活以前において、良好な狩猟の場に恵まれた土地であったことをうかがわせます。つづく縄文時代・弥生時代には多くの集落が営まれたことが確認されており、早くから人々が住居を構えた場所でもありました。

また、古代には秦氏・百濟王族を代表とする渡来人系氏族の移住があり、寺院や文字、織物、律式土器をはじめとする生活文物など当時としては最先端の文化や技術が持ち込まれた形跡がみられます。

一方、今回の調査対象地のうち、寝屋川市から門真市にかけての平野部は、縄文期に海進と海退を繰り返して土砂が堆積し、やがて陸化して広大な湿地帯を形成します。弥生時代以降の人々は、豊富な水資源を活用して水田開発をおこない、沃野をはぐくんできました。周辺には核となる大きな集落がいくつも営まれ、社会の発展へとつながる活発な生産活動を繰り広げました。

今回の調査では、古墳時代から中世にいたるまでの遺構を確認しました。確認調査の性格上、面的調査から得られた情報は決して多くありませんが、それでも新規の古墳や古代集落の発見等、重要な成果が報告されています。以後も、調査事業地内において、発掘調査をおこなってまいりますが、その先駆けとしての情報を、本書において皆様にお知らせしたいと思います。これからも変わらぬご理解とご支援を、よろしくお願ひいたします。

最後となりますと、調査にあたってご助力・御協力をいただきました関係諸機関・地元関係各位に深く謝意を表します。

2003年9月

財團法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例　　言

- 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内のうち、寝屋川市・交野市・枚方市域の遺跡群に重なる地区についての確認調査に関する報告書である。
- 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所・日本道路公团枚方工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財團法人大阪府文化財センター中部調査事務所が実施した。
- 調査および整理作業は、以下の体制で実施した。

調査部長（玉井 功）、中部調査事務所長（藤田 憲司）、調査第一係長（一瀬 和夫）、調査第二係長（秋山 浩三）、主査（片山 彰一〔写真〕）

調整課長（赤木 克視）、調整係長（森屋 直樹）、調整係技師（山元 建）

現地調査地点および調査・整理作業担当者は、以下の通りである。

門真市域（讚良郡条里遺跡西地区 確認）

門真市北条本町・宮前町 平成14年9月2日～平成15年1月31日

上馬伏 中部調査事務所調査第一係 技師 井上 智博
同 専門調査員 多賀 晴司

寝屋川市域（讚良郡条里遺跡 確認・その4）

寝屋川市萱島東3丁目 平成14年4月10日～平成15年3月31日

讚良東町地先 中部調査事務所調査第一係 技師 黒須亞希子
同 専門調査員 宮本 飛鳥

寝屋川市域（寝屋南遺跡西地区 確認）

寝屋川市寝屋地先 平成14年11月1日～平成15年3月31日

中部調査事務所調査第一係 技師 伊藤 武
同 専門調査員 植村 悟

寝屋川市域（寝屋東遺跡 確認）

寝屋川市寝屋地先 平成14年11月26日～平成15年2月28日

中部調査事務所調査第二係 技師 河端 智
同 専門調査員 河村 恵理

交野市域（倉治遺跡 確認）

交野市倉治地先 他 平成14年6月1日～平成14年11月30日

中部調査事務所調査第二係 技師 河端 智
専門調査員 河村 恵理

枚方市域（津田城遺跡 確認）

枚方市津田地先 他 平成14年9月2日～平成15年1月10日

中部調査事務所調査第二係 技師 河端 智
同 専門調査員 河村 恵理

- 調査の実施にあたっては、関係諸機関をはじめ、以下の方々から多大な御教示ならびにご指導を得た。記して感謝の意を表する（順不同・敬称略）。

宇治原靖泰（門真市教育委員会）、塙山則之・濱田延充（寝屋川市教育委員会）、野島稔（四條畷市教育委員会）、奥野和夫・真鍋成史・小川暢子（交野市教育委員会）、大竹弘之（枚方市教育委員会）、櫻井敬夫・宇治田和生・三宅俊隆・西田敏秀（財団法人枚方市文化財研究調査会）・森村健一（堺市教育委員会）

5. 当センターにおける非常勤職員のうち、現地調査参加者および整理作業従事者は、以下の通りである。
小野亞由美、島田裕弘
6. なお、讃良郡条里遺跡より採取した土壌を対象として、自然科学分析をおこなった。分析作業は、花粉・珪藻等微化石分析について、株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 本書の作成にあたっては、各担当者が各自執筆した。主な執筆者は以下の通りである。

讃良郡条里遺跡西地区（確認）	井上智博	讃良郡条里遺跡（確認その4）	黒須亜希子
寝屋南遺跡西地区（確認）	伊藤 武	寝屋東遺跡（確認）	河村 恵理
倉治遺跡（確認）	河端 智	津田城遺跡（確認）	河村 恵理
8. 本書の編集は、黒須が担当した。
9. 本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望するものである。

凡 例

1. 本書に掲載した地形図・遺構実測図・その他の図に付された方位は、全て座標北を示している。
2. 当センターがこれまでにおこなった一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う確認調査の座標値は、すべて国土座標第VI系を基準として設置したものである。なお、今回設置した調査区の位置等については、これまでの確認調査に倣い、日本測地系による表記を用いた。
3. 本書に掲載した遺構実測図の基準高（レベル値）は、東京湾平均海水面であるT.P.+の数値を使用した。
4. 本書の作成に関しては、当センターが定める「遺跡調査基本マニュアル」の報告書体裁に従った。但し、調査区の名称や表現方法については、実際の現地調査時の呼称等と齟齬が生じることを考慮し、各担当者の意見を尊重した。このため、本書では敢えて統一をしていない。
5. 本書で使用した土壤色の記述は、すべて「小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帳』第15版（通商産業省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
6. 本書に掲載した図面や写真図版の縮尺率については、各報告者の考えを尊重したため統一をしていないが、図中にスケールを掲げ、縮尺率を明記した。

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査方法	4
第2章 調査成果	5
第1節 讀良郡条里遺跡西地区	5
第2節 讀良郡条里遺跡（確認・その4）	29
第3節 寝屋南遺跡西地区	50
第4節 寝屋東遺跡	65
第5節 倉治遺跡	79
第6節 津田城遺跡	91
第3章 まとめ	103

挿 図 索 引

第1図 調査対象地位置図	1
第2図 調査地周辺の主要遺跡分布図（西部）	2
第3図 調査地周辺の主要遺跡分布図（東部）	3
第4図 讀良郡条里遺跡西地区 調査地位置図	6
第5図 讀良郡条里遺跡西地区 トレンチ配置図（北東部）	6
第6図 讀良郡条里遺跡西地区 トレンチ配置図（南西部）	7
第7図 讀良郡条里遺跡西地区 02-8・02-7 トレンチ断面図	9
第8図 讀良郡条里遺跡西地区 02-5・02-6 トレンチ断面図	11
第9図 讀良郡条里遺跡西地区 02-4 トレンチ断面図	13
第10図 讀良郡条里遺跡西地区 出土土器実測図	18
第11図 讀良郡条里遺跡西地区 02-3・02-9 トレンチ断面図	21
第12図 讀良郡条里遺跡西地区 第2b面平面図	23
第13図 讀良郡条里遺跡西地区 02-3-2 トレンチ出土土器実測図	24
第14図 讀良郡条里遺跡西地区 02-1・02-2 トレンチ断面図	25
第15図 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 調査地周辺の遺跡分布図	31
第16図 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 調査区設置位置図	32
第17図 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 基本層序模式図	33
第18図 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 第1調査区平面図	35
第19図 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 第1-1調査区土層断面図	36
第20図 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 第1-1調査区出土遺物実測図	36
第21図 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 第1-2調査区土層断面図	37

第22図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第1－2調査区出土遺物実測図	37
第23図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第2調査区平面図	39
第24図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第2－1調査区・第2－2調査区土層断面図	40
第25図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 土器だまり1 遺物出土状況実測図	41
第26図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 土器だまり2 遺物出土状況実測図	41
第27図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第2－2調査区出土遺物実測図	41
第28図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第2－1調査区出土遺物実測図（1）	41
第29図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第2－1調査区出土遺物実測図（2）	41
第30図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第3調査区土層断面図	43
第31図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第5調査区出土遺物実測図	45
第32図 読良郡条里遺跡（確認・その4） 第4・5調査区土層断面図	45
第33図 寝屋南遺跡西地区 調査区位置および周辺遺跡分布図	50
第34図 寝屋南遺跡西地区 調査地周辺古墳分布図	51
第35図 寝屋南遺跡西地区 トレンチ配置図	56
第36図 寝屋南遺跡西地区 第1・4・5・6・7・8トレンチ 平面・断面図	57
第37図 寝屋南遺跡西地区（確認） 第2・3トレンチ 平面・断面図	59
第38図 寝屋南遺跡西地区（確認） 第9・12トレンチ 平面・断面図	61
第39図 寝屋南遺跡西地区（確認） 第10・11・13トレンチ 平面・断面図	63
第40図 寝屋東遺跡（確認） 調査区位置図	65
第41図 寝屋東遺跡（確認） トレンチ配置図	66
第42図 寝屋東遺跡（確認） 調査区周辺の地形復元図	69
第43図 寝屋東遺跡（確認） 第1・2・3トレンチ 土層断面図	71
第44図 寝屋東遺跡（確認） 第4・5トレンチ 道構平面図・土層断面図	73
第45図 寝屋東遺跡（確認） 第6・7トレンチ 道構平面図・土層断面図	75
第46図 寝屋東遺跡（確認） 調査区断面土層柱状図	77
第47図 倉治遺跡（確認） 調査区位置図	79
第48図 倉治遺跡（確認） トレンチ位置図	79
第49図 倉治遺跡（確認） 1－1トレンチ・1－2トレンチ 断面図	80
第50図 倉治遺跡（確認） 2トレンチ 平面・断面図	81
第51図 倉治遺跡（確認） 3トレンチ・4トレンチ 平面・断面図	83
第52図 倉治遺跡（確認） 5トレンチ・6トレンチ・7トレンチ 断面図	86
第53図 倉治遺跡（確認） 8トレンチ・10トレンチ 平面・断面図	88
第54図 倉治遺跡（確認） 9トレンチ 平面・断面図	89
第55図 倉治遺跡（確認） 出土遺物実測図	90
第56図 津田城遺跡（確認） 周辺の既往調査区位置図	92
第57図 津田城遺跡（確認） トレンチ配置図	93
第58図 津田城遺跡（確認） 出土遺物実測図	95
第59図 津田城遺跡（確認） 旧谷地形想定復元図	97

第60図	津田城遺跡（確認） 第1・1・1-2・2・3・5トレンチ土層断面図	99
第61図	津田城遺跡（確認） 第4・6・7・8・9トレンチ土層断面図	101
第62図	枚方台地における古窯址の分布図（6世紀～8世紀）	103
第63図	太秦古墳群の広がりと古墳分布図	105
第64図	沖積地の堆積状況 基本層序模式図	106・107
第65図	確認調査トレンチ設置地点	107

表 索 引

表1	讚良郡条里遺跡（確認・その4）出土遺物観察表	47
表2	讚良郡条里遺跡（確認・その4）第1調査区採取資料による花粉化石分布表	48
表3	讚良郡条里遺跡（確認・その4）第1調査区採取資料による珪藻化石分布表	49
表4	国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設事業に伴う既往の埋蔵文化財確認調査一覧表	110

写 真 図 版 目 次

写真図版1	讚良郡条里遺跡西地区 1	
	写真1. 02-7トレンチ北東部 断面（南から）	
	写真2. 02-7トレンチ中央部 断面（南から）	
	写真3. 02-5・6トレンチ 全景（南西から）	
	写真4. 02-5トレンチ第2b面 檜出土坑断面（南から）	
写真図版2	讚良郡条里遺跡西地区 2	
	写真1. 02-4トレンチ 全景（北西から）	
	写真2. 02-9トレンチ第2b面 遺構検出状況（南から）	
	写真3. 02-4トレンチ第2b面 土坑断面（西から）	
	写真4. 02-4トレンチ第3～4層 断面（南西から）	
写真図版3	讚良郡条里遺跡西地区 3	
	写真1. 02-3-2トレンチ第2b面 全景（南西から）	
	写真2. 02-3-2トレンチ 1(溝)・2(溝)（北から）	
	写真3. 02-3-2トレンチ 3(溝)・26(溝) 断面（南から）	
	写真4. 02-3-1トレンチ 第2b面（南から）	
写真図版4	讚良郡条里遺跡西地区 4	
	写真1. 02-3-2トレンチ 断面（南東から）	
	写真2. 02-3-2トレンチ第3a層 瓦器碗出土状況（南から）	
	写真3. 02-2トレンチW5-1～W7層 暗色帯（南東から）	
	写真4. 02-1トレンチ 変形構造（南東から）	

- 写真図版5 讀良都条里遺跡西地区 5 出土遺物写真
- 写真図版6 讀良都条里遺跡（確認・その4） 1
写真1. 第1-1調査区 第3面検出状況（西から）
写真2. 第1-2調査区 第3面検出状況（北から）
写真3. 第2-1調査区 第2面検出状況（西から）
写真4. 第2-1調査区 第5・6面検出状況（西から）
- 写真図版7 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 2
写真1. 第2-1調査区 土器たまり1 遺物出土状況
写真2. 第2-1調査区 土器たまり2（土坑2） 遺物出土状況
写真3. 第3-2調査区 確認トレンチ土層断面
写真4. 第5調査区 確認トレンチ土層断面
- 写真図版8 讀良郡条里遺跡（確認・その4） 3 出土遺物写真
写真1. 第1-2調査区出土 須恵器
写真2. 第1-1・第2-1調査区出土 須恵器
- 写真図版9 讀良都条里遺跡（確認・その4） 4 出土遺物写真
写真1. 第2-1調査区出土 円筒埴輪
写真2. 第2-1調査区出土 須恵器
- 写真図版10 寝屋南遺跡西地区 1
写真1. 第1トレンチ 谷埋め立て状況（北から）
写真2. 第2トレンチ 全景（北から）
写真3. 第3トレンチ 全景（北から）
写真4. 第3トレンチ 挖立柱建物跡検出状況（南から）
- 写真図版11 寝屋南遺跡西地区 2
写真1. 第3トレンチ 南端落ち込み（西から）
写真2. 第4トレンチ 谷肩部（北から）
写真3. 第5トレンチ 段造成状況（北から）
写真4. 第8トレンチ 丘陵斜面地山（南から）
- 写真図版12 寝屋南遺跡西地区 3
写真1. 第6トレンチ 全景（東から）
写真2. 第7トレンチ 全景（北から）
写真3. 第9トレンチ 全景（南から）
写真4. 第10トレンチ 全景（南から）
- 写真図版13 寝屋南遺跡西地区 4
写真1. 第11トレンチ 全景（西から）
写真2. 第12トレンチ 全景（北から）
写真3. 第12トレンチ 焼土坑
写真4. 第13トレンチ 全景（東から）

写真図版14 寝屋南遺跡西地区 5

- 写真1. 第11トレンチ 古墳検出状況
- 写真2. 第11トレンチ 古墳周溝 断面
- 写真3. 第11トレンチ 古墳周溝内須恵器出土状況
- 写真4. 第11トレンチ 南端部谷埋め立て状況

写真図版15 寝屋東遺跡 1

- 写真1. 第1・第2・第3トレンチ 遠景（南東から）
- 写真2. 第1トレンチ 北東壁 断面（北西から）
- 写真3. 第4・第5・第6トレンチ 遠景（北西から）
- 写真4. 第6・第7トレンチ 遠景（南東から）

写真図版16 寝屋東遺跡 2

- 写真1. 第4トレンチ 全景（北西から）
- 写真2. 第4トレンチ 遺構検出状況（南西から）
- 写真3. 第5トレンチ 北東壁 断面（西から）
- 写真4. 第5トレンチ 遺構検出状況（西から）

写真図版17 寝屋東遺跡 3

- 写真1. 第6トレンチ 全景（南東から）
- 写真2. 第6トレンチ 遺構検出状況（南から）
- 写真3. 第6トレンチ 谷肩部 検出状況（南東から）
- 写真4. 第7トレンチ 北西壁 断面（南東から）

写真図版18 倉治遺跡 1

- 写真1. 第1-1トレンチ 全景（西から）
- 写真2. 第1-2トレンチ 北壁（南から）
- 写真3. 第2トレンチ 西壁（東から）
- 写真4. 第2トレンチ 第2面 遺物出土状況（東から）

写真図版19 倉治遺跡 2

- 写真1. 第3トレンチ 北壁（南から）
- 写真2. 第4トレンチ 北壁（南から）
- 写真3. 第5トレンチ 北壁（南から）
- 写真4. 第6トレンチ 西壁（東から）

写真図版20 倉治遺跡 3

- 写真1. 第7トレンチ 北壁（南から）
- 写真2. 第8トレンチ 北壁（南から）
- 写真3. 第9トレンチ 第1面（北から）
- 写真4. 第10トレンチ 北壁（南から）

写真図版21 津田城遺跡 1

- 写真1. 第1-1・第1-2トレンチ 全景（南から）
- 写真2. 第2トレンチ 東壁断面（南西から）

写真3. 第3トレンチ 全景（南から）

写真4. 第4トレンチ 全景（南東から）

写真図版22 津田城遺跡 2

写真1. 第5トレンチ 全景（南西から）

写真2. 第6トレンチ 全景（北東から）

写真3. 第7トレンチ 全景（北東から）

写真4. 第8トレンチ 全景（北から）

写真図版23 津田城遺跡 3 出土遺物写真

写真1. 第2トレンチ 出土遺物

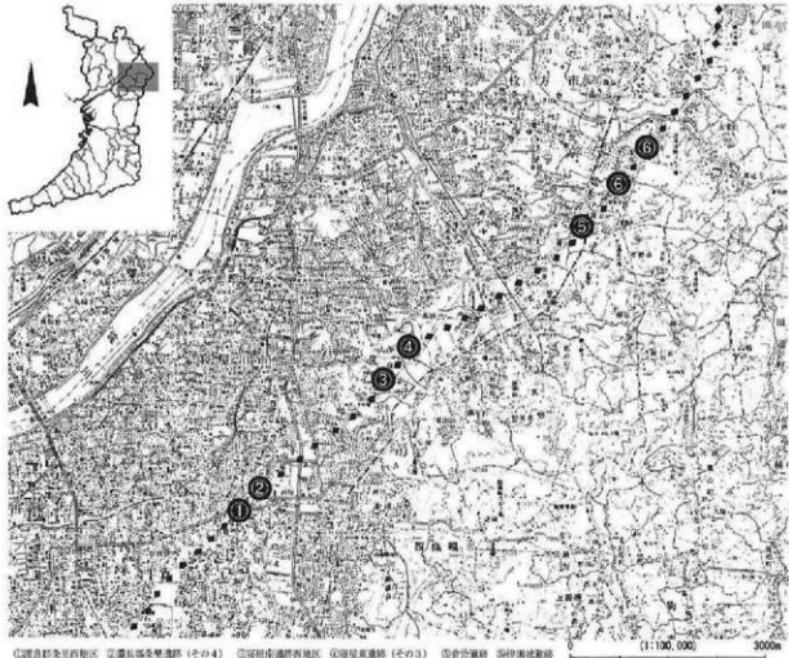
写真2. 第5トレンチ 出土遺物

第1章 調査にいたる経緯と調査方法

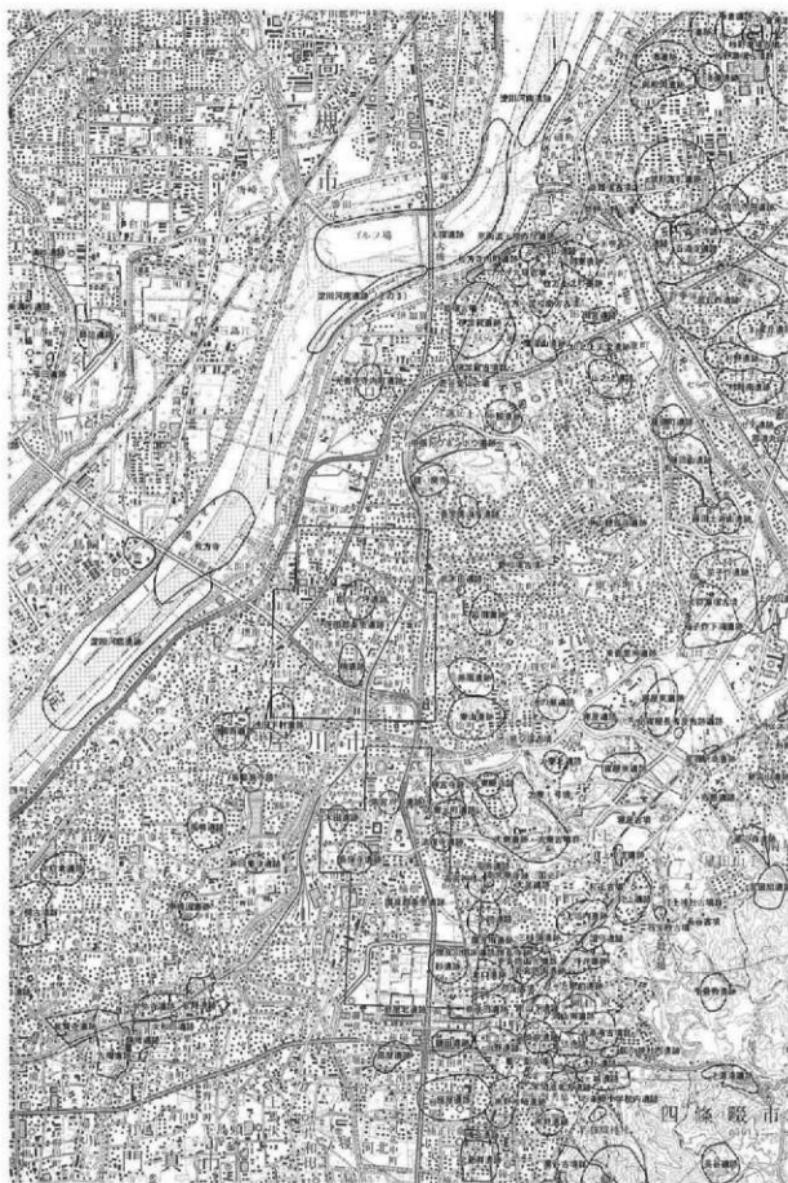
第1節 調査にいたる経緯

今回の調査は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）とそれに併行して建設される第二京阪道路の予定地について埋蔵文化財の遺構・遺物の有無を確認するために行ったものである。国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路の建設工事は、京都府久御山町から枚方市を経て交野市・寝屋川市を横断し、近畿自動車道門真I.Cへと繋がる区間において実施されるものである。これまで当センターでは、平成8年度に一般国道1号の一部である府道深野南寺方大阪線～大阪中央環状線における道路整備に伴う確認調査（門真市三ツ島地区）を行ったのをはじめとして〔註1〕、この工事予定地内に小トレンチを設置し、確認調査をおこなってきた。その成果は、現在整理作業途中のものも含め、順次報告されつつある（110頁表5参照）。

これまで報告された確認調査の成果に基づいて本調査が計画・実施された事例も多い。平成10年度に行なった交野市有池遺跡・津田城遺跡の確認調査では、古墳時代～中世の遺物・遺構を確認したため、平成12・14年度に本調査をおこなった〔註2〕。また、平成12年度に寝屋川市高宮・小路・国守町・打上



第1図 調査対象位置図



第2図 調査地周辺の主要遺跡分布図（西部）



第3図 調査地周辺の主要遺跡分布図(東部)

地区で実施した確認調査では、ほぼ全城において縄文～中世までの遺物を伴う遺構・包含層を確認したため、平成13年度・14年度に打上遺跡・小路遺跡（その1～3）・高宮遺跡（その1～3）・讚良郡条里遺跡（その1～3）等の本調査を実施することとなった〔註3〕。さらに、平成13年度に実施した確認調査（讚良郡条里遺跡・大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群・打上遺跡・寝屋南遺跡・寝屋東遺跡・私部南遺跡・東倉治遺跡・津田城遺跡東地区等）については、今年度（平成15年度）寝屋東遺跡（その4）、讚良郡条里遺跡（その4～8）地点における本調査が計画・着手されている〔註4〕。

本書は、これまでの確認調査の報告に続き、平成14年度に実施した6件の確認調査（門真市所在讃良郡条里遺跡西地区、寝屋川市所在讃良郡条里遺跡・寝屋南遺跡西地区、寝屋東遺跡、交野市所在倉治遺跡、枚方市所在津田城遺跡）について、その成果を報告するものである。なお、今回の調査成果をうけて、讃良郡条里遺跡西地区は大字名から「巣本遺跡」と、寝屋南遺跡西地区において確認された円墳は小字名から「奥山1号墳」として、扱われることとなった。

第2節 調査方法

今回の調査では、幅2～4mの細長いトレンチを設置し、調査区とした。

はじめは、事業予定地の偏辺方向を意識して掘削範囲を計画したが、大規模な擾乱や盛土および既設のブロック塀等に阻まれて場所や形状の変更・分断を余儀なくされたトレンチや、等高線の微地形や丘陵地の方向性を考慮して、不定方向に延びるトレンチを設置した地点がある。また、市街地内の調査では、現存する建物や道路を考慮して、位置を変更した調査区もあることを加えておきたい。

発掘調査の具体的な方法は以下の通りである。現代の耕作土や盛土は主に重機を用いて掘削し、これ以下の土層については人力による掘削をおこない、遺構の検出を心がけた。また、遺構の掘削は極力おこなわないことを原則とし、原位置を保つ完存性の高い遺物については取上げずに埋め戻しをおこなって保存に努め、今後の本調査に備えることとした。

なお、調査区の全面において地山土を検出することができなかつたものについては、部分的に確認トレンチ等を設置して深掘りをおこなったが、その掘削限界にいたっても、なお地山が未確認であった調査については、周辺地の調査事例を鑑みて、その想定深度について本書の中で記述した。

〔註1〕『三ツ島遺跡 ～一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う門真市三ツ島地区埋蔵文化財確認調査報告書～』 1997 財團法人大阪府文化財調査研究センター

〔註2〕『長尾台地区、杉・水室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群 ～一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う理藏文化財確認調査報告書～』 2001 財團法人大阪府文化財調査研究センター

『津田城遺跡 ～一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う理藏文化財発掘調査報告書～』 2002 財團法人大阪府文化財調査研究センター

『杉中貴賀遺跡 ～第二京阪道路 杉方遺跡群（杉地区）発掘調査報告書～』 2002 財團法人大阪府文化財センター

『移遺跡 ～一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う理藏文化財確認調査報告書～』 2003 財團法人大阪府文化財センター

〔註3〕『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大丸谷遺跡・長尾跡群、長尾東地区 ～一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う理藏文化財確認調査報告書～』 2002 財團法人大阪府文化財センター

『大尾遺跡 ～一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う理藏文化財発掘調査報告書～』 2003 財團法人大阪府文化財センター

〔註4〕『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡、太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区 ～一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う理藏文化財確認調査報告書～』 2003 財團法人大阪府文化財センター

第2章 調査成果

第1節 讀良郡条里遺跡西地区

1. 調査地の立地と調査の方法

今回調査をおこなった讀良郡条里遺跡西地区は、門真市北東本町・宮前町・上馬伏に所在する（図4）。表層地形では寝屋川右岸の沖積低地にあたっており、既往の地形分類図を参考にすると、調査地域の東端に寝屋川の旧流路の堆積作用により形成されたと考えられる自然堤防が存在している。調査地周辺では、平成10年度に門真遺跡群（図1に「98-」をつけて調査地点を表示）、平成13年度には讀良郡条里遺跡西地区（図1に「01-」をつけて調査地点を表示）において確認調査が実施された。その結果、縄文時代前期～近代の堆積環境変遷の概要が明らかになっている。

今回は、9つのトレンチを設定して調査を実施した（02-1～02-9トレンチ、図5・6）。調査にあたっては、各トレンチにおける造構・遺物の検出層準とともに、トレンチ間の層序対比についても注意をはらった。ただし、堆積環境の違いから、統一した層序番号をつけるためには情報が不十分であり、比較的状況が共通していた02-3～6・9トレンチの層序のみを統一した。また、調査地域の西部にあたる02-1・2トレンチでは、他のトレンチよりも古い時期の堆積物が確認できたが、それらの地層の広がりについては不確定要素もあることから、「W-1層」のように、頭に「W」をつけて表示することにした。なお、層位の表記にあたっては、古土壤とその母材となる堆積物の関係がわかる場合には、前者をa層、後者をb層とした。

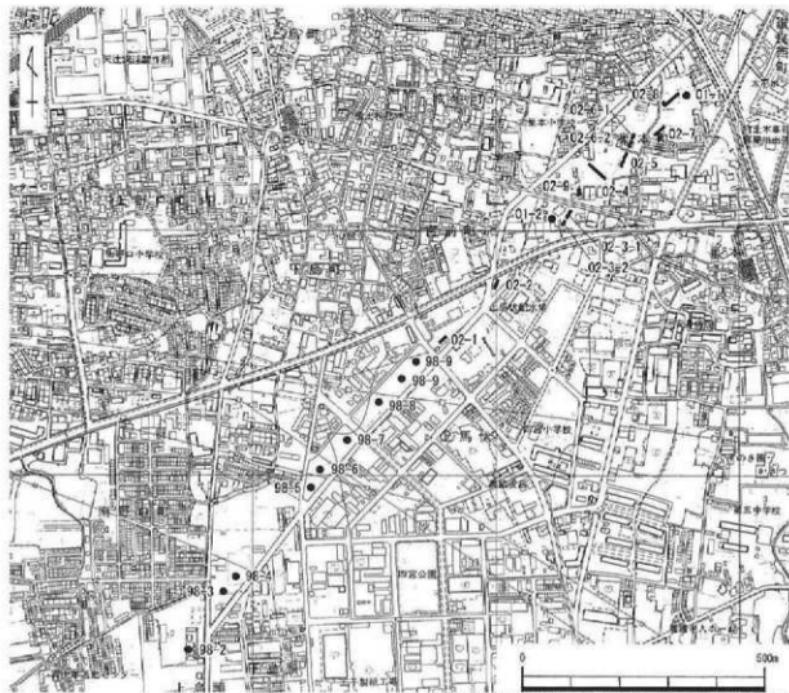
2. 調査成果

ここでは、堆積環境が異なる02-7・8トレンチ、02-5・6トレンチ、02-3・4・9トレンチ、02-1・2トレンチにわけて、層序・造構・遺物について説明することにしたい。

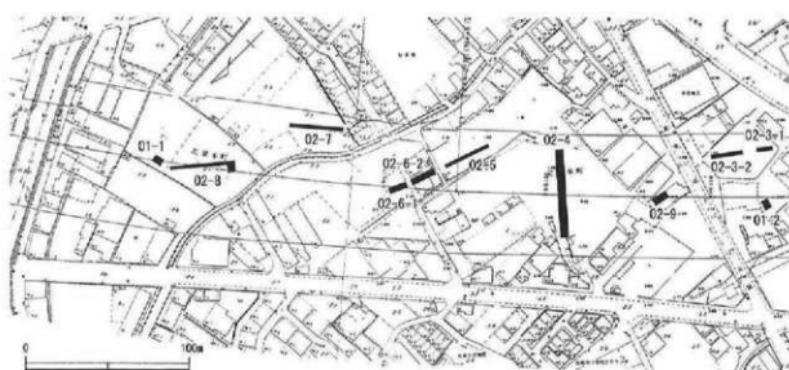
02-7トレンチ・02-8トレンチ（第7図） これらのトレンチでは、流路堆積物および氾濫堆積物が堆積していたが、堆積物中には堆積隙間を示す古土壤が形成されていた層準もあり、その古土壤形成時期の遺構も検出された。

02-8トレンチは寝屋川の右岸に近接する位置にあり、調査の結果、長さ40mのトレンチ全体にわたって流路堆積物が確認された。流路堆積物は、顯著な不整合面に着目することで5つの堆積単位（ユニット1～5）に细分され、流路が西から東へ側方移動していく様子が読み取れた。

まずトレンチ南西部で観察されたユニット1下部は、トレンチ最下部においては斜交層理の見られる粗砂～細礫であったが、全体としては平行ないし斜交層理が認められる粗砂～中砂を主体とし、シルト～極細砂の間層を挟んでいた。なお、中位のシルト～極細砂層上部から、その上の砂層下部にかけて変形構造が認められたが、その成因に関しては不明である。さらに、トレンチ中央部で観察されたユニット1上部はトラフ型斜交層理の見られる砂礫層である。ユニット1の堆積物の最上部には土壤化した砂混じりシルト層が形成されていた。ユニット2は、細砂～中砂や細砂の薄層を挟むシルト層からなっていたが、流路堆積物の中心は掘削停止面よりも下に存在すると思われ、今回観察できたもの内、



第4図 謙良郡条里遺跡西地区 調査位置図

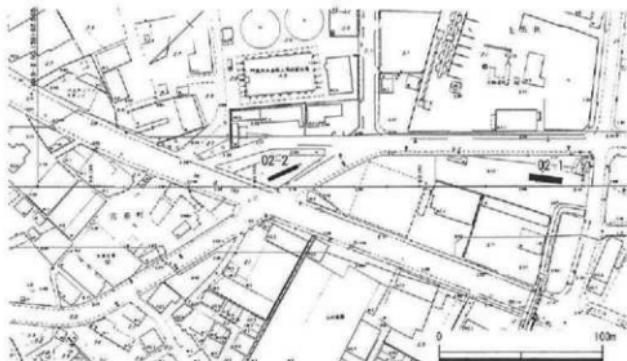


第5図 謙良郡条里遺跡西地区 トレンチ配置図(北東部)

ほとんどは、河岸部に堆積した比較的細粒の堆積物であったと思われる。なお、ユニット2の上面には段差のついた部分が認められるが、これはこの段階に顕著な堆積間隙があったことを示している。ユニット3も細砂～中砂の薄層を挟むシルト～極細砂が主体であったが、流路堆積物の中心は掘削停止面よりも下にあり、ユニット2と同様、河岸付近に堆積した細粒の堆積物であったと考えられる。さらに、ユニット3上面でも段差が認められたが、この面も顕著な堆積間隙の存在を示している。ユニット4の下部は斜交層理の見られる砂礫層であるが、上部にはシルトブロックが多く含まれる地層が堆積していた。この層は人為的に擾乱されている可能性が高く、河岸が人為的に整形されたことを示している。ユニット5も比較的細粒の堆積物で構成されていたが、流路堆積物の中心はトレーン外に存在すると思われる。

このうち注目されるのは、ユニット1の最上部に形成されていた古土壤である。この古土壤は南西側には存在していなかったが、この古土壤に関連すると考えられる58(溝)・59(溝)が検出された。2つの溝は時期が異なっており、58が古く、それが埋没した後に59が掘削されたことが判明した。58北東側の肩部にはシルトブロックが多く含まれる地層が堆積しており、溝に伴う人為的な層と考えられる。また、58の埋土下部は葉理のある砂・シルト層を起源とするブロックによって構成されており、人為的に埋め戻された可能性がある。59は葉理の認められる砂層で埋没していたが、その砂は溝の周囲にも堆積していた。また、その砂はユニット2に属する砂礫に覆われていたが、この砂礫層からは瓦器碗(第10図-7・8)・瓦器皿(第10図-6)が出土した。瓦器碗(7)は和泉型II-1～2期、(8)は楠葉型II-1～2期で、いずれも12世紀中頃のものである。なお、(8)の底面には6本の線を交差させた線刻が施されている。また、ユニット5の上位に堆積していた細砂～極細砂質シルトからは近世の陶器が出土した。この層はユニット5よりも新しい時期の流路から供給された氾濫堆積物である可能性が高い。以上のことから考えて、ユニット2～5は中世に堆積した流路堆積物と考えられる。

なお、地表面下約50cmまでは、トレーン全体に黄灰色細砂～極細砂質シルトが堆積していた。これは何層かに細分でき、それぞれが各ユニットの流路堆積物に連続する氾濫堆積物と考えられる。これらの地層は堆積後に土壌化した可能性があり、溝状に落ち込む部分も認められたため、何らかの土地利用がなされていたと思われる。しかし、層中に細砂の薄層を挟む部分も少なからず認められ、層全体を



第6図 講良郡条里遺跡西地区 トレーン配置図(南西部)

顕著に擾乱するような行為はおこなわれなかつた可能性が高い。また、遺物もほとんど含まれておらず、土器の細片が若干出土したのみである。

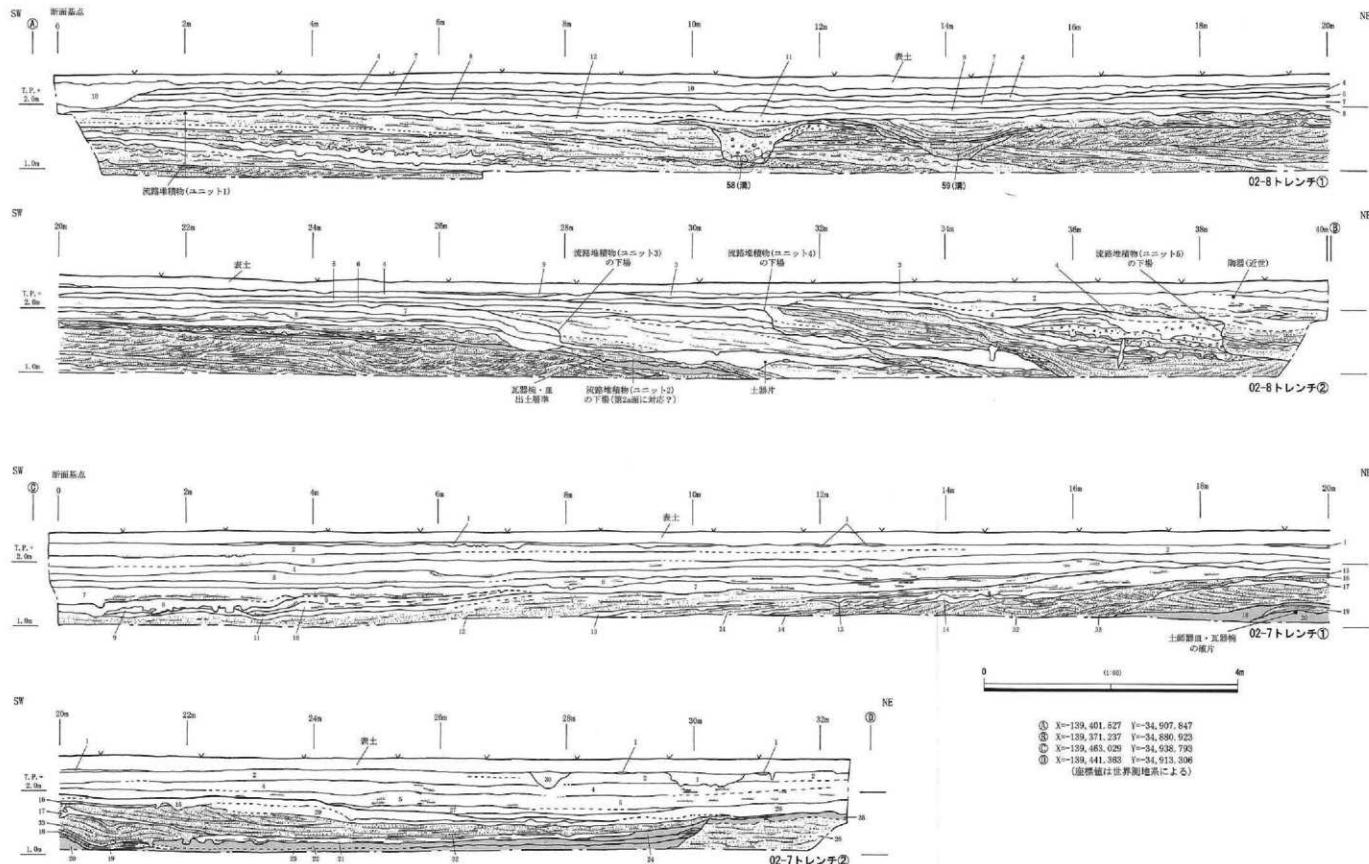
02-7トレンチは、02-8トレンチの南西に位置する。このトレンチにおいても、表土下から約50cmまでは黄灰色細砂～極細砂質シルト層が累重している状況が確認された。これらは02-8トレンチでみられたものと同様、流路から供給された氾濫堆積物と考えられる。これらについても土壤化している可能性があるものの、細砂の薄層を挟む部分も多く認められたため、層全体を顕著に擾乱するような行為はおこなわれなかつた可能性が高い。なお、これらの層準からは、側溝掘削中に近世の陶磁器を含む遺物が若干出土したが、正確な出土層位は不明である。

黄灰色細砂～極細砂質シルト層の下には、砂礫層が堆積していた。トレンチ南西部においては、この砂礫層中に擾乱を受けた可能性のある地層が2層認められた。さらに、砂礫層の下には水田作土層と考えられる擾乱を受けた地層が2層存在していた。これらはトレンチの北東側で確認され、南西に向かって低くなっていた。なお、これらのうち、下の層準の上面では大畦畔状の高まりも存在しており、その部分から、土師器皿や瓦器碗の破片（第10図-12）が出土した。瓦器碗の破片は時期の特定が難しいが、高台の断面形状から12世紀後半～13世紀前半頃のものと考えられる。これらの層準で注目されるのは、トレンチ北東隅において、砂層を削り出して段差を形成した後に、これらの作土層が形成されたという状況が確認されたことである（写真図版1-1）。削り出された砂層は、02-8トレンチで確認された流路堆積物（ユニット1）に連続する可能性があり、流路の堆積活動によって形成された微高地を削り込んで水田開発がなされたと思われる。トレンチの幅が狭かったため地割の方向は断定できないが、トレンチの両壁面を比較した限りでは、南北方向であった可能性がある。なお、上の作土層は細砂の薄層を挟むシルト層に覆われていたが、そのシルト層上面からは人の足跡が検出された。

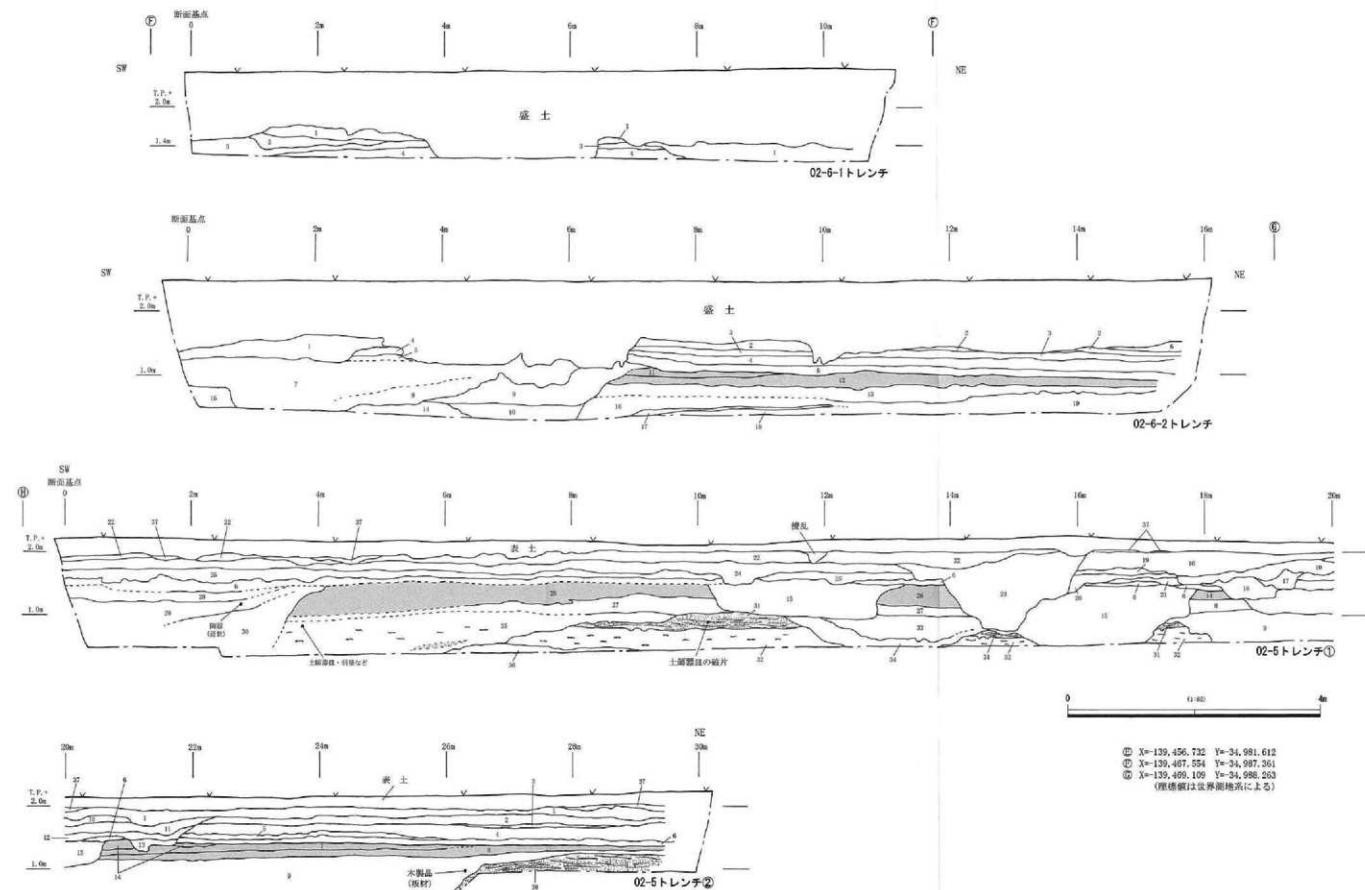
02-5トレンチ・02-6トレンチ（第8図） これらのトレンチは、02-7トレンチの東に設定した。02-6トレンチについては、場内に設置されているフェンスを避けて2つに分割し、北東側のものを02-6-1トレンチ、南西側のものを02-6-2トレンチとした。調査着手前の現地観察では、02-6トレンチについては盛土の厚さが厚く、造成時に擾乱されていることも予想されたが、02-5トレンチを設定した場所は周囲に比べて低くなっている、盛土が堆積していないと思われた。このため、02-5トレンチの層序を基準にして地層のつながりを整理し、層序番号に関しては、後述する02-4トレンチなどの成果もふまえて設定した。

まず、02-5トレンチの状況について説明する。このトレンチにおいては、表土下面に30～50cmの厚さで、砂混じりシルト層がおおむね4層堆積していた。これらの層については一括して第1a層と呼称し、個々の層を呼ぶ場合には第1-1a～1-4a層とした。これらの層にはシルトがブロック状に含まれる部分が多く認められ、人為的に擾乱されたものと考えられる。このうち、第1-1a・1-2a層からは近世以降の陶磁器などが出土した。また、これらの層に間連する土坑や井戸が複数存在しており、特に断面基点から10～22m区間では、複数時期のものが複雑に切り合っていた。さらに、0～4m区間においても第1-4a層下面で幅の広い土坑ないし溝が検出されたが、その中からは近世に属すると思われる陶器が出土した。

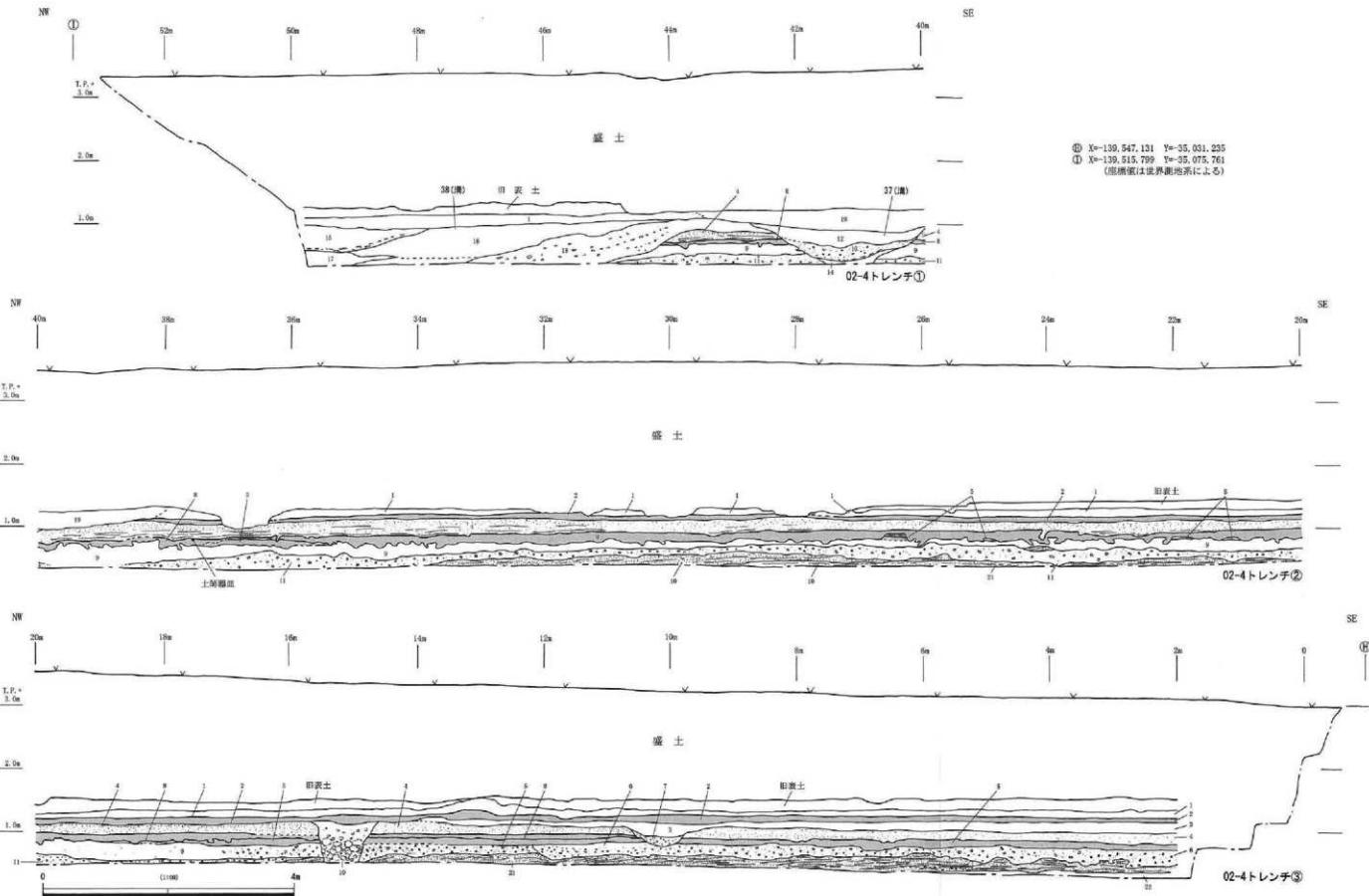
第1-4a層はシルトであるが、堆積後に沈着した酸化鉄の影響によって非常に堅くなっていた。その層の下には、有機物を含んだ砂混じりシルト層が堆積しており、第2a層とした。この層は擾乱を受



第7図 諸良都条里遺跡西地区 02-8・02-7トレンチ断面図



第8図 諸良郡条里遺跡西地区 02-5・02-6トレンチ断面図



第9図 諸良郡条里遺跡西地区 02-4 トレンチ断面図

02-8 トレント

1. 灰黄色 2.5 Y 6/1 極細砂質シルト 下部に極細砂が帶状に入る部分あり Mn粒あり (流路堆積物:ユニット5上部ないしそれ以降の堆積物)
2. 灰色 10 Y 6/1 極細砂質シルト 極細砂・細砂が帶状に入る部分あり Mn粒・うん管状斑駁あり (流路堆積物:ユニット5上部ないしそれ以降の堆積物)
3. 灰色 7.5 Y 6/1 細砂～中砂(北東端)／極細砂質シルト 極細砂～細砂の薄層挟在(南西側)
(流路堆積物:ユニット5に連続)
4. オリーブ灰色 2.5 G Y 6/1 細砂～細砂質シルト
極細砂の薄層を若干挟在
(流路堆積物:ユニット4上部に連続)
5. 黄灰色 2.5 Y 6/1 極細砂～細砂質シルト
(流路堆積物:ユニット3上部に連続)
6. 黄灰色 2.5 Y 6/1 細砂～中砂質シルト
(流路堆積物:ユニット3に連続)
7. 黄灰色 2.5 Y 6/1 シルト 下部に葉理の認められる極細砂が存在する部分あり (流路堆積物:ユニット2上部に連続)
8. 暗青灰色 5 B 4/1 シルトブロックと細砂が混じる
(擾乱?) (流路堆積物:ユニット2に連続)
9. 灰色 7.5 Y 6/1 シルトブロックと細砂が混じる
(流路堆積物:ユニット5ないしそれ以降の堆積物)
10. 黒オリーブ色 5 Y 5/2 細砂～中砂質シルト Mn粒
(流路堆積物:ユニット5ないしそれ以降の堆積物)
11. 黄灰色 2.5 Y 6/1 極細砂～細砂質シルト Mn粒多
(流路堆積物:ユニット2に連続)
12. 黄灰色 2.5 Y 6/1 極細砂～細砂質シルト 11よりも砂が多い (流路堆積物:ユニット2に連続)
※このトレントの流路堆積物・深埋堆積物の記載については本文参照

02-7 トレント

1. 灰色 7.5 Y 5/1 中砂～粗砂混じりシルト 土壌化 Mn粒多い
2. 黒オリーブ色 5 Y 6/2 シルト～極細砂質シルト Mn粒多い
3. 黒オリーブ色 5 Y 5/2 極細砂質シルト Mn粒多い
4. 黒オリーブ色 5 Y 5/2 シルト Mn粒多い
5. 灰色 5 Y 5/1 極細砂質シルト Mn粒多い
6. 灰色 5 Y 5/1 極細砂～極細砂質シルト Mn粒多い
7. 黄灰色 2.5 Y 6/1 シルト 下部に細砂の薄層を挟在 上部はMn粒多い 中部はFe粒多い
8. 灰色 5 Y 6/1 シルト質細砂 下部を中心葉理の認められる部分もあるが、全体として擾乱を受けている可能性が高い (砂とシルトがブロック状に混じる)
9. 暗青灰色 10 B G 4/1 細砂混じりシルト
10. オリーブ灰色 2.5 G Y 6/1 シルト 極細砂～細砂の薄層を挟在
11. 緑灰色 5 B G 5/1 細砂ヒシルトブロックが混じり合う (擾乱を受けている可能性高い)
12. 緑灰色～灰色 5 B G 5/1～5 Y 6/1 細砂シルト 葉理形成
13. 青灰色 5 B 5/1 シルト 極細砂の薄層を挟在する部分あり
14. 灰色 7.5 Y 5/1 シルト 上部に葉理の見える部分あり 下部を中心に極細砂～細砂が混じる部分あり (液状化に伴う変形か?)
15. 灰色 5 Y 6/1 極細砂質シルト
16. 灰色 5 Y 6/1 シルトブロックと粗砂～細砂が混じる (液状化による変形?)
17. 黄灰色 2.5 Y 6/1 シルト 上・下とも亂れ、粗砂～細砂と混じり合う部分もあり (擾乱かどうかは不明)
18. 暗青灰色 10 B G 4/1 シルトブロックと細砂～極粗砂が混じる (擾乱)
19. 青灰色 5 B G 5/1 極細砂～細砂とシルトの互層
20. 暗青灰色 10 B G 3/1 シルトブロックと細砂～中砂混じる (擾乱) (第2a層に対応?)
21. 灰色 5 Y 5/1～4/1 シルト葉理あり 植物遺体片含む
22. 黑色 5 Y 4/1 シルトと極細砂質シルトがブロック状に混じる (擾乱) 水田作土か? (第2a層に対応?)
23. 青灰色 5 B 5/1 極細砂(生体)とシルトブロックが混じる (擾乱) 水田作土か? (第2a層に対応?)
24. 青灰色 5 B G 5/1 シルトブロックと細砂が混じる (擾乱) 水田作土か? (第2a層に対応?)
25. 灰色 5 Y 6/1 極細砂～細砂質シルト 擾乱を受けている可能性あり
26. 灰色 7.5 Y 6/1～灰白 5 Y 7/1 細砂～中砂とシルトの互層 (02-8 トレントの流路堆積物:ユニット1に対応?)

27. 黄灰色 2.5 Y 6/1 シルト～粗砂混じりシルト
 28. 黄灰色 2.5 Y 6/1 シルト
 29. 灰色 7.5 Y 6/1 シルト(主体)・細砂の互層 互層が乱れ、シルトと砂がブロック状に混じる部分もあり
 30. 灰色 5 Y 5/1 シルト～粘土 2.3のブロックが混じる
 31. 青灰色 10 B G 6/1 細砂～中砂 新交層理 シルトの薄層を挟む
 32. 灰白色 5 Y 7/1 粗粗砂～中砂 新交層理
 33. 灰白色 5 Y 7/1 粗砂～細砂 斜交層理

02-6-1 トレンチ

1. 黄灰色 2.5 Y 6/1 中砂～粗砂混じりシルト(第1a層)
 2. 灰色 5 Y 6/1 中砂～細砂混じりシルト(第1a層)
 3. 灰色 5 Y 5/1 中砂～粗粗砂混じりシルト(第1a層)
 4. 灰色 5 Y 5/1 粗砂混じりシルト(第1a層)

02-6-2 トレンチ

1. 黄灰色 2.5 Y 6/1 中砂～粗砂混じりシルト(盛土の一部になる可能性あり)
 2. 黄灰色 2.5 Y 6/1 中砂～細砂混じりシルト(第1a層)
 3. 黄灰色 2.5 Y 5/1 細砂～中砂混じりシルト(第1a層)
 4. 灰色～青灰色 7.5 Y 5/1～10 B G 5/1 中砂～粗砂混じりシルト(第1a層)
 5. 青灰色 10 B G 5/1 中砂混じりシルト(第1a層)
 6. 灰色 5 Y 6/1 粗砂混じり細砂～中砂質シルト(第1a層)
 7. 青灰色 5 B 5/1 シルト、細砂、銀灰 5 B G 6/1 シルトがブロック状に混じる(第1b面道構造土)
 8. 暗青灰色 5 B 4/1 シルト、青灰 10 B G 5/1 中砂～粗砂混じりシルト、細砂～中砂がブロック状に混じる(第1b面道構造土)
 9. 灰色 N 5/0 中砂～粗砂混じりシルト 砂とシルトがブロック状に混じる(第1b面道構造土)
 10. 灰色 5 Y 4/1 粘土質シルトに青灰 5 B 5/1 シルトブロック混じる(第1b面道構造土)
 11. 青灰色 5 B G 5/1 極細砂～細砂質シルト 砂とシルトがブロック状に混じる部分あり(擾乱)(第2a層)
 12. 断青灰色 5 B G 4/1 細砂～中砂質シルト シルトと砂がブロック状に混じる部分あり(擾乱)(第2a層)
 13. 灰色 N 4/0 中砂～粗砂混じりシルト シルトと砂が

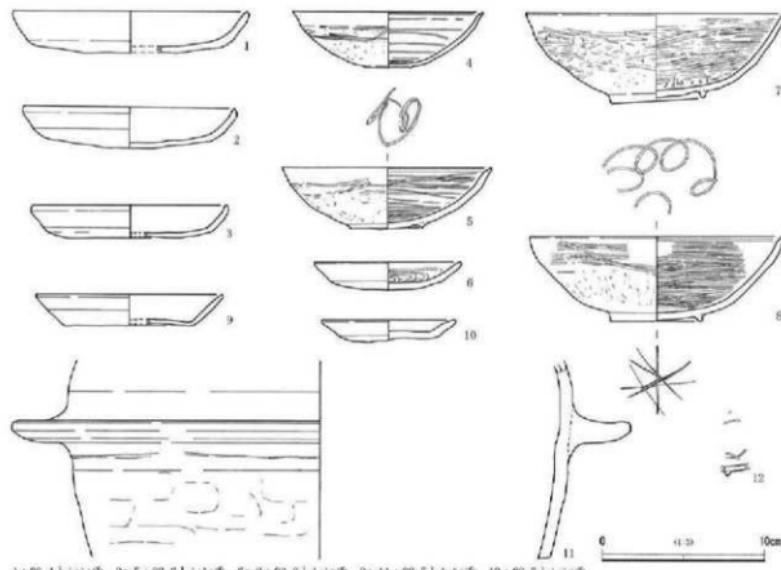
- ブロック状に混じる部分あり(擾乱)(第2a層(F))
 14. 青灰色 5 B 5/1 中砂～粗砂混じりシルト 植物遺体を多く含む
 15. 灰色 7.5 Y 5/1 シルトブロックと中砂～粗砂が混じる
 16. 灰色 5 Y 4/1 シルトブロックと細砂～中砂が混じる(第2b面道構造土?)
 17. 灰色 5 Y 4/1 シルト～粘土質シルト植物遺体含む(第2b面道構造土?)
 18. 灰色 10 Y 5/1 中砂～粗砂にシルトブロック混じる(第2b面道構造土?)
 19. 灰色 N 4/0 粘土質シルトと中砂～粗砂がブロック状に混じる 植物遺体含む(第2b面道構造土?)
- 02-5 トレンチ
1. 灰オリーブ色 7.5 Y 6/2 中砂～細砂混じりシルト 土壌化 Mn粒多い(第1a層)
 2. 灰オリーブ色 7.5 Y 5/2 中砂～細砂混じりシルト 土壌化 Mn粒多い(第1a層)
 3. 灰オリーブ色 7.5 Y 6/2 中砂～細砂混じりシルト 土壌化 Mn粒多い(第1a層)
 4. 灰オリーブ色 7.5 Y 6/2 中砂混じり細砂質シルトと5 Y 6/2 灰オリーブ シルトブロック混じる 土壌化 Mn粒多い(第1a層)
 5. 灰色 5 Y 6/1 細砂質シルト 中砂～粗砂若干混じる Fe粒多い(第1a層)
 6. 灰色 7.5 Y 6/1 シルト Fe粒多い(第1a層)
 7. 青灰色 10 B G 5/1 中砂～粗砂混じりシルト 糸根状～うん管状鉄錆あり(第2a層)
 8. 青灰色 5 B 5/1 中砂混じり細砂質シルト 細砂とシルトがブロック状に混じる(擾乱)(第2a層)
 9. 上部：青灰色 10 B G 5/1 細砂質シルト 細砂とシルトがブロック状に混じる(擾乱)
 下部：灰色 5 Y 4/1 シルトと中砂～粗砂がブロック状に混じる
 灰色 N 4/0 シルト～粘土のブロックが混じる部分あり(第2b面道構造土)
 10. 灰色 5 Y 6/1 中砂～粗砂混じりシルト Mn粒多い(第1a層)道構造土
 11. 灰オリーブ色 5 Y 6/2 シルトブロックと灰色 7.5 Y 6/1 極細砂質シルトが混じる(第1a層)道構造土

12. 灰色 7.5 Y 6/1 細砂～細砂質シルトに灰 N 6/0
～5/0 シルトブロックが混じる 上部は Mn 粒多く、
下部は Fe 粒多い (第 1 a 層中遺構埋土)
13. 灰色 7.5 Y 5/1 細砂質シルトと灰 5 Y 6/1 シルトがブロック状に混じる (第 1 a 層中遺構埋土)
14. 灰色 7.5 Y 6/1 細砂～細砂混じりシルト 握乱を受けている可能性高い (第 2 a 層)
15. 青灰色 5 B 5/1 シルト～粘土質シルトブロックの間に細砂～細砂が入る (第 1 b 層中遺構埋土)
16. 灰色 5 Y 6/1 シルト、灰 7.5 Y 5/1 シルト、中砂～細砂がブロック状に混じる (第 1 a 層)
17. 灰オリーブ色 5 Y 6/2 シルト、灰 5 Y 5/1 シルトがブロック状に混じる (第 1 a 層中遺構埋土)
18. 灰色 10 Y 6/1 シルト～粘土質シルト、灰 5 Y 5/1 シルト～粘土質シルトがブロック状に混じる (第 1 a 層中遺構埋土)
19. 灰オリーブ色 5 Y 6/2 シルトと中砂～粗砂がブロック状に混じる (第 1 a 层)
20. 灰色 5 Y 6/1 シルトと中砂～粗砂がブロック状に混じる (第 1 a 层)
21. 灰色 5 Y 6/1 シルト (第 1 a 层)
22. 灰色 7.5 Y 5/1 中砂～細砂混じり板細砂～細砂質シルト 奥化物・瓦などを含む やわらかく、近現代の地層と考えられる (第 1 a 層最上部)
23. 灰色 5 Y 5/1～N 5/0 シルトブロックの間に細砂～細砂混じる (近現代の井戸埋土、埋土の端にあたっており、井戸の中心はさらに深くなっている)
24. 灰色 5 Y 6/1 細砂～中砂混じりシルト Mn 粒多い (第 1 a 层)
25. 灰色 5 Y 5/1 中砂～粗砂混じりシルト Mn 粒多い (第 1 a 层)
26. 灰色 5 Y 5/1～6/1 シルト～粘土質シルト (第 2 a 層?)
27. 灰色 N 4/0、緑灰 5 B G 5/1 シルト～粘土質シルトブロックが混じり合う (握乱) (第 2 a 层?)
28. 青灰色 5 B 5/1 シルト、粘土質シルト、板細砂～細砂がブロック状に混じる (第 1 b 層中遺構埋土)
29. 灰色 N 5/0 板細砂～細砂とシルトがブロック状に混じる (第 1 b 層中遺構埋土)
30. 灰色 N 6/0～5/0 シルト～粘土質シルトがブロック状に混じる (第 1 b 層)
31. 灰色 N 4/0 粗砂～極粗砂 烹理あり (第 3 b 層)
32. 黄灰色 2.5 Y 4/1 粗植質シルト 植物遺体含む 平行葉理状に腐殖の多い部分が存在 細砂の薄層を挟むする部分あり (第 4 層)
33. 灰色 7.5 Y 4/1 粘土質シルト 細砂質シルトのブロック混じる (第 2 b 層中遺構埋土)
34. 灰色 5 Y 4/1 粘土質シルト 有機物の薄層、粗砂を挟む部分あり (第 2 b 層中遺構埋土)
35. オリーブ黒色 5 Y 3/1 痕植質シルト 植物遺体を多く含む 植物遺体は散漫ながら横倒に並ぶ傾向あり 細砂～中砂も挟在 (第 2 b 層中遺構埋土)
36. 灰色 7.5 Y 4/1 シルト～粘土 有機物、植物遺体含む (第 4 层)
37. 灰色 10 Y 6/1 中砂混じりシルト (表土=現代作土に間連する層)
38. 青灰色 5 B G 6/1 中砂～粗砂 最上部はシルト～細砂 烹理あり (第 3 b 層)

02-4 トレーナー

1. 暗緑灰色 10 B G 4/1 細砂～中砂混じりシルト 細根状斑駁あり (第 1 a 層)
2. オリーブ灰色 2.5 G Y 5/1 中砂～粗砂混じりシルト 細根状斑駁あり 握乱を受けている (第 2 a 層)
3. 灰色 5 Y 5/1 細砂～粗砂質シルト 握乱を受けている可能性あり (第 2 a 層)
4. 灰色 10 Y 5/1 板細砂～粗砂 北西側では上方粗粒化している状況が明瞭に確認できる 東南端付近では粒径が細くなり、シルト質粗砂～中砂となる (第 2 b 層)
5. 灰色 N 5/0 シルト 有機物含む 土壌化している可能性高い (第 3 - 2 a 層)
6. 灰色 5 Y 4/1 シルトブロックと灰 10 Y 6/1 中砂～板粗砂が混じる 人為的に握乱されていると思われる (第 3 - 2 a 層 [下])
7. 灰色 5 Y 4/1 シルトブロックと粗砂が混じる (第 2 b 層中遺構埋土)
8. 灰色 N 5/0 シルトとオリーブ灰 5 G Y 6/1 シルトがブロック状に混じる 人為的に握乱されていると思われる (第 3 - 1 a 層)
9. 灰色 5 Y 4/1 シルトブロックと灰 10 Y 6/1 細

- 砂～粗砂混じる (第3～2a層 [下])
10. 灰色 5 Y 5/1 シルト、灰色 N 5/0・5 Y 4/1
シルトブロックと細砂～中砂が混じる (第2b面土塊土)
 11. 灰色 5 Y 4/1 シルトブロックと灰 10 Y 6/1 粗砂～細砂混じる (第3～2a層 [下])
 12. 灰色 N 4/0 中砂混じりシルトと粗砂がブロック状に混じる 炭化物を多く含む
(第1b面/第2b面37 [清] 地上)
 13. 明オリーブ灰色 5 G Y 7/1 粗砂にシルトブロック混じる 下部に植物遺体の薄層を挟む 炭化物含む (第1b面/第2b面37 [清] 地上)
 14. オリーブ灰色 5 G Y 5/1 シルト 植物遺体含む (第1b面/第2b面37 [清] 地上)
 15. 青灰色 5 B G 5/1 シルト わずかに細砂～中砂が混じる 下部に有機物を含む部分あり
(第1b面/第2b面38 [清] 地上)
 16. 断青灰色 5 B 4/1 シルトと細砂～粗砂質シルトがブロック状に混じり合う
- (第1b面/第2b面38 [清] 地上)
17. 青灰色 5 B 5/1 シルト 有機物含む
(第1b面/第2b面38 [清] 地上)
 18. 灰色 N 4/0 細砂～中砂質シルトに細灰 7.5 G Y 6/1
1 シルトブロック混じる シルトブロックは層の傾きに沿って並ぶ傾向あり
(第1b面/第2b面38 [清] 地上)
 19. 灰色 7.5 Y 5/1 細砂～中砂質シルト 1との境は漸移的であるが、37 (裏) 地上最上部になる可能性もある
 20. 灰色 N 6/0 粗砂～細砂 (第3b層)
 21. 灰色 5 Y 4/1～10 Y 6/1 極細砂～細砂とシルトの互層 植物遺体の薄層挟む (第3b層)
 22. 灰色 5 Y 4/1 シルト (第4層)



第10図 講良郡条里遺跡西地区 出土土器実測図

けており、水田作土層の可能性がある。この状況はトレンチ北東部で認識されたものであるが、南西部では層相が大きく異なり、シルト～粘土質シルトになっていた。ただし、10～22m区間の第1a層関連遺構に切られて地層のつながりが不明瞭になっていたため、北東部と南西部の地層の関係に関しては今後の検証が必要である。第2a層からは、北東部を中心に土師器・瓦器などの細片が多く出土した。

第2a層下面（第2b面）では、幅の広い溝ない土坑が3つ検出された。これらのものは下の砂層を明瞭に切っており、人為的に掘削されたものと思われる。遺構にはシルトのブロックが多く含まれる埋土のものと、植物遺体・有機物の薄層を挟むシルトで埋積されるものがあった。なお、南西隅で検出された遺構の埋土中からは、土師器皿（第10図-9・10）、土師器羽釜（第10図-11）が出土した。土師器皿は13世紀頃のものと考えられる。また、羽釜（11）の現存する下端は二次的に研磨されて水平になっており、何かに転用された可能性が考えられる。

第2b面の遺構の下には栗理の認められる砂層が堆積しており、さらにその下には腐植質シルト層が堆積しているのを確認した。これらはそれぞれ、後述する02-4トレンチの第3b層・第4層に対比される。また、第3b層からは土師器皿の破片が1点出土したが、これは付近から流されてきたものと思われる。

次に、02-6-1トレンチについて述べる。このトレンチでは地表面下約1mの厚さで盛土が堆積しており、盛土を施す際に表土と第1a層の上部が削られていた。機械掘削終了面で土坑が1基検出されたが、周囲の堆積層には土師器や瓦器の細片が含まれていたため、中世の遺構の可能性もあると考えて、これ以上の掘削を取り止めた。しかし、その後に明らかになった02-6-2・02-5トレンチの状況からみて、この層は第1a層に含まれ、土坑も近世以降のものであると思われる。

02-6-2トレンチにおいても、地表面下約1mの厚さで盛土が堆積しており、盛土を施す際に表土および第1a層の一部が削られたことが判明した。第1a層は約50cmの厚さで残存しており、その下に擾乱を受けたと考えられる地層が堆積していた。その中には土師器や瓦器の細片が含まれており、02-5トレンチの第2a層に連続すると思われる。また、その下には下層のシルトや砂がブロック状に混じる地層があり、第2a層（下）とした。これについては第1a層関連の遺構によって切られている部分を除き、全体に存在していたが、層相からすれば02-5トレンチの第2b面遺構埋土に類似しており、遺構の埋土になる可能性もある。なお、第2a層（下）からは土師器皿（図10-2・3）、瓦器碗（図7-4・5）が出土した。瓦器碗はいずれも大和型で、（4）は13世紀前葉～中葉、（5）は12世紀末～13世紀前葉のものである。

02-3トレンチ・02-4トレンチ・02-9トレンチ（第9図・11図） これらのトレンチでは層序が比較的共通していたため、層序対比をおこなって統一した層序番号をつけた。また、それと02-5トレンチの層序との関係についても検討をおこなった。ここでは、02-4トレンチ、02-9トレンチ、02-3トレンチの順に説明したい。

02-4トレンチにおいては、地表面下1.5～2mの厚さで盛土が堆積していた。盛土前の旧表土の下に堆積していた第1a層からは、近世の遺物が出土した。トレンチ北東隅では第1a層下面（第1b面）精査時に溝が2条検出された。ただし、この部分においては第2a層が削られて残っていないかったため、本来は第2b面に帰属するものであった可能性も残る。これらの遺構からは瓦器・土師器羽釜などの破片が多く出土した。また第1a層の下には、水田作土層と考えられる第2a層が堆積していた。この層

からは土師器や瓦器の破片が若干出土した。さらに、第2a層下面（第2b面）では土坑が3基検出された（図9・写真図版2-3）。このうち、平面で確認できたのは39（土坑）のみであり、残り2つは断面で確認された。擾乱を受けた水田作土層と考えられる第2a層は、これらの遺構埋土の上を覆うように堆積しており、遺構埋没後に水田耕作がおこなわれたと推定される。

第2a層の下には氾濫堆積物の砂層が堆積しており、第2b層とした。この層については、トレンチ北西側では粒度が粗かったが、南東へいくにつれて徐々に細かくなり、南東隅ではシルト質細砂に変化していた。この氾濫堆積物に関しては02-5・6トレンチでは確認されていないが、02-5トレンチに近づくにつれて粒度が細かくなり、層厚も薄くなっていくことからみて、02-5・6トレンチにはこの層がほとんど堆積しなかった可能性がある。

第2b層の下には第3a層が堆積していたが、これは擾乱を受けた状況が明瞭に観察され、水田作土層の可能性が高い。なお、この層は西側で第3-1a層・第3-2a層に細分された。第3-1a層からは土師器皿が1点出土した（第10図-1）。

さらに、第3-2a層の下には下層の砂やシルトがブロック状に混じる層があり、第3-2a層（下）とした。その下面是下層を切っている様子が明瞭であり（写真図版2-4）、人為的な擾乱を受けた可能性を考えられる。また、この層の下には葉理の認められる砂層が堆積しており、さらにその下にはシルト層が認められた。前者を第3b層、後者を第4層としたが、前述したように、これらに対比されると考えられる地層は02-5トレンチでも認められた。

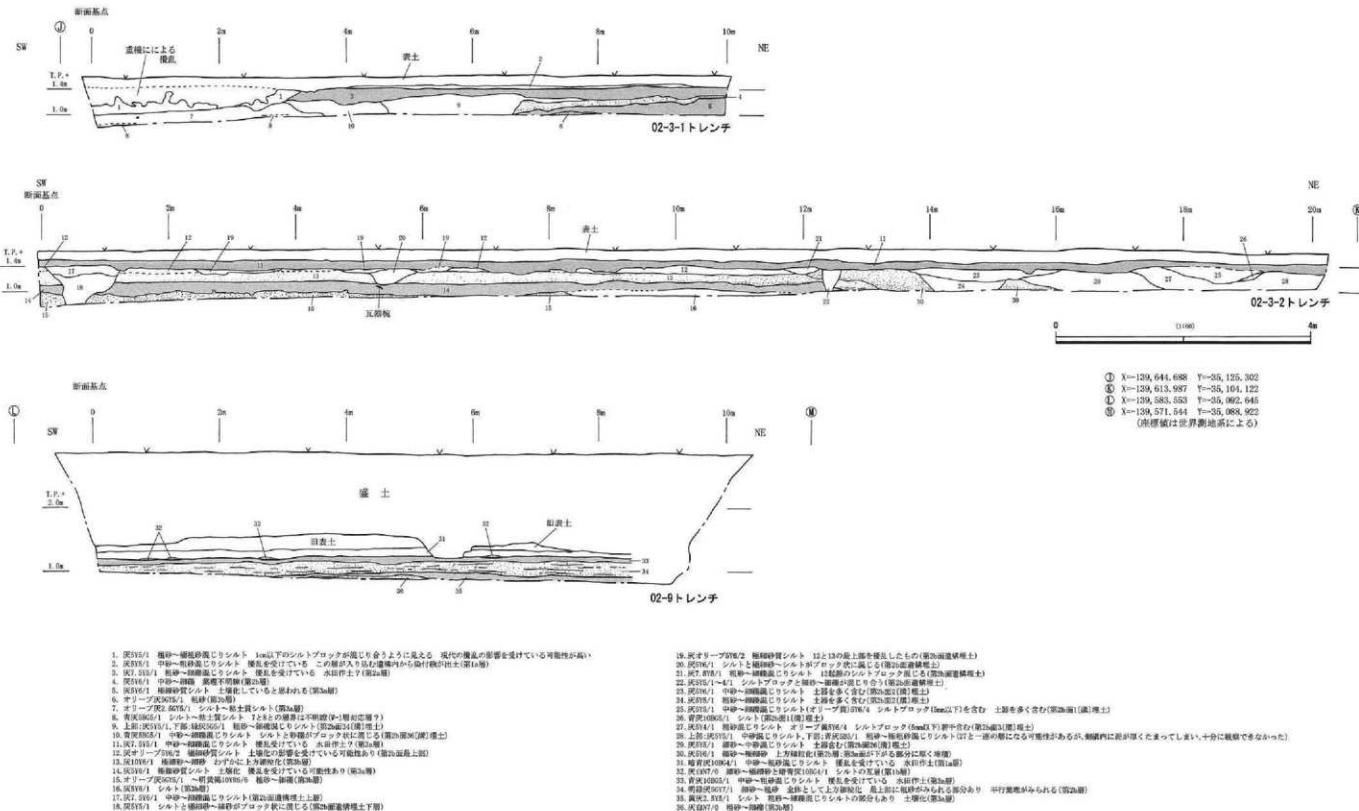
02-9トレンチでは、地表面下1.2～1.5mの厚さで盛土が堆積していた。このトレンチでは第1a層・第2a層・第2b層・第3a層に対比される地層が確認された。このトレンチでは、第2a層下面（第2b面）で南北方向にのびる犁溝が2つ検出された。なお、後述する02-3トレンチにおいて第2b面で遺構が多数検出されたことをふまえて、このトレンチにおいては第2b面で掘削を停止した。また、このトレンチでは出土遺物は少なく、第1a層と第2a層から土師器・瓦器・青磁の破片が若干出土したのみである。

02-3トレンチについては、場内に設置されていたフェンスを挟んで、02-3-1トレンチと02-3-2トレンチにわけて調査した。

02-3-1トレンチでは、表土の下にシルト層が部分的に残存していたが、この層によって埋没した遺構内から近世の染付碗が出土した。のことから、この層は02-4トレンチの第1a層に対比できると思われる。その下には第2a層に対比できる砂混じりシルト層が堆積しており、この層の下面（第2b面）では溝や土坑が検出された（第12図）。なお、トレンチ中央部では溝が切り合っていたが、このうち新しい時期の溝のみを掘削し、古い時期のものは輪郭を確認して調査を終了した。また、このトレンチにおいては、第2a層および第2b面遺構から土師器・瓦器などの破片が出土した。

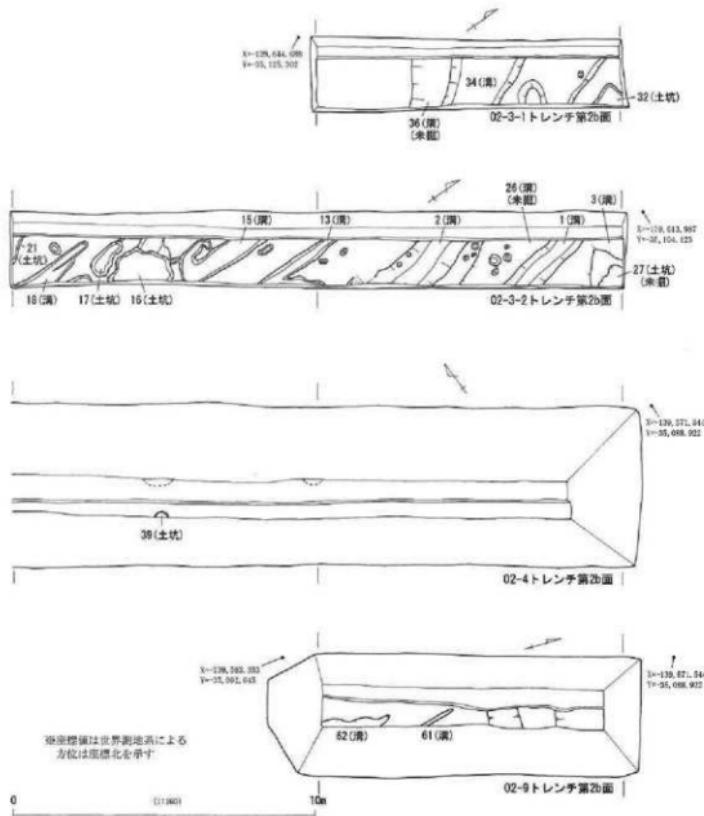
02-3-2トレンチでは第1a層が残存しておらず、表土の下に第2a層が堆積していた。この層には土師器や瓦器の破片が多く含まれていた。第2a層下面（第2b面）ではピットや溝が検出されたが、遺構の埋土の上を第2a層が覆う状況であったことから、遺構が埋没した後に第2a層が耕作され、遺構埋土に含まれていた遺物が巻き上げられたと推定される。

02-3-2トレンチで検出された第2b面の遺構には、ピットや溝がある（図12）。溝は南北方向にのびるものが多い。特に注目されるのは、トレンチ北東部で検出された1（溝）と2（溝）である。これらの溝の埋土には土器が多く含まれており、特に2（溝）のほうからは土師器皿・羽釜、瓦器碗など、



第11図 謙良郡条里遺跡西地区 02-3・02-9トレンチ断面図

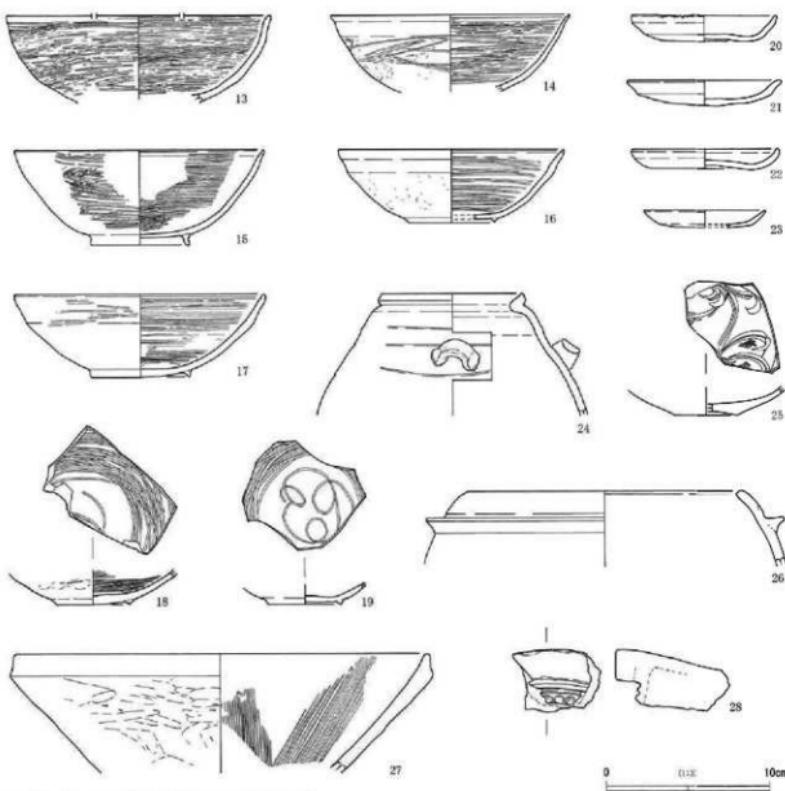
完形に近いものが多く出土した（第13図-14～26）。瓦器壺（14）は大和型第Ⅲ段階A型式の可能性があり、12世紀後葉～13世紀初め頃のものと考えられる。また、瓦器壺（16）は楠葉型Ⅲ-1期（12世紀末～13世紀初頭頃）のものである。なお、瓦器壺（15）は楠葉型Ⅰ-3期（12世紀初頭頃）のものと考えられる。また、（24）は褐釉陶器の四耳壺で、中国福建省～広東省あたりの地域からもたらされたものである可能性が高い。また、（25）は青磁皿である。また、1(溝)から出土したもののうち、図化できたのが瓦質土器擂鉢（第13図-27）、軒丸瓦（第13図-28）であるが、（27）の瓦質土器擂鉢は15世紀前葉のものと思われる。遺構の切り合い関係からみると、1(溝)は3(溝)および26(溝)を切っており、比較的新しい時期の遺構と思われるが、これは瓦質土器の時期が他の遺構出土土器より新しいこととも矛盾しない。1(溝)出土土器は、第2a層が耕作された時期を考える上で重要な資料になる可能性があり、今後さらに検討する必要がある。



第12図 譲良郡条里遺跡西地区 第2 b面平面図

第2 b面より下の状況については断面で観察したのみであるが、第2 b層、第3 a層、第3 b層に対比される地層が確認された。このうち、3-2トレンチでは第3 a層に瓦器碗が含まれていた（写真図版4-2）。この瓦器碗（第13図-13）は和泉型で、12世紀前葉頃のものと考えられる。なお、3-2トレンチの北東部では第3 a層上面が下がっていき、第2 b層の砂礫層が厚く堆積していた。側溝の幅をできるだけ狭くしたため底を確認できなかったが、これについては溝になる可能性もある。また、3-1トレンチの南西部では第3 b層の砂礫が途切れ、代わりにシルト～粘土が堆積していた。砂礫層とシルト～粘土層の関係は第2 b面の溝に切られて不明確であるが、シルト～粘土層に関しては、後述する1トレンチのW-1層に類似することが注目される。

02-1トレンチ・02-2トレンチ（第14図） 02-1トレンチでは地表面下1.2～1.5mの厚さで盛



13: 第3a層 14～26: 第26面2(裏) 27-28: 第2b面1(裏)

第13図 諸良郡条里遺跡西地区 02-3-2トレンチ出土器実測図

土が堆積しており、その下に盛土前の表土が残存していた。このトレンチにおいては砂の堆積は認められず、泥質堆積物が累重していた。この中で特に注目されるのはW-3層で、有機物粒を含み、シルトのブロックが含まれる部分もあった。この層はW-2層と合わせて流動変形しており、変形構造（フレーム構造・ロード構造）が認められた。シルトのブロックも変形構造である可能性もあるが、ブロックが認められた部分ではロード構造やフレーム構造が認められず、層界も肉眼的には水平であったことから、生物擾乱の可能性も残る。生物擾乱が認められるすれば、この段階に水深が浅くなった可能性があり、門真遺跡群と層序対比をおこなう上で重要な意味を持つと思われる。なお、W-2層からは土師器の細片が数点出土した。これらの中には、形状や胎土の様子から、古代以降の杯か皿と思われるものも含まれている。

また、前述したように、02-3-1トレンチ南西部で第3a層の下に堆積していたシルト～粘土はW-1層に類似していた。この対比が正しいとすれば、02-1トレンチでは第3a層以上の地層は削られて遺存していなかったことになる。

02-1トレンチの最下部には、暗色帶のW-5-1層が存在していた。これに関しては古土壤ではなく、抽水植物の遺存体の薄層が集積したもので、腐植を多く含んで暗色を呈していた。また、その下のW-5-2層も植物遺体の薄層を挟在していたが、W-5-1層よりも色調は薄かった。なお、W-5-2層最下部には緑灰色シルトの薄層を挟在する部分もあった。

2トレンチでは、地表面の下に盛土が約2mの厚さで堆積していた。その下には、1トレンチのW-2層に対比される地層が存在していたが、造成時に攪乱され、現代のものと思われる炭化物や繩が混じっていた。その下の堆積状況は02-1トレンチと同様であったが、02-1トレンチよりも下の層準が観察でき、W-5-1層の下に、2枚の暗色帶（W-6-1層、W-7層）が存在することが確認された。これら3つの暗色帶は門真遺跡群や讚良郡条里遺跡西地区01-2調査区においても確認されており、調査地周辺の広い範囲で確認できると考えられる。それらの堆積時期については、門真遺跡群の調査の際におこなわれた年代測定結果から縄文時代晩期～弥生時代と推定されるが、測定データが少ないため、各層準の時期は不明である。このため今回、02-2トレンチのW-5-2層およびW-6-2層の腐植質堆積物を試料として、¹⁴C年代測定（AMS法）を依頼した。その結果については未到着であるため、機会を改めて報告することにしたい。

3. まとめ

今回の調査では、中世における堆積環境の変化と土地開発に関するデータを得ることができた。

02-8トレンチでは流路堆積物が検出され、流路が西から東へ側方移動していく様子が明らかになった。現在の寝屋川の流路は調査地の東に位置していることから考えて、今回明らかになったものは中世における寝屋川の流路と考えられる。なお、このトレンチで確認された流路堆積物・氾濫堆積物は表層における自然堤防を構成するものであり、寝屋川の旧流路の堆積活動によって形成された自然堤防は中世以降に発達したことが明らかになった。ただし、最も古い流路堆積物（ユニット1）に関しては12世紀以前と考えられるが、正確な時期は不明であり、自然堤防の形成が始まった時期については今後の検討課題として残された。また、02-3-6トレンチで確認された第3b層や第2b層は、寝屋川から供給された氾濫堆積物と考えられる。第4層は腐植質シルト～シルトであり、その上に氾濫堆積物である第3b層が堆積する状況は、後背湿地（沼澤地）に河川の影響が及び始めたことを示すものである。

そして、第3 a層・第2 a層に間連する水田や溝などの遺構は、河川の影響によって土地条件が変化した段階になされた開発の痕跡と評価することができる。第3 a層の段階では遺物は少なく、水田作土層と考えられる地層を確認したにとどまっているが、第2 b面では02-3トレンチを中心に遺構が多く検出されており、遺物の量も増える。こうしたあり方が開発の進行過程を示すかどうかについては、今後の検討課題である。いずれにせよ、今後周辺の状況が明らかになれば、中世における北河内地域低地部の開発の様相を理解する上で重要な資料になると思われる。

なお今回の調査では、層序対比に問題が残った。最も重要なのは、02-4トレンチと02-5トレンチの間ににおける、第2 b層の堆積範囲や第1 a層の状況の違いである。また、02-7トレンチと02-5・6トレンチの間も堆積環境が異なっており、層序対比が十分にできていない。さらに、02-1・2トレンチのW-1層は第4層・第3 b層と同時異相をなす堆積物の可能性を考えられるが、上部に第3 a層以上の層準と同時異相をなす部分も存在する可能性を全く否定することはできず、その検証も今後の課題である。

第2節 讀良郡条里遺跡（確認調査 その4）

1. 位置と環境

讀良郡条里遺跡の確認調査について 「讀良郡条里遺跡」は、大阪府寝屋川市と四條畷市の一部にまたがる周知の遺跡である。この遺跡名称は、この地域が旧河内國讀良郡に属すること及び、正方位に近い現在の土地区画が「条里制」に基づくものであろうと推定されることから名づけられたものである。そのため遺跡の範囲は広大であり、東西1.3km、南北2.6kmに及ぶ（第15図）。

大阪府下の条里遺跡については、早くから歴史地理学者の手によって推定案が提示されており、讀良郡条里についても小字名を元に復元が試みられてきた〔註1〕。しかし近年では、発掘調査データの累積により、条里制施行時期についての是非が問われつつある〔註2〕。

讀良郡条里遺跡内における確認調査は、当センターにおいて、これまでにも計3回を実施しており（讀良郡条里遺跡（確認その1・その2・その3））、今回が第4回目である。その範囲は、大阪外環状線（国道170号線）より東側に位置する高宮・小路遺跡の東接地点より讀良郡条里遺跡を南西方向へと横切り、楠根・新家地区を経て讀良川が南下する地点にまで約8kmの距離に及ぶ。設置したトレンチは22箇所を数えるが、その多くから遺構・遺物の出土を確認した。

確認調査（その1）では、丘陵部の裾野より500mの距離にわたって5.2m×4mのトレンチを設けたが、そのほとんどから縄文時代中期の遺物が出土した。これらは個体も大きく、ほとんど磨滅をうけていないことから至近距離において廃棄されたものと考えられ、周辺に同時期の遺構が存在する可能性を強く示唆するものである。確認調査（その2・その3）では、外環状線より新家集落に至る700mの距離にわたって6m×4mのトレンチを設け、低湿地上に広がる弥生時代の水田や古墳時代の周溝墓・土坑等を確認した。当該期の集落が存在したことを示す資料である。尚、これらの成果については、すでに報告を行っており、以上のデータを元とした本調査が昨年度より実施されつつある（第1章参照）。

また、当センターの確認調査以前にも、1989～1992年に大阪府教育委員会が遺跡内において調査を行い、古墳時代中期から中世にいたるまでの集落を確認した。この調査では、5世紀代の井戸材として転用された船材が発見され、反響を呼んだ。また、1993年の寝屋川市教育委員会による発掘調査では、古墳時代中期から後期の集落から大量の製塙土器が出土した（後述）。

すなわち、讀良郡条里遺跡は、遺跡名の由来である条里遺構以外にも、多岐にわたる遺構および遺物の包蔵地であることが明らかとされつつある遺跡であると言える。

調査地周辺の地形と景観 今回の調査対象地は、寝屋川市讀良東町・讀良西町・大成町・萱島地区に含まれる。寝屋川市は淀川左岸地帯に位置し、一般に「北河内」と称される地域である。東には大阪府と奈良県を隔てる生駒山地を控え、これより派生する丘陵地から、西へむかってなだらかにひらく地形を呈する。丘陵からは、讀良川・楠根川・岡部川・清流川などの小河川が源を發して低地へと流入し、市域を南流あるいは西流する。

調査地は低地の中にあり、西流する讀良川が南流に転じて岡部川と合流する地点にあたる。現在では、鉄筋コンクリートによる護岸工事が施され、直線的な流向を強いられている讀良川であるが、改修工事が完了するまでは、しばしば堤防を決壊して流走する暴れ川であったと伝えられており、調査地もその氾濫原に含まれる。現在では、周囲をめぐる幹線道路が大規模な盛土をおこなって整備されていること

に起因して周辺の区画も埋め立てが進められており、原地形が失われつつある状況である。

調査地周辺の遺跡 次に、今回の調査地周辺に位置する遺跡群について、概観したい。讃良郡条里遺跡範囲内および周辺には、これまでにも条里制が関連する遺構に限らず、多岐にわたる時代および性格の遺跡が調査報告されている。

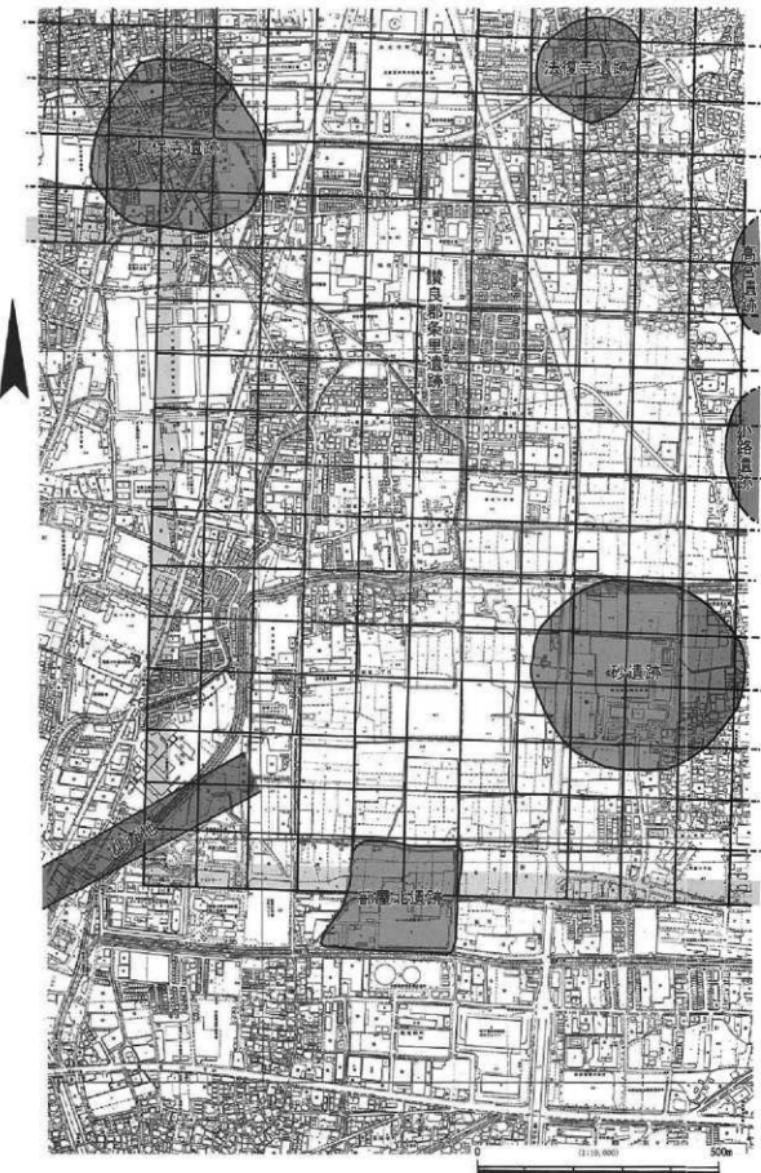
旧石器時代 交野台地の縁辺部には、旧石器時代の遺物が確認されている遺跡が多く立地する。高宮遺跡・讃良川遺跡・忍ヶ丘駅前遺跡からは、翼状削片を加工した国府型ナイフ形石器が出土した。すべて原位置を保つものではないが、この付近が濃密な国府期遺物の分布地であることを示す資料である。

縄文時代 氷温の寒暖によって汀線が大きく変動した時代である。縄文土器の出土は、東に位置する丘陵傾斜地から外環状線までの距離間において多く確認されている。前述の高宮遺跡および小路遺跡では、縄文早期に埋没を開始したと推定される谷が検出され、この周辺から100点余りの土器片が出土した。所持時期は、早期の条痕系土器から後期の中津式までに至るが、北白川下層式・大歳山式に類される前期縄文土器が約7割を占める。また、讃良川遺跡では、中期初頭～後期初頭の貯蔵穴が検出されており、船元式を中心とした土器が多量に出土した。ともに古代河内湾沿いに展開する集落遺跡として貴重な調査事例である。讃良川の南岸に位置する砂遺跡からは、縄文時代中期の船元式を中心とする土器群のほか鷹島式の五角形底部が出土し、地面上に置かれたような状態での石皿、集石遺構などが検出された。また、晩期の滋賀里式深鉢の甕棺や数基の土坑墓も検出された。

なお、昨年度実施した讃良郡条里遺跡確認調査（その1・その2）において出土した縄文土器は、中期～後期に属するものであり、鷹島式・船元II式・星田式に分類される。讃良川遺跡との関係も含め、広範囲にわたりて縄文遺跡が展開していた可能性を示す資料である。

弥生時代 弥生時代には、河内湾は河内潟へと姿を変え、これを眼下に控えた当地には、大規模な水田開発を主業とする集落が展開された。従って集落の主体は丘陵地より低地へと移行したと考えられる。調査地より北へ約1.4kmの地点には弥生時代前期の拠点集落である高宮八丁遺跡が位置している。ここでは縄文時代晩期の滋賀里式・船橋式・長原式に属する土器片が、初期の弥生土器と共に存する例が認められた。出土した弥生土器は畿内第I様式新段階～第II様式を中心とする。この一部には、近江・山城・播磨・東海地域からの搬入土器があり、往時の広域交流を駆けさせた。また一昨年度、確認調査をおこなった新家地区では弥生時代前期に遡る水田遺構を検出し、小畦畔と無数の足跡を確認した。この水田区画は調査地距離間約0.7kmの範囲に及んでおり、広大な耕作面積を有する集落の存在を示唆するデータとなった。なお、新家地区より北西に1km隔てた長保寺遺跡でも弥生前期～後期にいたるまでの土器片が出土している。水田遺構は確認されていないが、弥生集落がある程度の広がりをもって存続した可能性を推測せるものである。

古墳時代 外環状線の西側においておこなった確認調査では、古墳時代初頭期に築かれたと推測される墳丘墓を検出した。胴部に穿孔を施した供献土器を備えるこの遺構は、周辺に連続する可能性が高い。また、墳丘墓のすぐ東側では河川跡を検出し、ここからは庄内～布留式土器並行期とみられる在地產古式土師器を大量に出土した。この地域に古墳時代前期の集落跡が存在したことを確実視させる資料である。調査地より東へ0.5km隔てた蘿屋北遺跡では、近年大阪府教育委員会の調査が進められているが、古墳時代中期（5世紀後半）の木製輪鋸が出土し、乗馬の使用痕が確認された例として報告された。朝鮮半島系の土器片や製塙土器も多数出土しており、生駒山麓から周辺地域にかけて起居した渡来人集団



第15図 講良郡条里遺跡（確認・その4） 調査地周辺の遺跡分布図

と馬の飼育に関する資料として注目されている。また、前述の長保寺遺跡では、14棟の掘立柱建物と群集土坑墓を有する古墳時代後期の低地集落が検出され、初期須恵器や陶質土器が注目すべき出土遺物として報告された。さらに井戸枠に転用された準構造船の舳先の出土があり、当該地域における港湾都市の存在を示唆する事例となった。なお、一昨年度おこなった確認調査では7世紀初頭頃に掘削されたとみられる大型土坑から、口縁を欠いた須恵器提瓶と木製一木鋤が出土した。

古代 前述の高宮遺跡内の丘陵上に位置する高宮廟寺跡は、薬師寺式伽藍配置をもつ古代寺院である。出土した瓦から創建は白鳳時代にまで遡ると推定されているが、寺域の西側では、同時期から奈良時代まで続く集落跡が確認されている。丘陵端部では、大規模な整地跡と大型掘立柱建物跡を検出しており、当該地域に起居した有力豪族の存在を物語る。また、調査地より北東へ1.5km隔てた神田東後遺跡では、黒色土器や灰釉陶器を含む灰原が確認され、土器焼成窯の存在が予想される資料として報告されている。

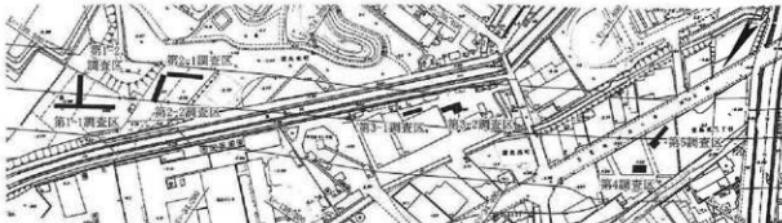
中世 前回までの確認調査では、中世期に所属する遺物の出土は全城にわたって認められたが、いずれも碎片での出土であり、確実な集落跡地を予測するまでは至っていない。しかし、周辺地域において条里に則した水田地割は、13~14世紀頃には確立されていたことが明らかとなってきており、精力的な水田整備が行われた時期として中世村落の動向を捉えることができる。丘陵裾部に立地する高宮遺跡では、昨年度の調査において鎌倉時代の屋敷跡や鳥帽子を副葬した土塚墓等を検出した。少なくとも豪族の居住地は、高地において耕作用水源の確保が可能な地点へ移ったものとみることができる。

以上、近年の調査事例を含めてこの地域の主な遺跡を概観した。各時代を通じ、重要な遺物を包含する地域であることを改めて認識させられる次第である。

2. 調査区の設定

今回の調査では、当初5箇所の調査区設置を予定していたが、埋設物の除去が困難であったために分割を余儀なくされたものや、遺構面の広がりを確認するために新設したものがあり、最終的には計8箇所を数える調査区について掘削をおこなった(第16図)。また、基本的には3~4mの幅と20~50mの長さをもつ長方形のトレーンチを設置する予定であったが、安全上の都合から形状を変更したものもある。実際の掘削は、遺構面の保存を考え、遺構埋土の除去や断ち切り掘削は必要最小限に留めたが、遺構面以下の堆積状況を確認するために、あえて確認トレーンチを設置した地点もあることを記しておきたい。

第1調査区は、調査地のもっとも東側に設置した幅3m×長50mの調査区であるが、地形の変化を確認するために、その南側地点において新たに第1~2調査区を設定した。第2調査区は、第1調査区より60m西側へ隔てた地点に設置したが、やはり地形の変化を把握するために、その北側において第2~



第16図 讀良郡条里遺跡(確認・その4) 調査区設置位置図

2調査区を新設した。第3調査区は、讃良川の堤防北側を造成した地点に建設された工場跡地内に計画したが、建物基礎が深く埋設されていることが明らかとなったため、長さ30mの調査区を分割し、第3-1調査区・第3-2調査区として設置した。第4調査区は、幅3m×長さ20mの規模を計画していたが、盛土が2.5mに及ぶことが確認されたため、幅を6mに広げて掘削を行った。第5調査区も同様の理由から、人力掘削の安全性を考慮して、調査区の形状を鉢型に設定して掘削をおこなった。

3. 基本層序

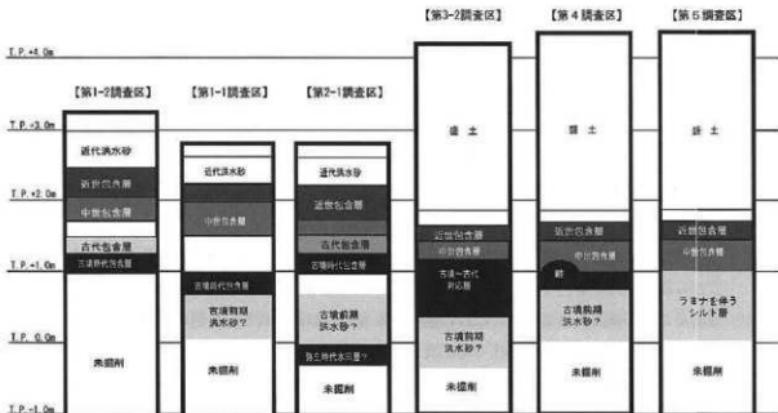
次に、調査成果から得られた土層堆積の基本層序について記述したい（第17図）。

今回の調査地においては、現況地盤の標高が、埋め立てにより著しく変更されているため、讃良川の下流にあたる第5調査区がT.P.+4.3mを測り、もっとも高い値を示す。しかし、府道建設時の盛土を除去した旧地表面においては、第1調査区がT.P.+2.7m、第5調査区がT.P.+1.8mを測り、北東から南西へ向かって緩やかに下降する地形をよみとることができる。第3調査区の旧地表レベルは、第4調査区よりも若干低いが、これは、讃良川の中州にあたることに起因と考えられる。

なお、今回の調査では、すべての調査区において層序の類似性がみられたため共通の層名を付番することができたが、部分的に存在する小層については枝番を付した。

第1層（現代盛土・近現代耕作土・近現代耕作土床土・近代洪水砂 等）

現代における堆積層1-1層と近代洪水砂層である1-2層に大別できる。1-1層は、調査対象土層ではないため、重機において掘削を行った。第1-2調査区の当該層は、粘土質シルトである水田耕作土と床土である。第3調査区では、大規模な造成によって盛られた疊層および盛土である。厚さ2.4mを測る。工場建設時のものと思われるが、改良地盤の沈みこみを防止するため人頭大の角礫を敷き、その上に土砂を嵌入していた。旧表土の軟弱性を窺わせる。第4-5調査区も同様、厚さ2m以上に及ぶ盛土が認められたが、こちらは府道に面する店舗の跡地であり、産業廃棄物の埋設が目立った。



第17図 讃良郡条里遺跡（確認・その4） 基本層序模式図

第1～2層は、厚さ50cm未満の近代洪水砂であり、第1・第2調査区でのみ確認した。ラミナの方向軸は北東から南西方向への流れを示しており、調査区北方を東行する讃良川の氾濫に起因するものと解される。

第2層（近世の水田耕作土層）

第2層は、近世期の耕作土壤であるが、調査区によって層厚が異なり、第1調査区では上下層に細分できた。上層は灰色粘土を主体とする耕作土壤であり、地下水位の関係上、大変軟質であった。部分的にラミナを伴う微砂とカルシウム塊を含む。下層は、やや軟質であるが、上位に搅拌の痕跡をもち、部分的に鉄斑が沈着する。第2調査区からは、陶器擂鉢や染付片が出土したが、遺物の絶対量は少なかった。第4調査区・第5調査区では、細砂を含んだ黄灰色粘土質シルトが近世包含層に相当するが、比較的しまりがよく、畑作用地であった可能性がある。

第3層（中世の遺物包含層・水田耕作土層）

やや褐色を帯びた粘土層であり、植物遺体を多く含むため部分的に黒色化する。第2～1調査区からは須恵器の捏鉢や瓦器碗が出土した。13～14世紀の所産と見られる。層厚は、調査区によって各々異なるが、ほぼ10～30cm程度の厚さをもつ。第4調査区ではこの層の直下に南北方向に走る畦状造構を確認した。第5調査区では、旧寝屋川や讃良川によって運ばれた洪水砂の影響からか、ラミナを伴う細砂の含有率が高い。

第4層（奈良時代の遺物包含層）

第1・第2調査区においてのみ確認できた包含層である（第3・4・5調査区では掘削深度が限界に達したため未確認）。しまりの良い灰色粘土と褐色の強い粗砂まじり粘土を主体とする。川岸に位置する第2調査区では厚さ20cm、川底に近い第1調査区では厚さ50cmを測る。鉄分沈着のため上位が黄色化しており、この層の上位面において一時期安定した地表面を得られたことが推測できる。

第5層（古墳時代後期の遺物包含層）

灰色～オーリーブ灰色粘土質シルトを主体とする層である。第1～1・1～2調査区では6世紀に所産時期を持つ遺物が出土し、第2～1調査区では、5世紀に所産時期をもつ埴輪片が出土した。

第6層（古墳時代前期相当層？）

第2調査区の確認トレチでのみ確認した土壤である。灰白色から濃灰色を呈する粗砂～細砂を主体としており、厚さ1.8mを測る。随所に大きく曲線を描くラミナがみられる。遺物の出土は確認できなかったが、一昨年度の確認調査でも類似した砂層を検出しており、これが古墳時代前期の包含層であることを確認している。

第7層（弥生時代水田耕作層？）

第2調査区において、第6層除去後、検出した土壤である。黒褐色粘土を主体とし、ほぼ水平に広がる様相を見せる。一昨年度の確認調査では、同質の土壤が弥生時代中期に属する水田耕作層であることが確認されており、これに連続するものと推測される。今回の調査では、足跡や畦は確認できなかった。なお、既往の確認調査では、弥生時代相当層の直下には干渉を想起させる湿地状の堆積があり、緑灰色粘土と黒灰色粘土の互層がみられた。また、その下には植物遺体を多く含む粗砂層があり、海生生物の巣穴が確認された。今回の調査地においても同様の堆積層序が連続するものと考えられる。

4. 調査成果

次に、調査区名称の順次に従って、調査成果を記述する。なお、ここで表現した造構面・層の名称は、前述の基本層序にしたがって付番したものである。各調査区において検出した小層は、枝番を付して呼称した。

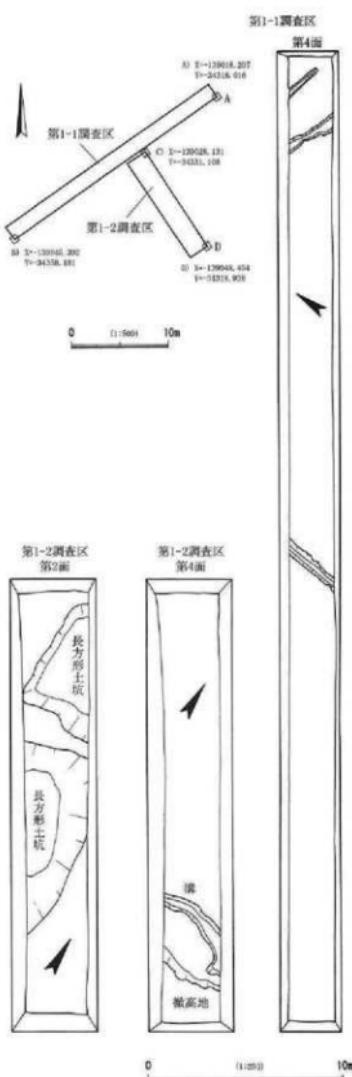
第1調査区（第1-1調査区・第1-2調査区）

第1調査区は、調査対象地のもっとも東に設置したトレンチである。讃良川の護岸堤防下端部より、13～15m南へ隔てた地点に設定した。調査区の規模は幅3m×長50mである。現地表面の標高は、約T.P.+3.0mを測る。第1-1調査区・第1-2調査区とともに、近年まで水田耕作が営まれていた地点にあたる。

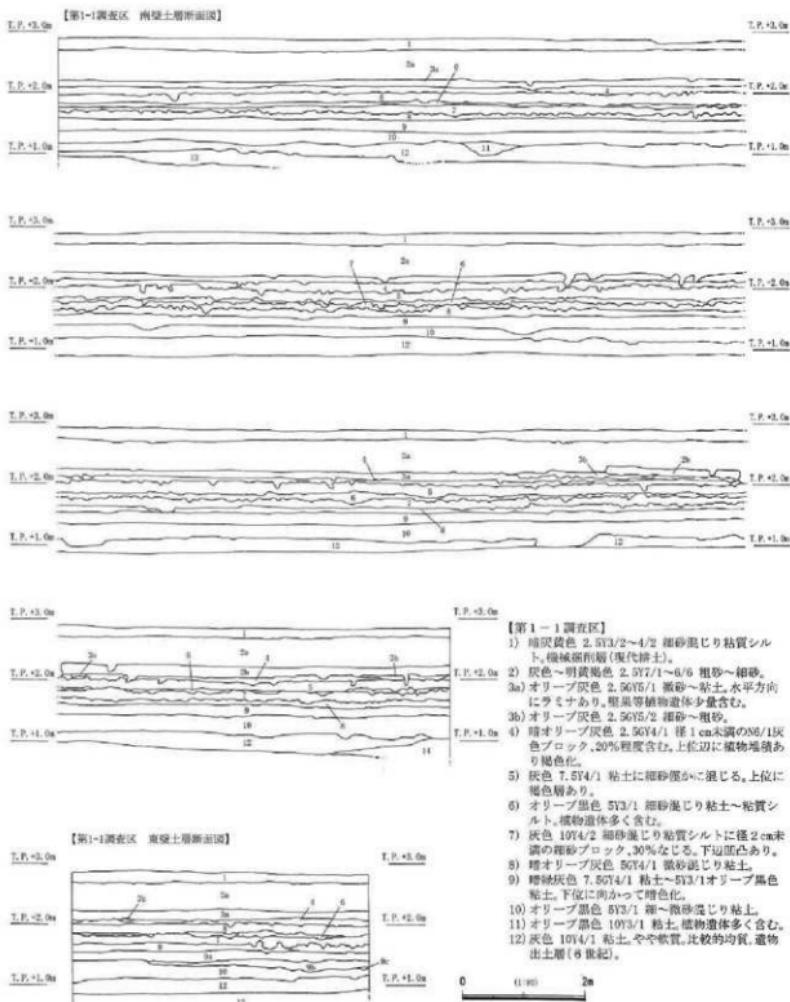
はじめに、現代耕土（第1-1層）の機械掘削をおこない、続いて人力掘削に着手した。現代耕作土の床土を除去したところ、厚さ50cmを測る黄褐色～灰色粗砂の堆積が現れた（第1-2層）。波状ラミナを伴つており、その方向軸は北東から南西へと流れたものであることが推測され、北方を流れる讃良川の氾濫に起因するものと推察される。この層内からは染付の小片が出土した。確認調査（その3）においても同様の洪水砂層が見られ、これが大正期におこった讃良川の氾濫により、堆積した粗砂層であることがわかっている。

なお、第1-2調査区では、この砂層を掘り込んで方形土坑を設けているが、この土坑もまた同様の砂層で埋没していることから、洪水が数年にわたって繰り返されたことが窺える。

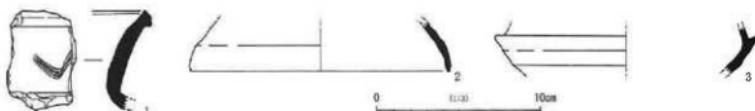
第1-2層を除去すると、軟質の灰色粘土が表れた（第2層）。第2層上面では、第1-1・第1-2調査区ともに、一面に広がる足跡を検出した。第1-2調査区では、一辺6～10mを測る方形土坑を2基検出した。河内平野において検出された近世水田では、長方形の土坑が掘り込まれた例が多く報告されており、今回検出した土坑もこれに類するものであると考えられる。耕作に伴う造構であろうが、詳細は不明である。第2層は、土質から3層に細分でき、上層では微砂による水平ラミナが確認できた。下層は、ややしまりの良い灰色粘土質シルトであり、二枚貝等の貝類やこれが溶解したカルシウム塊などが多く含まれていた。この層からの遺物出土は



第18図 讃良郡条里遺跡（確認・その4）
第1調査区平面図



第19図 講良郡条里遺跡(確認・その4) 第1-1調査区土層断面図

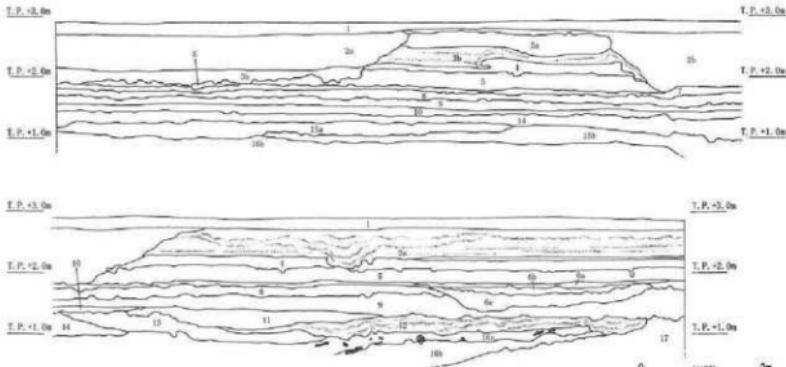


第20図 講良郡条里遺跡(確認・その4) 第1-1調査区出土遺物実測図

なかったが、上下層の関係から近世の水田耕作土であると考えられる。

第2層を除去すると、約10cmの厚さをもつ、やや褐色を帯びた粘土質シルトを検出した（第3層）。葦類と思われる植物の地下茎や炭化した植物遺体が多く含むため、部分的に黒色化する様相が見られる。第1-1調査区からは、13世紀所産とみられる瓦器片が出土した。第3層上面では、若干の足跡が検出できたが、他に顕著な遺構はみられなかった。

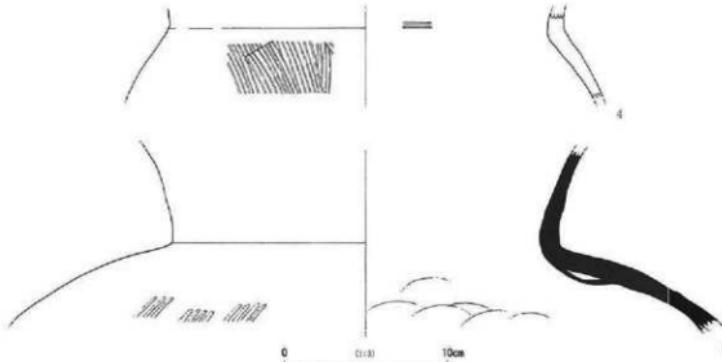
次に第3層を除去したところ、第1-2調査区では、調査区南端に黄色味を帯びた灰色粘土層（第4層）を確認し、これが北へ向かって落ち込む様相が見られた。落込み部分には、植物遺体を多く含むオリー-



【第1-2調査区】

- 1) 砂状黃色 2.53/2~4/2 粘砂混じり堅實シルト・機械運搬土(現代耕土)。
- 2a) 黒色~明黃褐色 2.53/1~6/6 粘砂~粘土、部分的に粘土質。
- 3a) 褐色オリーブ~灰色 1.50/5 坚土、軟質。部分的に黄褐色化。植物体の張り出しによる部分に黒色化。
- 3b) 褐色オリーブ~灰色 0.5/5 坚土。上辺に植物遺体含む。水平方向のラミナリ。
- 4) 黄色 0.50/1 坚土、軟質。堅葉等、植物含む。上辺は有機質含量のため褐色化。
- 5) 黄色 0.50/1 粘砂混じり粘土。植物多く含むため黒色化。しまり感。
- 6a) 黄色 0.50/1 坚土、僅かに粘砂混じる。やや軟質。ほぼ均質。下層に植物遺体少量含む。
- 6b) 黄色 0.50/2 坚土、僅かに粘砂混じる。やや軟質。ほぼ均質。
- 7) 反~次オリーブ色 0.41/1~4/2 坚土。上部黄褐色化。植物、表面で多く含む(8世紀)。
- 8) 褐~次オリーブ色 0.41/1~3/1 坚土。堅葉物多く含む(住居土か?)。
- 9) 黄色 0.40/1 粘砂混じり粘土。やや軟質。僅かに粘砂混じる。
- 10) 黄色 0.40/1 粘砂混じり粘土。軟質。上層より褐色化。
- 11) 黄色 0.40/1 粘砂混じり粘土。やや軟質。僅かに粘砂混じる。
- 12) 黄色 0.40/2 粘砂混じり粘土。僅かに粘砂混じる。上層よりも暗色化。

第21図 謹良郡条里遺跡（確認・その4） 第1-2調査区土層断面図



第22図 謹良郡条里遺跡（確認・その4） 第1-2調査区出土遺物実測図

ブ黒色粘土が堆積していた。また、微高地の終焉部分に、西から東方向へと流れる溝状遺構を検出した。

微高地を構成する黄色味を帯びた灰色粘土層は、その酸化状況から、一定時期、安定した地表面を保った土壤であると考えられる。土層断面では、この微高地層が、北方へ向かって緩やかに下がり、やがて消滅し、湿地状の堆積へと移行する様相が明瞭に確認できた。第2調査区の成果から、この微高地は8世紀頃に機能した生活面であることが判明したが、このことから第1-2調査区の南側に古代の居住域が広がることが立証できた。なお、第1-1調査区では、第1-2調査区で検出した湿地堆積がさらに層厚を増して堆積する状況（第3-2層）が確認できた。この湿地堆積からは、サクラ・カバ・マツ等の枝葉にまじり、土師器坏片が1片出土した。

また、第1-1調査区では、古代遺構面である第4面の上位において、中世遺構面である第3-2面を検出した。これは湿地堆積層の上面にあたる。遺構面はほぼ平坦であり、調査区の中央部と西端部において、正方位に準じた方向性を持つ溝を2条検出した。条里地割に則した水田遺構面として捉えられるが、このことから第1-2調査区で確認した植物遺体を多く含む湿地状堆積は、微高地から約20m程離れた地点においては、耕地開削されていたとみることができる。即ち、中世においても居住地として利用されたとみられる微高地から緩やかに下がる傾斜面上に灌木が茂り、その北側の低地において条里地割を備える水田耕作が営まれた景観を想定することが出来る。第1-2調査区では、この遺構面検出をもって調査を終了した。

第1-1調査区では、以下の堆積状況と包含層および遺構の有無を確認するために、中世遺構面検出後も掘削をおこなった。中世包含層（第3-1・3-2層）を除去したところ、古代包含層（第4層）対応層であると考えられる厚い青灰色の粘土層を検出した。しかし、第4層上面においては遺構の検出は見られず、さらに幅50cm×深さ50cmの確認トレンチを設定して掘削し、下層確認をおこなった。その結果、調査区東端部において、粘土層が途切れで灰色粗砂層へと移行し、この付近（T.P.+1.0m前後）から6世紀に所産時期をもつ須恵器壺片・坏類が出土した（第20図）。

なお、第1-2調査区にも幅50cm×深さ50cmの確認トレンチを設置したが、湿地堆積の下位に細砂まじりシルト層を確認し、これより土師器壺・須恵器壺片が出土した（第22図）。

第2調査区（第2-1調査区・第2-2調査区） 第2調査区は、第1調査区より南西へ70m程度離れた地点に設置したトレンチである。寝屋川公園緑地のすぐ北側にあたり、第1調査区設置地点よりも地表レベルは若干低く、T.P.+2.7mを測る。

基本的な堆積層序は、第1-2調査区と類似しており、現代耕作土の床土を除去した時点で、第1調査区同様に近代洪水砂層（第1-2層）を確認した。第2-1調査区では、この堆積は厚さ30cm未満である。第1調査区ほど顯著なラミナは見られなかったが、水平方向の砂層の重なりが観察できた。

近代洪水砂の直下には、第1調査区同様、軟質の灰色粘土が表れ、続いて第3層（中世包含層）が現れた。しかし、第3層は、後世の擾拌を強くうけており、第2-1調査区の東半部では、ほとんど確認できなかった。第2-1調査区では、第2面において長方形土坑と足跡を検出し、土坑内から染付壺・陶器插鉢・土師器坏が出土した（第27図）。

第3層を除去すると、第1-2調査区と同様、厚さ5cm程度の黄色味を帯びた灰色粘土層（第4層）が現れた。ほぼ平坦面を有する遺構面であるが、第2-1調査区東端部に、ピット状遺構を2基検出した（第4面）。1辺40cmを測る方形を呈し、第3層である褐色粘土を埋土とする。埋土内より須恵質に

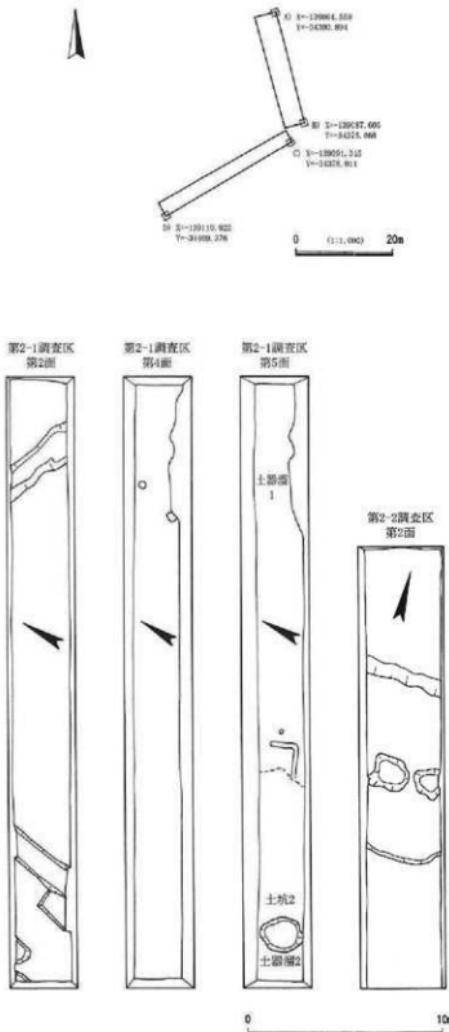
焼成された平瓦片が1点出土した。

第4層の掘削を進めたところ、8世紀に所産時期をもつ遺物が大量に出土した（第28図・第29図）。須恵器の長頸壺・短頸壺・坏身・壺類が多く見られたが、土師器壺片や製塩土器、円筒埴輪片等も含まれており、集落跡と古墳が遺存する可能性が高まった。遺物は調査区の両端部から多く出土したが、第4層を除去した面（第5面）において、調査区の東端に直径1.2mを測る円形土坑を1基、西端に土器溜りを1ヶ所検出した（第25図・第26図）。円形土坑は断割り掘削をおこなわなかったため、下部構造は未確認であるが、井戸である可能性がある。

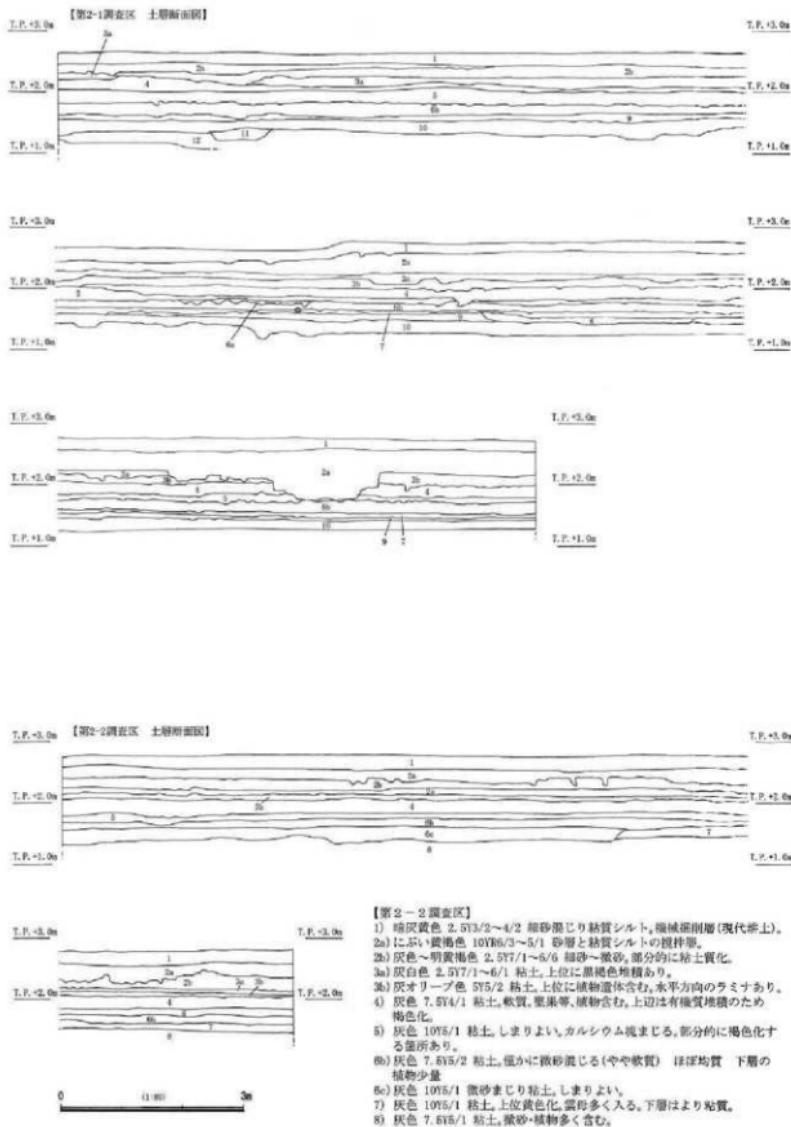
また、調査区中央部において、幅20cmの屈曲する小溝とピット状遺構を検出した。この溝付近の壁断面を観察したところ、炭化物を多く含む埋土を持つ遺構が確認でき、堅穴住居が存在した可能性が考えられた。ほぼ同一遺構面での検出となつたが、土層断面を詳細に観察した結果、この溝とピットは、前述の円形土坑よりも下面から掘り込まれていることが確認でき、時期を異にするものと判断した。即ち、厚さ5cm程度で堆積する第4層の上面に奈良時代の遺構面があり、下面にそれ以前（円筒埴輪の型式より推定して古墳時代中期頃か）の遺構面が存在するといえる。

なお、第4層は、第2-1調査区では全面的に確認できたが、第2-2調査区では南端でのみ検出し、北側へと緩やかに落ち込んで消滅する状況がみられた。これは第1-2調査区から得られた情報と合致するものである。

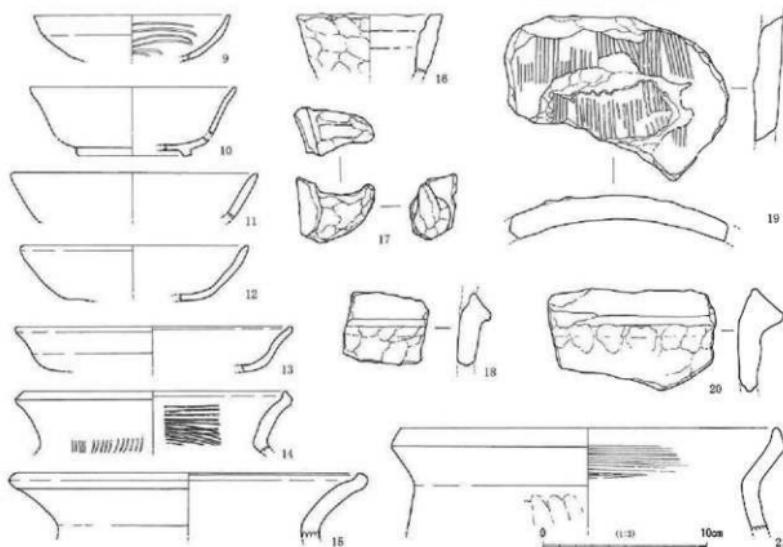
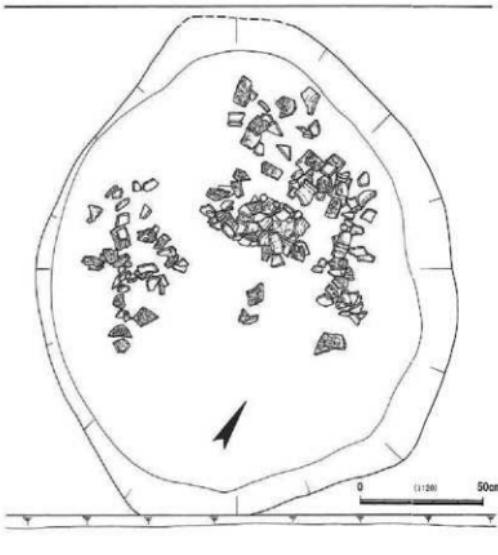
古墳時代および古代の遺構面を検出した段階で、第2調査区の調査は終了したが、第2-2調査区の南端地点において、これ以下の層序堆積を確認するため、一辺1mのトレンチを掘削した。その結果、古墳時代相当層である褐色粘土層（第

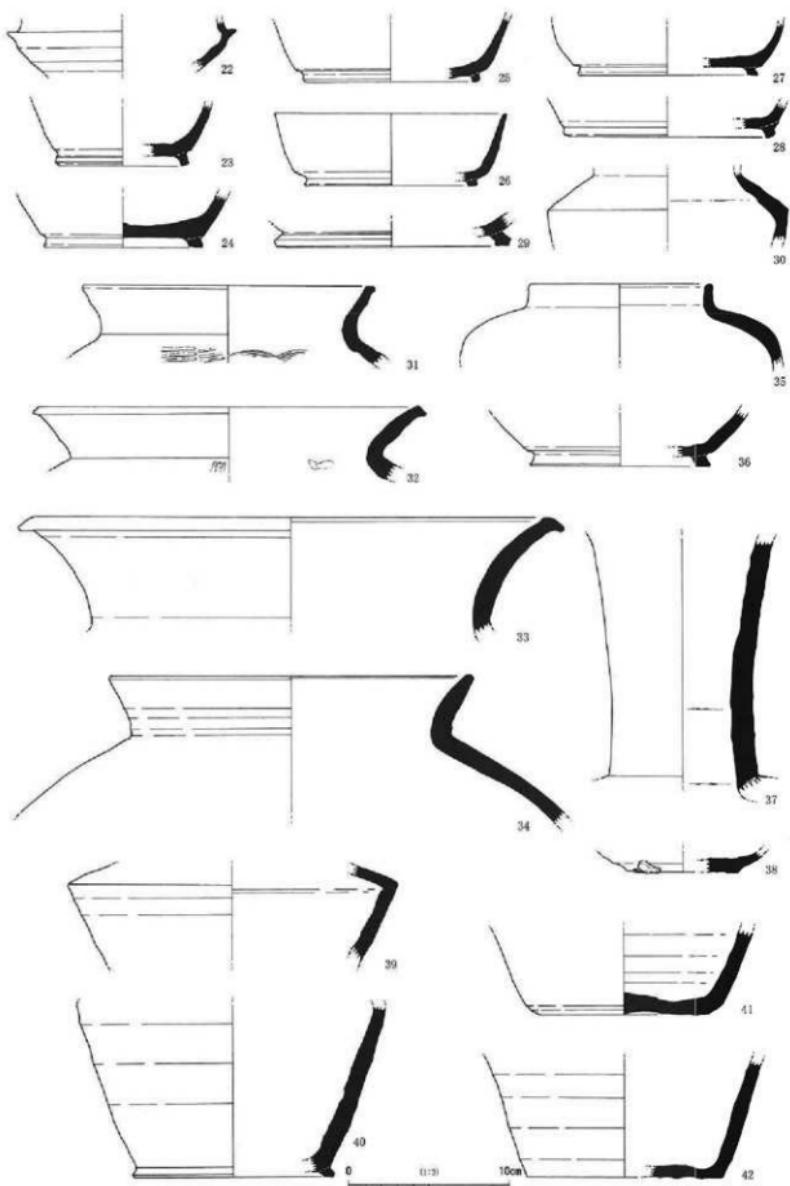


第23図 講良郡条里遺跡（確認・その4）
第2調査区平面図



第24図 講良郡条里遺跡(確認・その4) 第2-1調査区・第2-2調査区土層断面図





第29図 講良郡条里遺跡（確認・その4） 第2-1調査区出土遺物実測図（2）

5層)はT.P.+0.5m付近において細砂混じりとなり、この下に約50cmの厚さを測るラミナを伴う砂層を確認した。また、その直下には黒褐色を呈する粘土層が存在し、これがT.P.-1m付近にまで及んだ。

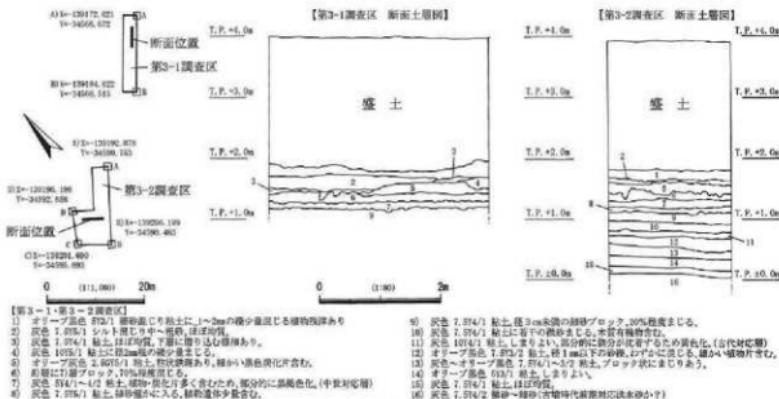
これらは、確認調査(その3)の成果から、それぞれ古墳時代前期の洪水砂と弥生時代中期の水田耕作土に連続する土壤であると推測される。

第3調査区(第3-1調査区・第3-2調査区) 第3調査区は、第2調査区より、西南へ300m程隔てた工場跡地に設定したトレンチである。地表面は建物基礎のコンクリートヒアスファルトで覆われており、レベルはT.P.+3.98mを測る。はじめ、予定通り幅3m×長さ20mの調査区を設定し、機械掘削に着手したが、2.5mを測る盛土が厚く堆積していたため法面の崩落が著しく、幅狭の調査面積では掘削が困難であることが明らかとなった(第3-1調査区)。このため、調査区の西側に、新たに幅6m×長さ10mの調査区を設定し、掘削をおこなうこととした(第3-2調査区)。

盛土敷設以前の標高は、第3-1調査区でT.P.+1.95m、第3-2調査区では、T.P.1.87mを測る。第1・2調査区に比べて1m程低くなるが、これは、この地点が改修以前の藏良川附近であったためだと考えられる。盛土を除去すると、青黑色粘土を主体とするヘドロと粗砂が堆積し、この下に厚さ30cmを測る軟質な灰色粘土層があらわされた(第2層)。遺物の出土は確認できなかったが、第1調査区において確認した近世包含層に対応するものであると思われる。この層は含水率が高く、部分的に細~微砂が混じり込んで、波状ラミナを形成する様子が観察できた。耕作というよりも、常に水分を帯びた不安定な土壤であったと思われる。

第2層を除去すると褐色粘土である第3層があらわされた。10cm程度の厚さでは水平に堆積しており、特に凹凸は認められなかつたが、部分的に炭化物が混じり、黒色化する状況がみられた。

第3層を除去すると、わずかに細砂を含む灰色粘土が厚さ30cmをもって堆積し、この下に第1・2調査区で確認した古代包含層に対応するとみられる粘土層が確認できた(第4層)。部分的に黄色味を帯びるしまりのよい灰色粘土が約5cmの厚さで堆積する状況は、第2-1調査区のそれと近似する。



第30図 譜楽郡条里遺跡(確認・その4) 第3調査区土層断面図

第4層の下には、ほぼ均質な灰色～オリーブ黒色粘土が約50cm堆積し、その直下に灰色微砂～細砂がみられた。この砂層の上位面はT.P.+0.3mであり、第2～2調査区において確認した第6層に対応するものと推測される。この砂層を確認した時点で、第3～2調査区の調査は終了した。

第3調査区からは遺物の出土が見られなかったが、第1・2調査区と類似した堆積層序を示しており、連続する遺構面が存在するものとして捉えることができると考えられる。

第4調査区・第5調査区 第4調査区と第5調査区は、府道21号枚方八尾線の西側地点に設置したトレンチである。はじめ、各々幅3m×長さ20mの規模をもつ調査区を予定していたが、第3調査区と同様に厚さ2.5mを測る盛土の存在が判明したため、形状を変更することとした。第5調査区は調査区の北東端を鉤型に曲げ、上幅6mのトレンチを掘削した。第4調査区は、建物の跡地であるため地下に建物基礎が埋設されていることが予想されたが、その周囲に大量の産業廃棄物が土砂に混ぜ込まれて投棄されていることが掘削中に判明したため、急ぎ敷地内を押振りし、もっとも廃棄物の少ない地点を探して調査区の再設定をおこなった。

盛土敷設以前の旧地表面レベルは、第4調査区がT.P.+1.85m、第5調査区が、T.P.+1.9mである。

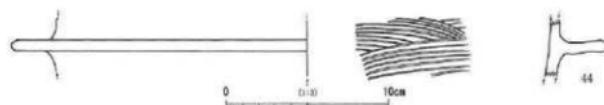
第4調査区の基本的な堆積層序は、第3調査区と大差はない。粗砂を含む粘土質シルトである旧地表土の下には、灰色～灰オリーブ色粘土が約60cmの厚さで堆積していた。近世耕作土である第2層に対応するものとみられるが、第1・第2調査区に比べて上位面の柱状鉄班沈着が目立ち、マンガン粒の混入も多くあった。

第2層の下には中世包含層に対応するとみられる有機物を含んだ粘土層が認められた（第3層対応層）。南壁断面観察において、この層の直下に幅1m程度の盛り上がりがみられ、念のために北側壁面を精査したところ、対応すると思われる粘土層の凹凸が確認できた。両者を図上でつなぎどころ、ほぼ南北方向を示しており、この盛り上がりが畦畔状遺構である可能性が高まった。平面検出が困難であったため断言はできないものの、この近辺において条里地割を導入した水田耕作が、行われていたことが推察される。

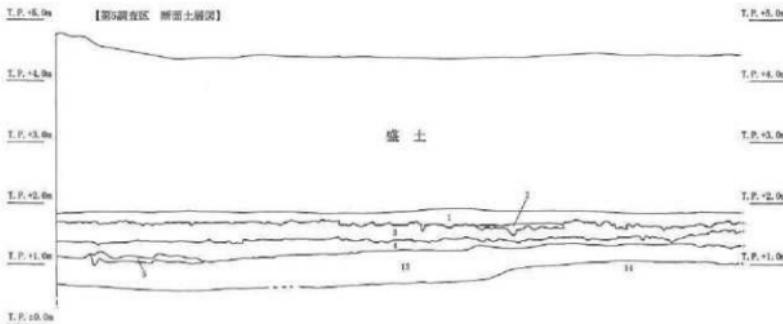
第3層および畦畔状遺構の直下には、微砂を含む灰色粘土が40cm程度の厚さをもって堆積し、その下に植物茎痕を含む中砂～粗砂が認められた。この粗砂層の上位面はT.P.+0.5mであり、第3調査区において検出した粗砂層よりも20cmほど高いレベルを保つこととなるが、共通層とみて大過ないと思われる。第4調査区の確認トレンチ掘削は、この粗砂層の検出をもって終了した。

第5調査区では、旧地表土の下にマンガンを多く含む黄灰色粘土質シルト層があり、つづいて柱状鉄班が顕著に見られる灰色粘土層の堆積があった。第4調査区で第2層に比定した耕作土層であるが、第4調査区の同層よりも酸化度合が強く感じられた。

第2層を除去したところ、水平方向に粘土を筋状に含むシルト～細砂が全面的に認められた。第4調査区では見られなかつた層である。壁面の精査を続けたところ、調査区北東部に第3層に対応すると見られる粘土層が僅かに認められた。この層内から、瓦器羽釜の鋸部が1点出土した。これらの上下関係と堆積状況から、薄い粘土を筋状に含むシルト～細砂層は中世期に形成された堆積と思われる。第5調査区の西側には現寝屋川が横臥しており、この砂質堆積も寝屋川の水流に起因するものと思われる。地形図を参照しても、旧寝屋川が幾筋にも分かれて広い流路帯を保っていたことは明らかであり、第5調査区付近も中世期においてその範疇にあったと考えられる。

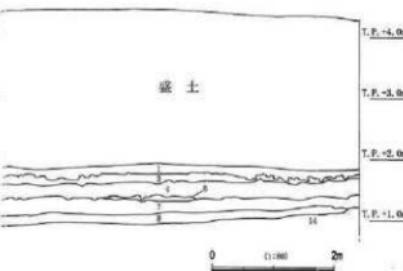


第31図 講良郡条里遺跡（確認・その4） 第5調査区出土遺物実測図



【図32-5調査区】

- 1) オリーブ灰色 1093/1 粗砂まで粘土質土質シルト。
- 2) オリーブ灰色 1094/1 粗砂まで粘土質土質シルト。層5を含む。
- 3) オリーブ灰色 1095/1 粘土に35%未満オリーブ色粘土プロック、50%程度まで粘土質土。マングル状含む。層6以下の砂。
- 4) オリーブ灰色 2. 50%V1/S-1 粘土、(3)の位置。柱状鉢底の沈着泥。
- 5) オリーブ灰色 2. 50%V1 粘土。柱状鉢底わずかに沈着。
- 6) オリーブ灰色 2. 50%V1 粘土。柱状鉢底わずかに沈着。有機物マーブル状に混じる。
- 7) オリーブ灰色 2. 50%V1 粘土。柱状鉢底わずかに沈着。
- 8) 灰色 1095/1 粘土。柱状鉢底・粗粒砂少部分含む。
- 9) 灰色 1095/1 粗砂まじり粘土質シルトに沈着オリーブ色粘土プロック、30%程度まで。
- 10) 灰色 7. 50%V1 粗砂まじり柱状鉢底に粗砂プロック、10%程度まで。
- 11) 灰色 7. 50%V1 粗砂まじり柱状鉢底。
- 12) 灰色 1094/1～4/2 粗砂まじり柱状鉢底や強く、水平方向に弱いテナあり。
- 13) 灰色 1094/1 粗砂まじり柱状鉢底。柱状鉢底・粗粒砂含む。
- 14) 灰色 7. 50%V1 粗砂まじり柱状鉢底。水平方向にラミナあり。
- 15) 灰色 7. 50%V1 粗砂まじり柱状鉢底。



第32図 講良郡条里遺跡（確認・その4） 第4・5調査区土層断面図

第5調査区はT.P.+0.5mの深度まで掘削をおこなったが、砂層が連続する様相を確認したにとどまり、中世以前の対応層は確認できなかった。

5. まとめ

以上、調査区ごとにその成果を述べた。今回の調査は、限られた面積におけるものであったが、予想以上に遺物が出土し、遺構の確認もあった。遺跡の面的広がりを検証する上でも、今後の本調査が期待される地点である。以下、時代を追いながら、調査地全体の遺構の変遷を要約して記述したい。

弥生時代

今回の調査では、弥生時代の遺構面検出はなかったが、既往の調査より、相当すると考えられる粘土層の存在については確認できた。その深度はT.P.-0.093mを測り、周辺の調査事例から見て、およそ30cm程度低い。この地点が当時において最も低い地点であり、河道付近であった可能性がある。

古墳時代後期

今回の調査では、第1・第2調査区から5世紀～6世紀所産と考えられる遺物が出土した。特に第2-1調査区では、大型の円筒埴輪片の出土と竪穴住居と見られる遺構の検出があり、遺構面の広がりが確認できた。この生活面がどう広がるかが問題であるが、この時代の遺構が検出されたことは、南方に位置する藤屋北遺跡との関連もあり、その意義は大きい。

奈良時代

今回の調査では、第2-1調査区において、円形土坑と8世紀所産の遺物が大量に出土した。これには大型の長頸瓶等が含まれており、その特性を考える上でも興味深い資料である。また、第1-2調査区・第2-1調査区の微高地検出・湿地汀線の確認など、当該期における地形の復元について手がかりを得ることができた。今後、微高地における集落発見の蓋然性が高い。

中世

今回、第1・第2・第5調査区から中世に属する遺物が出土した。また、第5調査区を除く全調査区において、有機物を含む中世相当層を確認した。第4調査区では、この中世層の直下において南北方向に走る柱状遺構を検出し、条里地割の導入時期を考える資料となった。なお、第5調査区においては、この層に相当する粘土層が見られなかったことから、当該地点における中世寝屋川の流路帯範囲について、その東限を知ることができた。

近世

今回の調査では全調査区において、近世包含層および相当層を確認した。第3調査区は旧讃良川流路帶に含まれた湿地であったと考えられるが、これ以外の調査区では耕作が営まれていたと考えられる。

〔註1〕 講真郡の条里については、天坊幸彦が1947年に「上代雄峯の歴史地理的研究」の中で「寝屋川附近條里区」を発表したのが最初であり、続いて寺前治一による研究成果と「条里制復元図」が『寝屋川市誌』1966年に掲載されたことで開拓されたところとなつた。

〔註2〕 少なくともこれまで当センターで行った讃良郡条里道路内確認調査では、正方位を基軸とする条里地割の施行は13世紀～14世紀頃とみられ、古代に遡る可能性は低いと見られる。大阪府下には他にも条里遺跡が指定されているが、比較的丘陵縁辺にある摂津国下鶴郡条里（吹田市内）で確認された11世紀初頭の水田面が比較的早い時代の調査事例である。

6. 自然科学分析結果

花粉化石群集 花粉化石群集の検討は、第1-1調査区より採取した試料のうち、以下の3点についておこなった。

- ① Sk-1 第3層中世包含層。オリーブ灰色粘土（粘性高い）で僅かにシルトないし砂を含む。
- ② Sk-2 第4層古代相当層。オリーブ灰色粘土（粘性高い）で褐鉄鉱がやや目立つ。
- ③ Sk-3 第5層古墳時代（5～6世紀）包含層。灰色粘土（粘性高い）。

分析の結果からは、以下の考察が得られた。

- ①アカガシ亜属を主とし、シノキ属などをまじえた照葉樹林が優勢であったと予想される。主要な要素は、針葉樹ではスギ属、イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科、落葉ではクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属であり、モミ属、コウヤマキ属、クルミ属、ハシバミ属、クリ属、ニレ属-ケヤキ属、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ウコギ科なども多少なりとも混じっていたであろう。堆積環境については、抽水植物のミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属の産出から、水位の低い湿地ないし水溜りの存在が予想される。また、ノアズキ属、アリノトウグサ属、ヨモギ属などが生育する日当たりの良い草地もみられたであろう。なお、いわゆる水田雜草のオモダカ属、ミズアオイ属の産出から水田が存在していた可能性も考えられるが、イネ科の出現率がやや低いように思われ、多方面からの検討が必要であろう。
- ②樹木花粉の産出個数が少なく、森林植生について推定することはできなかった。しかし、比較的多産するのは、アカガシ亜属、スギ属であり、5～6世紀の森林植生と大きくは異なる可能性が考えられる。堆積環境については、満たないし抽水性のガマ属、ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモなどの産出から、水田ないし水田に類似した水位の低い湿地・水溜りの存在が予想される。また、浮葉植物のガガブタの産出から、幾分水深のある地点も存在するような水域であったと考えられる。
- ③針葉樹のマツ属複雑管束亞属が急増して卓越すようようになったと予想される。逆に、これまで優勢であった照葉樹林、スギ林は大幅に林分を縮小し、特にスギ林は、イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科と共に殆どみられないような状況になったと考えられる。これは、中世～近世になって、人間活動が活発化し、照葉樹林やスギ林は木材利用などで伐採され、そうした跡地に二次林要素のマツ属複雑管束亞属が林分を拡大したためであろう。マツ属複雑管束亞属以外の主要な要素としては、針葉樹ではツガ属、

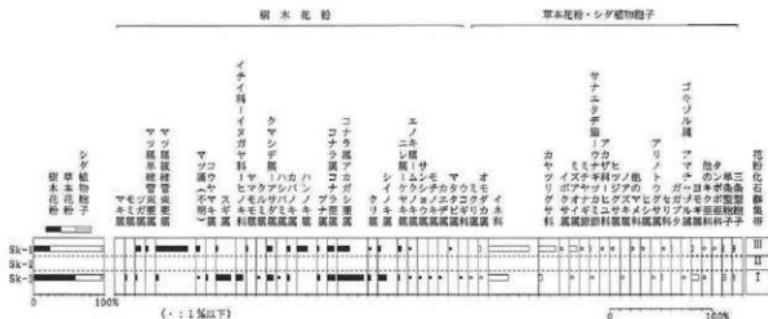


表2 謙良郡条里遺跡（確認・その4） 第1調査区採取資料による花粉化石分布表

落葉ではクマシテ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属であり、ハンノキ属は低地部において湿地林を形成していたであろう。堆積環境については、浮葉植物のヒツジグサ属、ヒシ属、ガガブタの産出から、ある程度水深のある池ないし沼のような水域がみられたであろう。また、イネ科が5~6世紀のI帶に比べて大きく増加しており、いわゆる水田雜草のオモダカ属、ミズアオイ属も随伴する組成であることから、水田が存在していた可能性も考えられる。

新山雅広（バレオ・ラボ）

珪藻化石群集 硅藻化石分析は、上記同様、第1~1調査区より採取した試料3点についておこなった。

今回検出された珪藻化石は、63分類群20属51種2亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め6種群である。堆積物1g中の珪藻殻数は1.23~7.84×104個、完形殻の出現率は約34~43%であった。これらからは沼澤湿地付着生指標種群のCymbella asperaが特徴的に出現し、Eunotia praerupta var. bidensやEunotia pectinalisなどの沼澤湿地付着生指標種群が随伴して出現する。資料①においては広布種が多いものの同様の傾向が認められる。また、少量であるが資料③においては湖沼浮遊指標種群と湖沼沼澤地指標種群が認められた。

讃良郡条里遺跡の堆積物中に含まれる珪藻化石を分析した結果、沼澤地もしくは湿地環境であったと考えられる。今回の資料には、概して珪藻殻数が少なかった。Murakami (1996) では湿原において珪藻殻が消失する現象が報告されている。しかしその原因は明確になっていないため、今回の試料と比較することは不可能であるが、可能性としてそのような原因も考えられる。 黒澤一男（バレオ・ラボ）

〔引用文献〕

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用、東北地理、42, 73~88.

Murakami, T. (1996) Siliceous Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Nagano-yama Wetland in Aichi Prefecture, Central Japan. The Quaternary Research, 35, 17~23.

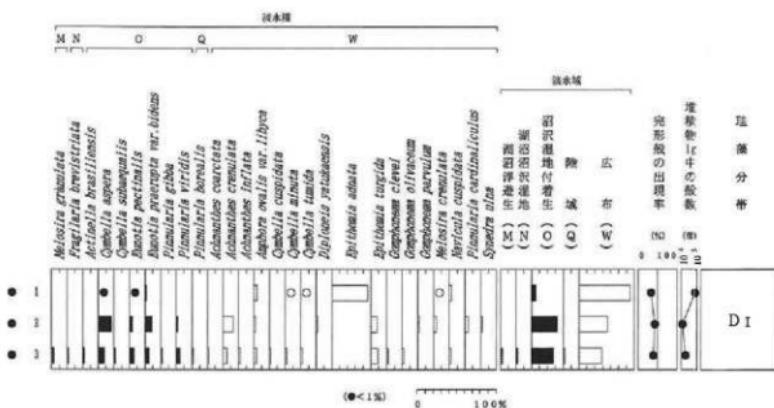


表3 讚良郡条里遺跡（確認・その4） 第1調査区採取資料による珪藻化石分布表

第3節 寝屋南遺跡西地区

1. 調査に至る経緯と調査方法

本調査は第二京阪道路および一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財の確認調査である。調査地は寝屋川市寝屋に所在する幅約75m、延長約650mの範囲で、北端の一部は周知の遺跡である寝屋南遺跡にあたる。調査地の北端部と調査地より南側については、既に平成13年度に当センターによって確認調査が実施されているが、北端の寝屋南遺跡として括られている箇所については、尾根櫛の炭化物や焼土を含む層から、6世紀代の溶着した須恵器や埴輪片が発見されたため、周辺に須恵器や埴輪を焼成した窯跡が存在するかどうかの確認調査を再度行うこととなった。

調査地内は尾根筋とそれに伴う谷筋とが複雑に入り組む起伏に富んだ地形を呈し、その大半は現在竹林となっている。調査に際しては、まず竹の伐開から始め、尾根頂部や尾根筋の平坦部、および尾根斜面に、地形に則して幅2mの調査区を13箇所に設定して調査を実施した。調査面積は714畳、現地調査期間は平成14年12月から翌年3月までである。

まず重機にて表土・盛土を除去した後、人力にて包含層の除去、及び精査を行い、遺構の検出を行った。ただし、尾根の斜面に設けた5トレンチについては、重機の進入が困難であったため、表土層の掘削から埋め戻しまで全て人力にて行った。



第33図 寝屋南遺跡西地区 調査地位置および周辺遺跡分布図

2. 周辺の環境

前記のとおり、調査地の北端部は寝屋南遺跡にあたる。遺物採集地として知られてはいるが、これまで顕著な遺構は確認されていない。たち川を挟んで北側の丘陵上に位置する寝屋東遺跡では、平成14年度に本格的な発掘調査が実施されており、7世紀の掘立柱建物跡が十数棟確認されている。調査地南西側の大尾遺跡でも同時期の建物跡が、南側の打上遺跡では8世紀の掘立柱建物跡が、共に十数棟確認されており、寝屋南遺跡にも古代の集落が広がっていることが十分予想された。また、周辺には北河内最大の横穴式石室をもつ寝屋古墳や太秦1号墳、廻シ塚古墳などが点在し、西側には太秦高塚古墳（トノ山古墳）に代表される太秦古墳群が広がっている。平成13年度にはその一画の尾支群の調査が実施され、5世紀後半の前方後円墳1基、円墳1基、方墳11基が検出されている。今回の調査地内にも丘陵の尾根筋が筋筋ものびており、尾根上からは古墳が確認されることも期待された。



第34図 寝屋南遺跡西地区 調査地周辺古墳分布図

3. 調査成果

1 トレンチ（第36図） 調査地北端の谷部に位置する。尾根筋に挟まれた狭い谷地形を呈するが、現状は平坦で、隆光学園のグラウンドとして利用されている。2×18mの調査区を谷筋と直交する向きに設定し、機械掘削を行った。しかし調査区の両端でG.L.-3.4mまで掘削しても地山を検出することは出来なかった。層序はグラウンド整地層の下にアスファルトがあり、それより下が焼却灰などの産業廃棄物となる。おそらく地山まで同じ状況がつづくものと思われる。それ以下を掘削しても、遺物包含層や遺構が検出される可能性は非常に低い。

2 トレンチ・3 トレンチ（第37図） 1 トレンチ南側の尾根の頂部に位置する。ここは寝屋東遺跡の範囲内であり、地形的にも平坦であることから、遺構が検出される可能性が高かった。また平成13年度調査では、この尾根の南側斜面で、6世紀代の溶着した須恵器や埴輪片が発見されており、周辺に窯跡が存在する可能性が指摘されていた。以上の確認を行う目的で2箇所に調査区を設定した。3 トレンチは平成13年度の調査区の東側に近接して、2×90mの調査区を南北-北東方向に、2 トレンチは3 トレンチの東側に約26m隔て、2×40mの調査区を3 トレンチに並行して設定した。基本的な層序は両トレンチとも同じで、20~30cmの表土層の下に、にぶい黄色粘質土が約10~15cmあり、以下が地山となる。また北端部は北に向かって地山が落ちており、地山上には赤褐色粘質土が堆積する。

3 トレンチでは掘立柱建物跡1棟、ピット数基のほか、南端部で深い落ち込みを検出した。掘立柱建物跡は地山上面での検出であったが、北端部ではにぶい黄色粘質土の上にのる赤褐色粘質土の上面でピットを検出していることから、実際にはにぶい黄色粘質土の上面から検出できるものと思われる。ただしにぶい黄色粘質土の上面は、近・現代の擾乱で乱れており、遺構検出が難しい。掘立柱建物跡は調査区のほぼ中央部で検出した。並行して並ぶ柱列を2条検出しており、この2条を南北の側柱筋とする桁行4間以上の東西棟に復原できる。柱穴はいずれも隅丸長方形で、深さは15cm以上ある。柱間は2.0m等間である。妻柱筋は検出していないが、両柱列が4.4m隔てることから、梁間は2間で、柱間は2.2m等間になるものと思われる。遺物が出土しないため、遺構の時期は特定できないが、同規模の建物跡は近接する寝屋東遺跡や大尾遺跡からも検出されており、おそらくそれらの遺跡と同じ7世紀中葉から後葉にかけての建物跡であったと推測される。このほか建物跡としてはまとまらないピットを数基検出した。遺構の輪郭が明瞭に検出できるものと不明瞭なものがある。掘立柱建物跡より南方で検出した数基（図面に破線で表現）は、その後者であり、遺構というよりは単なる窪み、あるいは地山のシミであった可能性もある。ただし、前者のピットも確実に存在しており、周辺に遺構が広がっていることは確實といえる。調査区南端で検出した落ち込みは、南北約14m、深さ約1.3mを測る大規模なものである。尾根筋を分断しており、人工的に築かれたものであることは間違いない。底面全体には黄灰色粘質土が約10~15cmあり、南半部は地山ブロック土を含む黄褐色粘質土や明黄褐色粘質土によって埋められている。北半部の埋土が暗灰黄色砂質土など全体に汚れていることから、溜池であったと考えられるが、ヘドロ状の堆積は認められない。13年度の調査で、溶着した須恵器や埴輪を検出した谷筋のちょうど東側延長部に位置しており、それに関係する遺構であった可能性もある。

以上のように、3 トレンチでは遺構が検出されているが、同じ尾根上の2 トレンチでは遺構は全く検出されていない。赤褐色粘質土の上面では、3 トレンチでも見られたような輪郭が不明瞭なピット状の変色部を検出しているが、いずれも若干の掘り下げによって消滅するものであり、遺構として認められ

るものではなかった。2トレンチと3トレンチとの間には段があり、2トレンチ側が一段低くなっている。この時の造成によって、2トレンチ側の遺構が削られた可能性が高い。

4トレンチ・6トレンチ（第36図） 2・3トレンチを設定した尾根から南に下りた谷部に位置する。4トレンチは谷筋にはほぼ直交する向きに、6トレンチは谷筋とはほぼ並行する向きに、それぞれ $2 \times 31\text{m}$ 、 $2 \times 14\text{m}$ の調査区を設定した。両トレンチから、表土層とその下の褐色シルト～粘質土を除去した面で谷の肩を検出した。谷の肩は4トレンチでは北端から約4m付近に、6トレンチでは東端から約6.5m付近に位置する。谷の埋土は両トレンチとも基本的に同じで、砂礫を含む褐色粘質土や同砂質土などである。埋土中からは陶磁器類が出土している。このほか顕著な遺構は検出できなかった。周辺に遺構が広がっている可能性は低い。なお6トレンチの中央付近から西側には溜池状の深い落ちがあり、完全に産業廃棄物で埋め立てられていることが確認された。

5トレンチ（第36図） 4トレンチ南側の尾根斜面に位置する。斜面の下方には雄塙造成による高低差約1.9mの段があり、この段に直交する $2 \times 16.6\text{m}$ の調査区を設定した。層序は表土層の下に明赤褐色粘質土が薄くあり、上段側ではそれ以下が直ちに平坦な地山となる。明らかに切土造成されたものである。段付近で本来の地山斜面が現れるが、切土した土で埋めて、高く段を築いている。下段側でも谷側は斜面を埋めて平坦に整地している。なお、明赤褐色粘質土は水田床土であり、この造成が水田開発に伴うものであったことがわかる。造成される以前の地山上には遺構はなく、周辺に遺構が広がっている様子もうかがえない。

7トレンチ（第36図） 5トレンチから斜面を上った尾根の頂部に位置する。この頂部には $25 \times 30\text{m}$ 程の平坦部が広がっており、その中央部に $2 \times 16\text{m}$ の調査区を南西～北東方向に設定した。層序は上から表土、砂礫を含むにぶい黄褐色粘質土、砂礫を含む赤褐色粘質土で、以下地山となるが、南半には表土層の下ににぶい黄褐色粘質土が堆積する。地山までの深度はG.L.-70～80cmである。遺構・遺物は確認できなかった。なお北斜面への落ち際で、何らかの遺構が検出される可能性があったため、北端部から3m隔て、 $2 \times 2\text{m}$ の調査区を追加し調査を行ったが、ここでも特に顕著な遺構は確認できなかった。

8トレンチ（第36図） 7トレンチを設定した尾根の南斜面に位置する。 $2 \times 25\text{m}$ の調査区を等高線に直交する向きに設定した。南端部は谷底にまで及ぶ。斜面の勾配は約 16° で、表土層の下に砂礫を含む暗灰黄色砂質土が堆積する箇所もあるが、基本的には表土層除去後の面が直ちに地山となる。なお、南端の谷底部には表土層と地山との間に黄褐色砂質土が60cm程度堆積する。遺構・遺物は確認できなかった。

9トレンチ（第38図） 7・8トレンチ南側の尾根の北斜面に位置する。谷部から「奥山」と呼ばれる尾根の頂部にまで達するように、 $2 \times 74\text{m}$ の長い調査区を等高線に直交する向きに設定した。斜面の角度は下方では約 6° と緩やかであるが、上方は約 14° と若干きつくなる。尾根の頂部は平坦となる。かつて筍畠であったため、斜面の数箇所に造成時の段が残る。尾根頂部では表土とその下の暗灰黄色粘質土および地山ブロック土を含む明褐色粘質土を合わせて約60cm除去した面が直ちに平坦な地山となるが、

斜面部は苟畠の盛土が厚く堆積する。丘陵頂部の肩から下方約22m付近までは、G.L.-0.8~1mで地山が検出できるが、それより谷側は地山が急激に落ちており、G.L.-2m以上掘削しても地山は検出できない。苟畠の盛土は灰黄褐色砂質土や浅黄色砂質土、地山ブロック土を含むにぶい褐色砂質土などである。特に顯著な遺構は検出できなかったが、「奥山」と呼ばれる尾根上では古墳が検出されており(11トレンチ)、この尾根の北側の肩部が確認できたことは重要な成果であった。なお、苟畠の造成土からは陶磁器が数点、上方の地山上面から須恵器片1点が出土している。

11トレンチ・13および10トレンチ(第39図) 「奥山」と呼ばれる尾根の頂部に位置する。この尾根筋は寝屋古墳側から太秦1号墳に向けてのびるものである。公園の脇には古墳の石室に使われていたと思われる石材が散在しており、尾根上には古墳が点在していることが予想された。11トレンチは尾根筋にはほぼ直交する向きに2×44.5mの調査区を設定した。13トレンチは2×11mの調査区で、11トレンチの東側にT字に取り付く。10トレンチは11トレンチの西側に約13m離て、2×14mの調査区を11トレンチと同じく尾根筋と直交するように設定した。基本的な層序は約20cmの表土層の下に、10トレンチでは黄褐色砂質土が約20cm、11・13トレンチではにぶい黄褐色～黄褐色粘質土が約10~20cm堆積する。以下、明黄褐色粘質土が約20~30cmあり、地山となる。

11・13トレンチでは明黄褐色粘質土の上面で古墳を1基検出した。11トレンチの北端部に墳丘西端の一部がかかり、13トレンチには周溝がつづく。墳頂部の輪郭が弧を描いていることから、円墳であったと考えているが、弧の外側に一部造り出しと考えられる突出箇所が認められることから、帆立貝式の古墳になる可能性もある。周溝埋土の上面で検出できる幅30~50cm程の黒褐色粘質土の帯も、この造り出し部の影響で外側に寄っている。周溝の幅は造り出し部側で約8mあり、もっとも外側には地山ブロック土を多く含むにぶい黄褐色粘質土が、幅約2mの範囲で確認できる。周溝帯である可能性もあり、注意しておきたい。深さは底まで確認できなかったが、北端部では85cm以上はある。埋土には黒褐色系の層と黄褐色系の層が交互に堆積し、前者が3層あることが確認できる(写真図版14)。周溝内から6世紀末の須恵器がまとめて出土した。壺、壺、長脚二段透かしの高壺などである。墳丘の規模は、墳頂部の肩では直径約11m前後であるが、墳丘裾では直径約15m前後に復原できる。

10トレンチでは特に顯著な遺構は検出できなかったが、古墳が検出される明黄褐色粘質土層が11トレンチ同様に堆積しており、古墳がさらに西側にも広がっていることを示唆する。

なお、11トレンチでは北端から約22mの地点、10トレンチでは約10mの地点で、産業廃棄物によって埋め立てられた谷の肩を確認することができた。この谷はかつて「木山谷」と呼ばれていたが、寝屋川公園の整備によって大部分が埋め立てられている。その肩部は現地形に僅かな段として残っており、東の寝屋川公園側から10トレンチ付近まで続いている。この肩部を確認したことにより、古墳が立地する尾根筋の輪郭をほぼ確定することができた。

12トレンチ(第38図) 「奥山」と呼ばれる尾根の南側平坦部に位置する。10・11トレンチで報告したとおり、寝屋川公園の整備によって埋め立てられた「木山谷」と呼ばれた谷部にあたる。等高線とほぼ並行するように2×20mの調査区を設定した。層序は表土層の下が暗灰黃褐色砂質土(近世以降の瓦含む)、地山ブロック土を含むにぶい黄褐色砂質土などで、以下地山となる。地山までの深度は北壁際で約0.6m、南壁際では約1.3mを測る。これによって地山が調査区に直交する向きで落ちていることが確認さ

れた。その角度は約25°である。

地山上面で焼土坑を1基検出した。直径約35cmの円形を呈し、深さは深い部分で約10cmを測る。壁面は被熱によって赤褐色に変質し、底には炭が2~3cm堆積する。ただし遺物が出土しておらず、時期は特定できない。北側壁面では近世以降の瓦を含む暗灰黄色砂質土層直下で、焼成造構と思われる造構を検出しており、それと同時期の造構である可能性が高い。なお、調査区の西半には調査区を横断する谷筋が1条ある。幅10m以上、深さ2m以上を測る。人為的な溝ではなく、明らかに自然の形成によるものである。

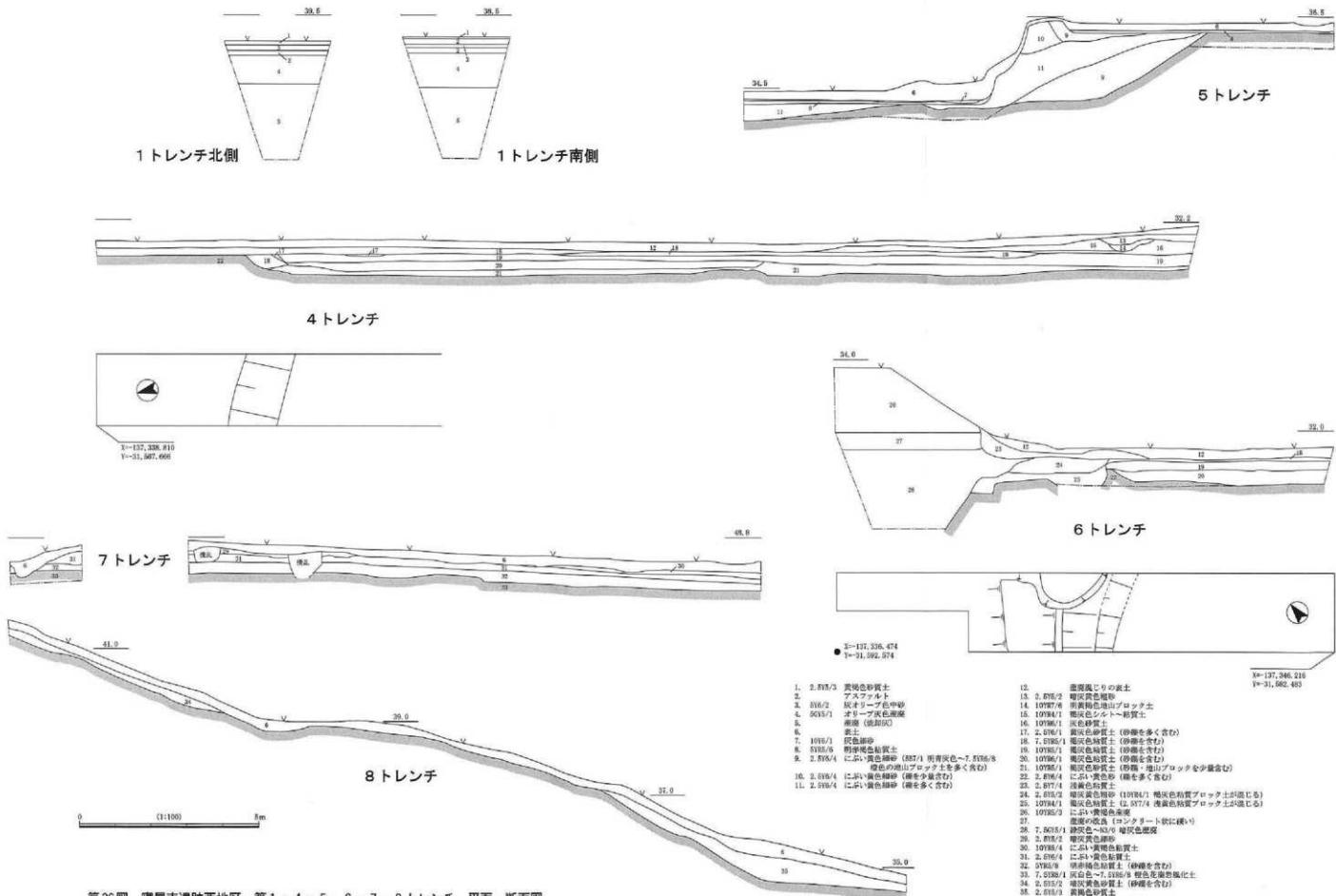
前記のとおり、地山が約25°の勾配で南に向かって傾斜しており、周辺に造構が広がっている様子はうかがえない。

4.まとめ

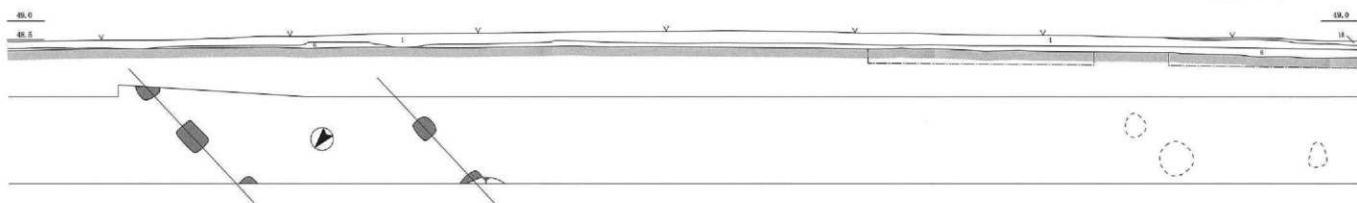
- 1トレンチを設定した降光学園のグラウンドは、近年の埋め立てによって平坦に整地されたものである。本来は深い谷筋であり、周辺に造構が広がっている可能性は極めて低い。
- 3トレンチの西側に位置する平成13年度の調査区から、6世紀代の溶着した須恵器や埴輪片が発見されている。周辺に窯跡が存在する可能性が指摘されていたが、3トレンチではその痕跡は確認できなかつた。ただし、掘立柱建物跡1棟のはかビット数基が検出された。掘立柱建物跡は梁間2間、桁行4間以上の大型の建物に復原できる。周辺からも遺物が出土しなかつたため、造構の時期は不明であるが、同規模の建物跡は近接する寝屋東遺跡や大尾遺跡からも検出されており、おそらくそれらの建物跡と同時期の7世紀中葉から後葉の建物跡と推定される。このトレンチは寝屋南遺跡範囲内の尾根頂部に位置している。今回の成果によって、寝屋南遺跡が集落跡であること、またその集落は3トレンチが位置する尾根頂部に広がっていることが明らかとなった。しかし3トレンチの東に並行する2トレンチでは顕著な造構は検出していない。3トレンチの東側約16mの地点に2トレンチ側に向かって落ちる段があり、この段から2トレンチ側は造構が削平されているものと思われる。
- 4・5・6・7・8トレンチでは顕著な造構は検出されなかつた。周辺に造構が広がる可能性は低い。
- 10・11・13トレンチを設定した尾根上（字名：奥山）で6世紀末の古墳を1基検出した。直径15m前後の、造り出しが付随する円墳になるものと思われる。この尾根筋は寝屋古墳側から太秦1号墳に向けてのびるものであり（第34図参照）、周辺にはさらに多くの古墳が点在していることが予想される。
- 11・10トレンチでは、木山谷と呼ばれていた谷筋の埋め立て範囲が確認できた。これによって古墳が築かれた尾根の南側輪郭が明確になった（第35図参照）。9トレンチはこの尾根の頂部から北側斜面に向けて設定した調査区であり、地山の落ちが確認できた。これによって尾根の北側輪郭も把握することができた。
- 12トレンチでは焼土坑を1基検出した。焼土坑は地山上面に築かれたもので、人為的な造構であることは間違いない。ただし遺物が出土しておらず、その所属時期は不明である。北側壁面で近世以降の焼成造構と思われる造構を検出していることから、同時期の造構である可能性が高い。なお、検出した地山は約25°の勾配で南に向かって傾斜しており、周辺にその他の造構が広がっている様子はうかがえない。



第35図 寝屋南追跡西地区 トレンチ配置図



第36図 覆屋南遺跡西地区 第1・4・5・6・7・8トレンチ 平面・断面図

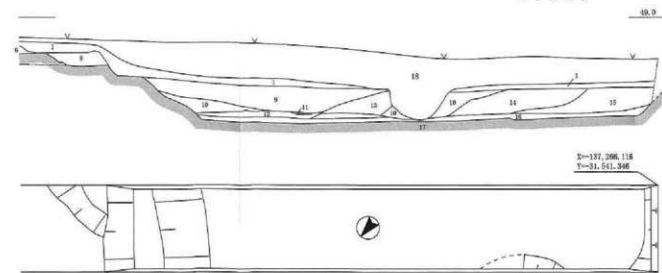


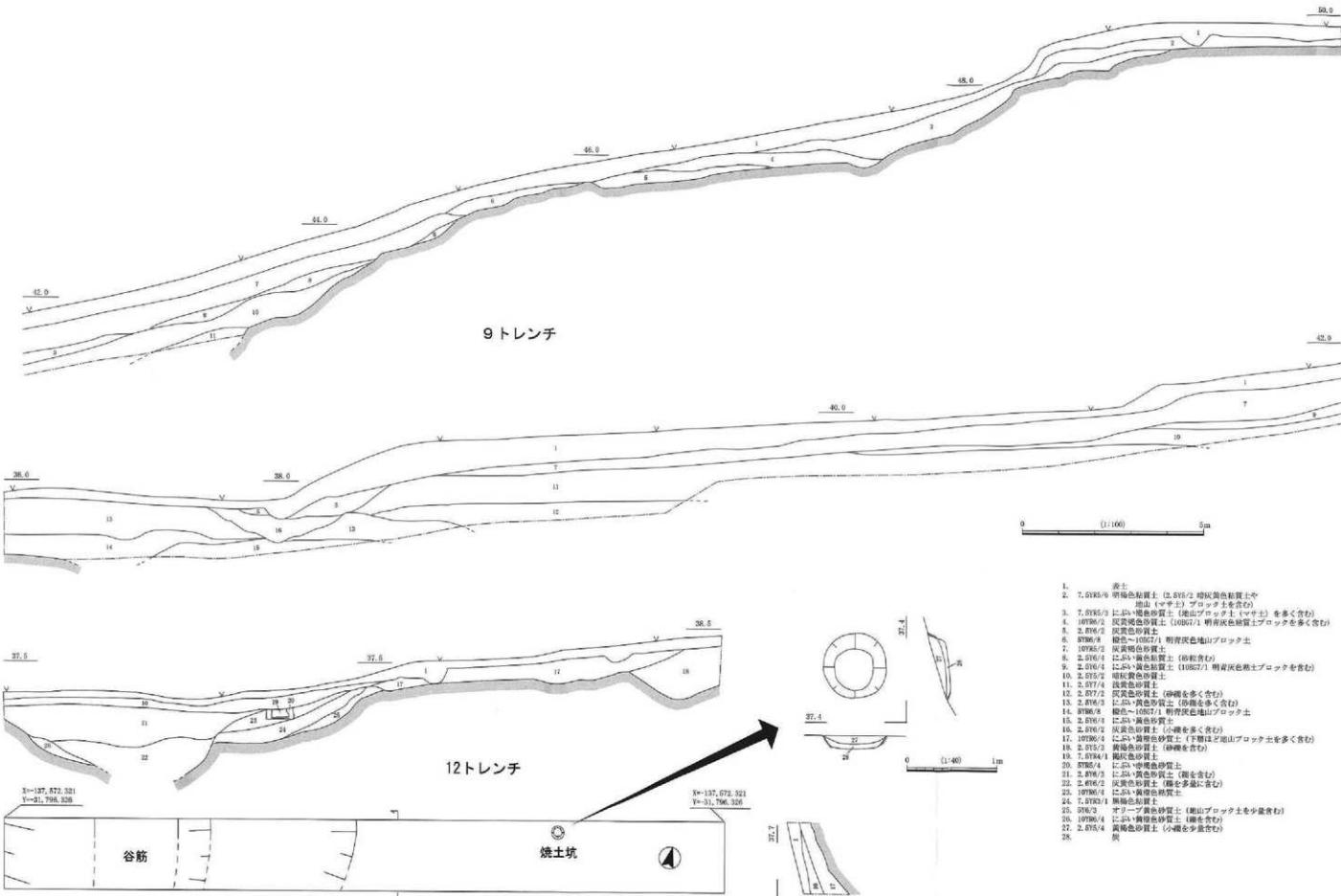
掘立柱建物跡

0 100 5m

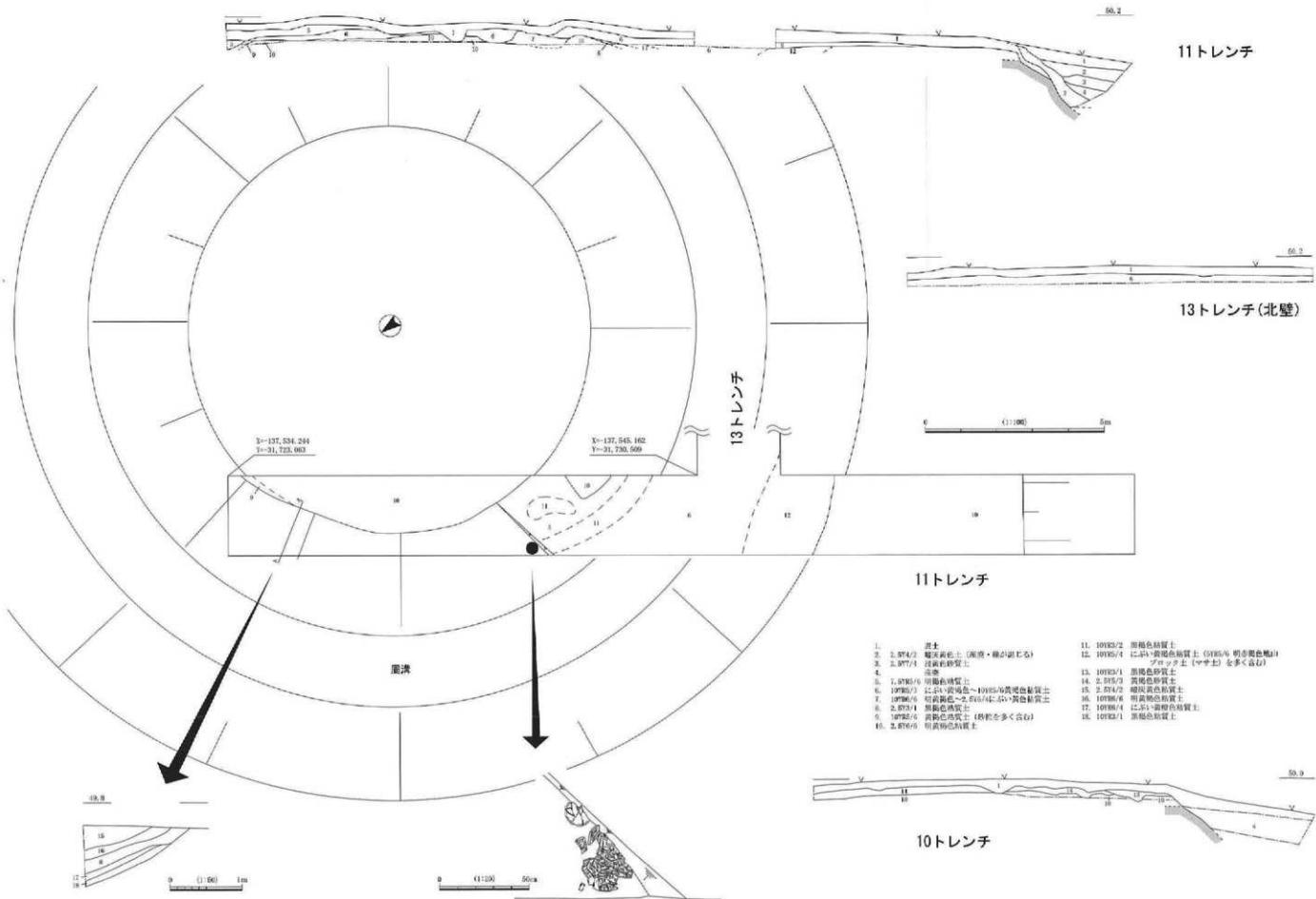
1. 褐色土
2. 19VS5/4 (灰褐色砂質土)
3. 19VS5/4 (灰褐色砂質土)
4. 2.5V6/4 (灰褐色砂質土)
5. 19VS8 (褐色砂質土)
6. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
7. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
8. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
9. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
10. 19VS5/4 (褐色砂質土)
11. 19VS5/4 (褐色砂質土)
12. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
13. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
14. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
15. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
16. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
17. 2.5V6/4 (褐色砂質土)
18. 花崗岩化土(部分的)27. 19VS8 (褐色砂質土)
19. 泥炭層

第37図 霧星南遺跡西地区 第2・3ドレンチ 平面・断面図





第38図 寝屋南遺跡西地区 第9・12トレンチ 平面・断面図



第39図 寝屋南遺跡西地区 第10・11・13トレンチ 平面・断面図

第4節 寝屋東遺跡

1. 位置と環境

調査地は、たち川と北谷川に挟まれた枚方丘陵南端部の河岸段丘上に位置する。調査地東側をほぼ南北方向に東高野街道が通り、西側には南北方向に枚方道が通る。

調査地周辺について概観すると、第1～6トレンチは、開析谷と微高地の入りくんだ地域にあり、南東（生駒山地）から北西（北谷川）方向に延びる微高地状の高まりに位置する。この微高地状の高まりは、南東部の標高が最も高く、北西に向けて緩やかに下る（第46図）。第6トレンチの北西部は、北西方向に開口する谷筋に位置し、第7トレンチについても、第6トレンチの北西部と同様の谷筋に位置する（第42図）。

調査地周辺の調査例については、財団法人大阪府文化財センターが平成13年度の確認調査の実施を経て、平成14年度に寝屋東遺跡の発掘調査を実施した。この調査より、寝屋東遺跡が当初の遺跡分布範囲よりも広範囲に及ぶことが、明らかとなった。

調査地周辺で確認されている周知の遺跡では、調査地南側に室町時代の御伽草子「鉢かづき」の物語で有名な寝屋長者の屋敷があったと伝えられる伝寝屋長者屋敷跡遺跡がある。この遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器や縄文～弥生時代の石鏃、中世の遺物等が出土している。またたち川と北谷川が合流して寝屋川となる付近には、弥生時代後期の遺物（長頸壺の一部）を採集した寝屋遺跡がある。

これらの調査成果で見られるように、今回の調査地は、開析谷と微高地の入りくんだ条件の土地であるが、古くからこの開析谷を利用した灌漑用水の確保等、自然地形をうまく利用して居住域と生産域を



第40図 寝屋東遺跡 調査区位置図 (S=1/25,000)



第41図 寝屋東遺跡 トレンチ配置図 ($S = 1/2,500$)

維持している。また、周辺に多数の街道が通ることから古くから人々の往来が盛んな交通の要衝地であったことが推測できる。以上のことから今回の調査地も居住域に適した土地であり、集落跡やそれに伴う水田跡を検出する可能性が考えられた。

2. 調査区の設定と調査方法

調査地は大阪府寝屋川市の東北部、寝屋に位置する。調査地周辺地域では、当センターが同時期に第二京阪道路予定地内において、寝屋東遺跡（その1～3）の本調査を実施した。

今回の確認調査は、国道1号バイパスに直交する寝屋4号線（市道）建設工事に伴うものであり、南東から北西にかけて幅約50m×全長約500mの範囲に、合計7本のトレンチを設定した。調査は、平成15年2月17日に開始し、平成15年3月10日をもって終了した。

3. 調査成果

第1トレンチ（第43図） 調査地は、国道1号バイパス本線南東側の耕作地として利用されていた地域（T.P. 41.5～42.0m付近）に位置する。この耕作地に幅2m、長さ30mのトレンチを南東・北西方に設定した。

第1層の表土層（現代耕土）と第2層の旧耕土を除去した第1面（近世以降？）で耕作痕跡を確認した。その第1面直下で、瓦質土器（鉢）1点・須恵器片1点・瓦器片2点・土師器片4点（推定中世）を包含する第5層の黄褐色砂質土が確認した。この層を除去すると、地山面（第2面）に至った。

この地山面（第2面）では、トレンチ北西端で、南北方向の溝1条を検出した。この溝が第1面の耕作痕跡に直交する方位となること等から、第1面とほぼ同時期の所産となる可能性があるが、溝から遺物は出土しなかった為、断定はできない。

第2トレンチ（第43図） 調査地は、第1トレンチの北西側の耕作地として利用されていた地域（T.P. 41.7m付近）に位置する。この耕作地に幅2m、長さ25mのトレンチを南東・北西方に設定した。

第1層の表土層（現代耕土）を除去すると、トレンチ中央の現代畦畔から北西側部分では、表土層直下に近世以降に削平された後、客土されたと考えられる整地層（第3・4層）が見られた。それらを除去すると、地山面に至った。

この地山面では、トレンチ中央部で土坑1基を検出した。この土坑から、遺物は出土しなかったが、埋土にトレンチ北西半部分で確認した整地土と同様の土層が含まれることから、近世以降と推定できる。

第3トレンチ（第43図） 調査地は、第2トレンチの北西側の耕作地として利用されていた地域（T.P. 41.7m付近）に位置する。この耕作地に幅2m、長さ25mのトレンチを南東・北西方に設定した。

第1層の表土層（現代耕土）を除去すると、地山面に至った。遺構・遺物は検出できなかった。

第4トレンチ（第44図） 調査地は、国道1号バイパス本線の北西側の耕作地として利用されていた地域（T.P. 41.0～41.2m付近）に位置する。この耕作地に幅2m、長さ25mのトレンチを南東・北西方に設定した。

第1層の表土層（現代耕土）直下で地山面に至る。この地山面では、トレンチ南東端で南西・北東方

向の溝（溝1）1条を検出した。

この溝1の埋土は褐色砂質土であり、中世の土師器片17点が出土した。これらの出土遺物から中世の遺構と判断できる。また平面では確認できなかったが、北東壁断面で溝1の埋土と同一の褐色砂質土の埋土を持つ遺構を確認した。この遺構は、溝1とほぼ同時期の所産となる可能性が高い。

第5トレーニング（第44図） 調査地は、第4トレーニングの北西側の耕作地として利用されていた地域（T.P. 40.7 m付近）に位置する。この耕作地に幅2m、長さ27mのトレーニングを南東・北西方向に設定した。

第1層の表土層（現代耕土）から第4層の旧耕土を全て除去すると、トレーニング北西側で、表土層直下に整地層（第5層）が見られた。この整地層は、磁器（染付）片が出土したことから、近世以降に客土されたと考えられる。その直下のラミナが見られる第8層の灰黄色砂質土を除去すると、瓦器片・土師器片（推定中世）を包含する第9層の黄灰色砂質土が確認した。この層を除去すると、地山面に至った。

地山面では、ピット・土坑等の遺構を検出した。遺構埋土は中世遺物を包含する第9層と類似しており、また、第4・6トレーニングの調査成果等から中世の遺構と推定される。

第6トレーニング（第45図） 調査地は、第5トレーニングの北西側の耕作地として利用されていた地域（T.P. 40.8～41.0 m付近）に位置する。第6トレーニングは、調査地の南西・北西方向に延びる微高地状の高まりの中で最も標高値が低く、近世以降の耕作地造成等による削平を受けなかった部分に位置する。この耕作地に幅2m、長さ34mのトレーニングを南東・北西方向に設定した。

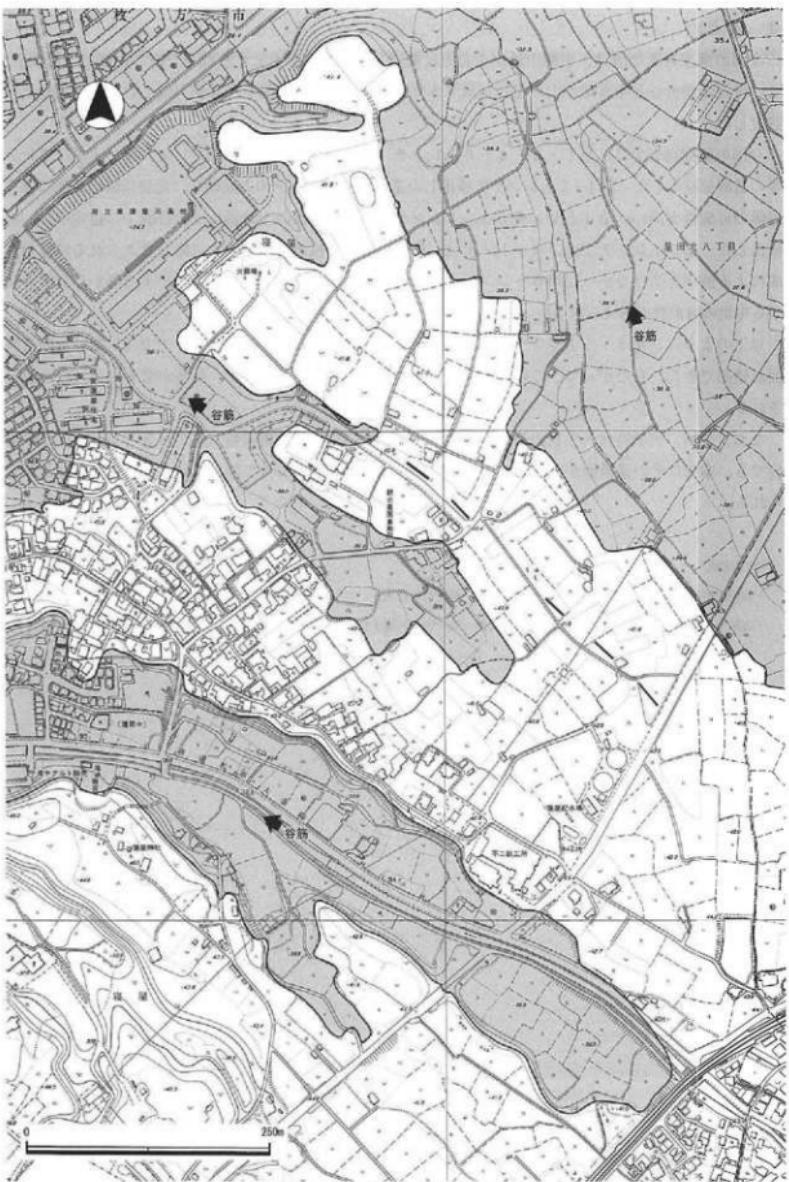
トレーニング北西半部では、第1層の表土層（現代耕土）と第2層の床土、攪乱等を全て除去すると、谷の肩部を確認した。この谷は、第6トレーニングの北方向に溜池が見られることや、地形図（第42図）から、南東から北西へ開口する谷筋であったと推測できる。谷埋土は、大きく分けて上層・下層の2層に分類できる。上層ではにぶい黄褐色砂質土を確認できた。下層は褐色砂質土で、須恵器片・土師器片・瓦器片（推定中世）が30点以上出土する。上層は、下層と比較してしまりも悪く、中世以降に人為的に埋められたと考えられる。

また、トレーニングの東半部分では、第1層の表土層（現代耕土）を除去すると、地山面に至り、土坑・ピットなどの遺構を検出した。遺構の埋土は両者とも、炭混じりのにぶい黄褐色砂質土である。この埋土から須恵器（6世紀前後）が出土した。また、この遺構面直上層（特に遺構周辺）から須恵器片・土師器片（古墳・古代）が9点出土している。このことから地山面で検出した遺構は、古墳時代の遺構の可能性が高い。

以上のことから、第6トレーニング付近は、古墳時代から中世の遺構面が存在する可能性が高く、特に近世以降の耕作地造成等による削平等を受けなかった部分（トレーニング東半部分）では、遺構が良好に残存していると考えられる。

第7トレーニング（第45図） 調査地は、微高地の南側斜面に位置する。この斜面地に、幅1.5m、長さ3mのトレーニングを南北方向に設定した。

第1層の表土層（竹の根等を含む）を除去すると、近世以降の耕作地・道路造成等による削平を受けた整地層を確認した。これらの層を全て除去すると、明褐色砂疊層の地山面に至った。遺構・遺物は検出できなかった。



第42図 寝屋東遺跡 調査区周辺の地形復元図 ($S = 1 / 5,000$)

4.まとめ

今回の調査対象地域は、生駒山地から北方に発達した洪積層を主とする枚方丘陵の南部に位置する。この付近は開析谷と微高地が入り組む地域であり、調査トレンチを南東-北西方向にのびる微高地上に設定した。

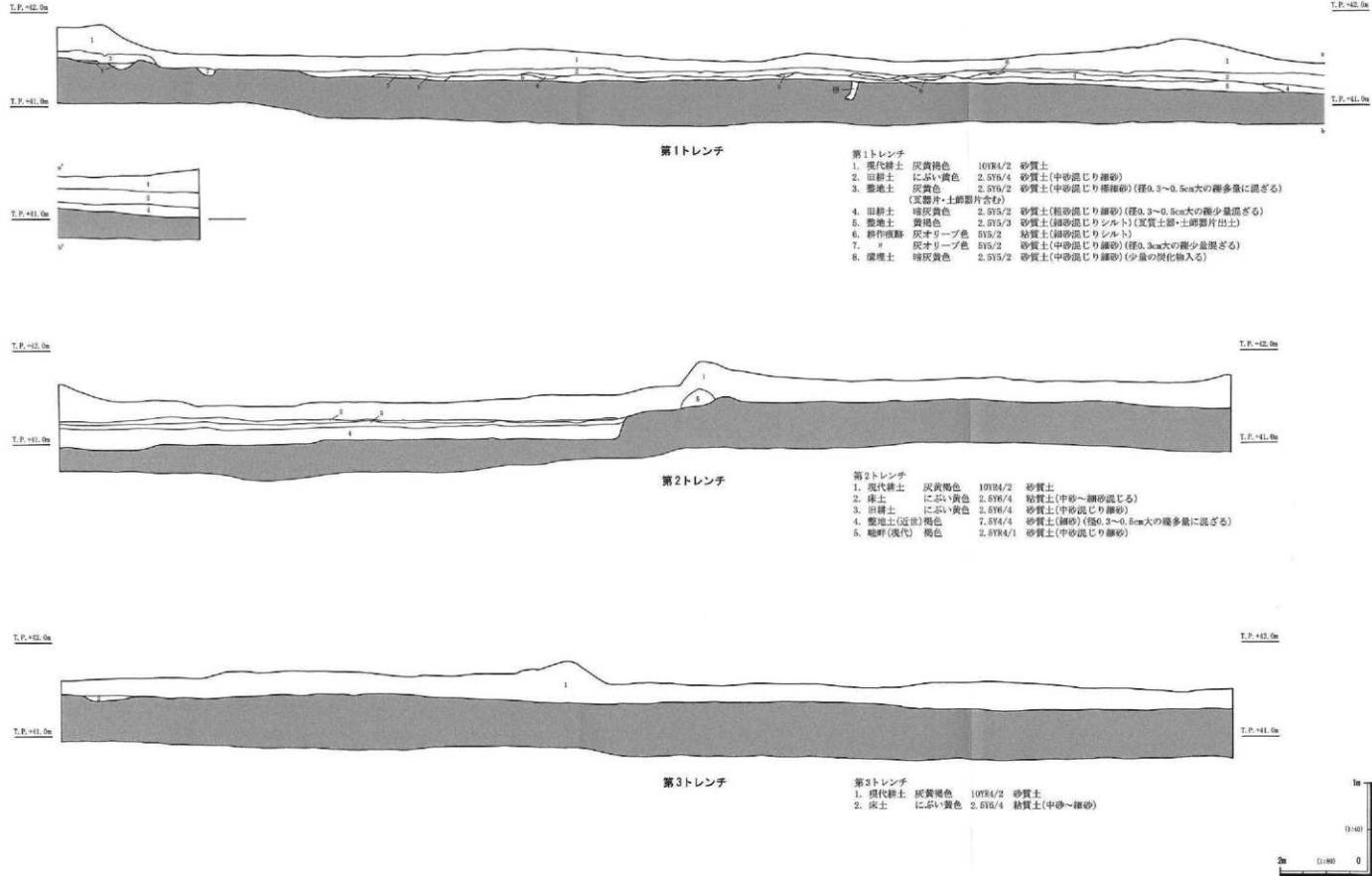
今回の確認調査では、第1・2・4～6トレンチ（第3・7トレンチは除く）で、溝・土坑・ピット等の遺構を検出した。第1・2トレンチで検出した遺構は、埋土やその方向から、近世以降の耕作に伴う遺構の可能性が高い。第4トレンチでは、トレンチ東端で、中世の土師器片を含む溝1（推定中世）を検出した。第5トレンチでは、ピット・土坑（推定中世）を検出した。近世以降と考えられる耕作地造成による削平を受けなかった第6トレンチでは、ピット・土坑を検出し、埋土や出土遺物から古墳時代から中世の可能性が考えられる。

以上のように、第4・5トレンチでは中世と考えられる遺構面を、第6トレンチでは古墳時代の遺構面が確認できた。したがって、この微高地上に古墳時代から中世にかけて、集落が営まれていたと想定される。

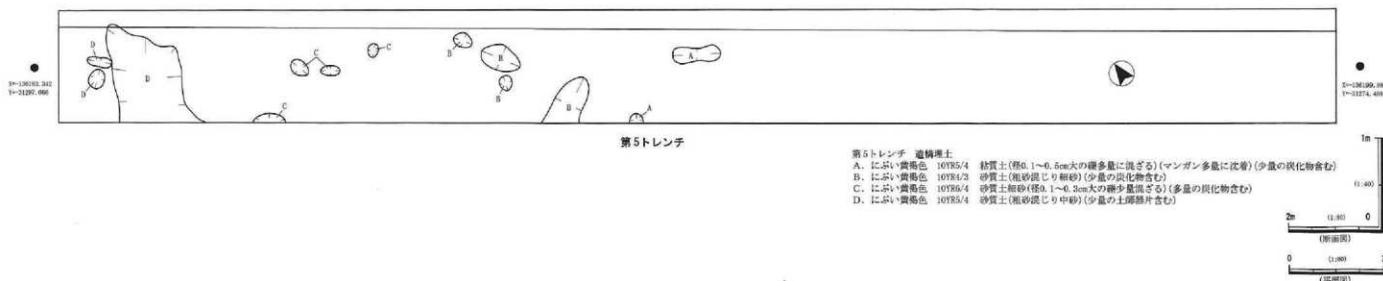
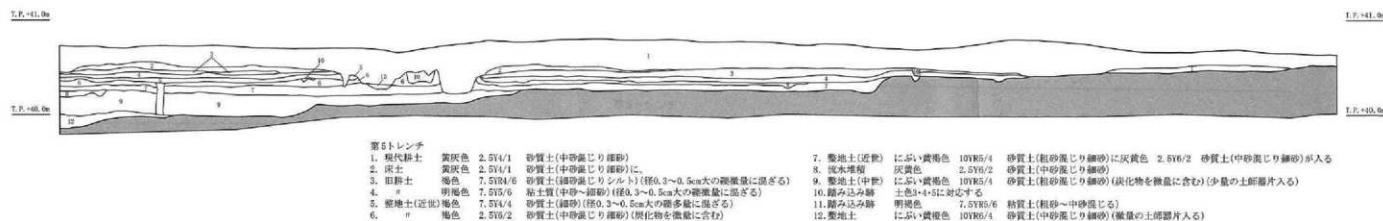
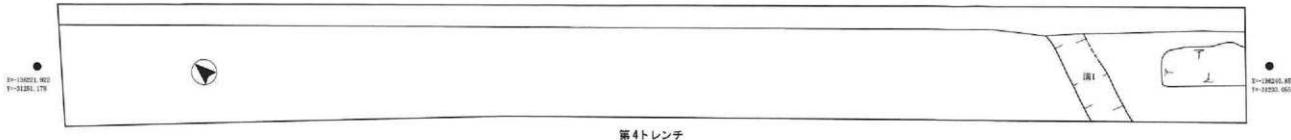
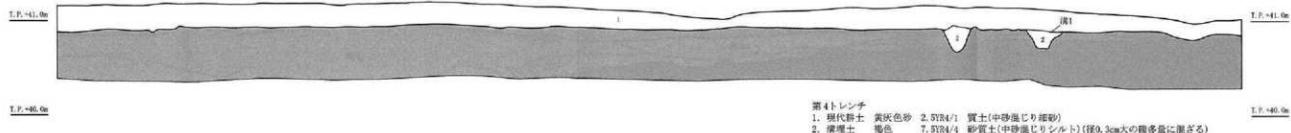
なお、今回、古墳時代～中世の遺構面を確認できなかった調査地南東側（第1～3トレンチほか）部分でも、本来はその遺構面が存在していたが、耕作地造成などによって削平された可能性が高いと考えられる。

〔参考文献〕

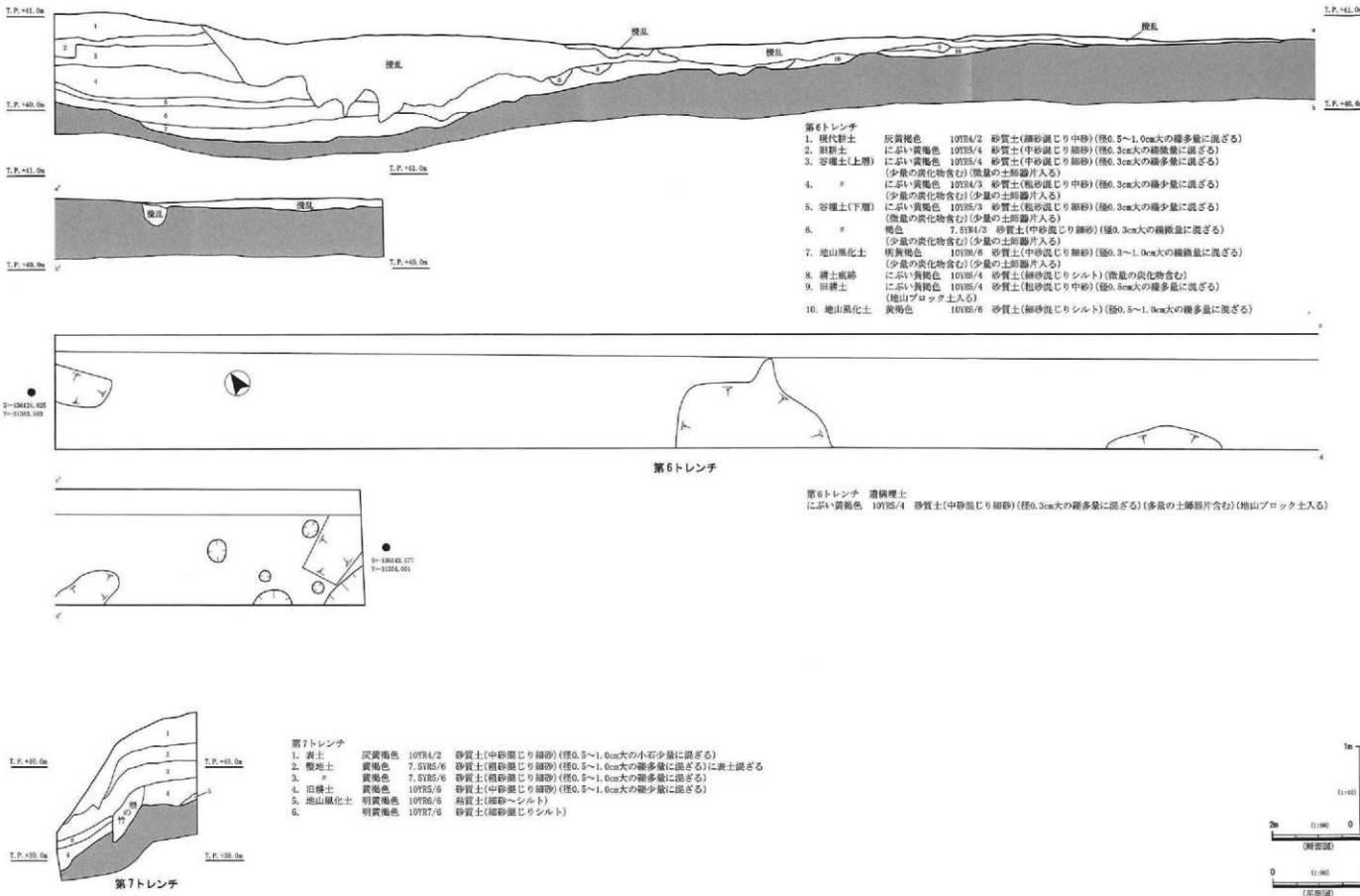
- ・寝屋川市教育委員会 1991『わたしたちのまち 寝屋川の自然』
- ・寝屋川市史編纂委員会 1999『寝屋川市史 第一巻考古資料編I』



第43図 寝屋東遺跡 第1・2・3トレンチ 土層断面図



第44図 寝屋東遺跡 第4・5トレンチ 遺構平面図・土層断面図



第45図 寝屋東遺跡 第6・7トレンチ 道構平面図・土層断面図

T.P.+42.0m

第8トレンチ

第5トレンチ

第4トレンチ

第3トレンチ

第2トレンチ

第1トレンチ

T.P.+42.0m

T.P.+41.0m

T.P.+40.0m

T.P.+40.0m

遺構検出面

遺構検出面

遺構検出面

1m
0

- 現代耕土、整地土
- 古の埋土
- ▨ 流水堆積
- 遺構埋土(中塗)
- 地山

第46図 寝屋東遺跡 調査区断面上層柱状図

第5節 倉治遺跡

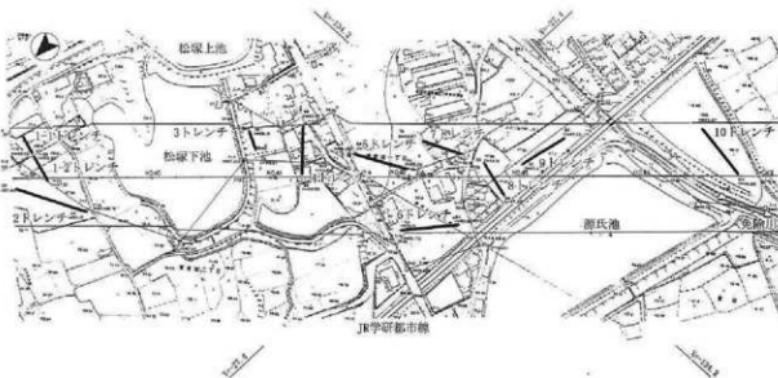
1. 位置と調査方法

今回、中部調査事務所調査第二係がおこなった 倉治遺跡（確認）発掘調査は、第二京阪道路建設工事に伴うものである。現地調査は平成14年8月7日に開始し、10月31日をもって終了した。

調査地は、大阪府交野市北東部、交野山の西麓に位置する。調査区は、倉治古墳群として知られる関西電力枚方変電所の西側から、倉治遺跡を通って、有池遺跡として知られる源氏池の南側までであり、この範囲に合計10本のトレンチを設定した。なお、1トレンチのように、ブロック塀等により調査ができない部分がある場合には、枝番を付した。



第47図 倉治遺跡 調査区位置図 ($S = 1/25,000$)



第48図 倉治遺跡 トレンチ位置図 ($S = 1/4,000$)

2. 調査成果

1 トレンチ

1 トレンチは、ブロック塀等により調査できない部分があったため、東側の 1-1 トレンチと西側の 1-2 トレンチに分けて、トレンチを設定した。

1-1 トレンチ

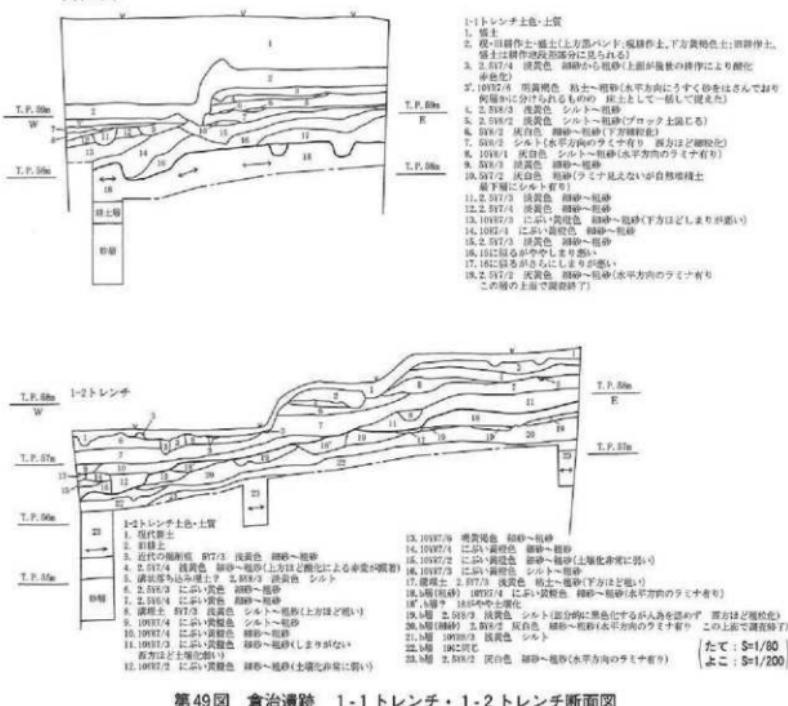
盛土と旧耕土を除去すると、粗砂を主体とする二次堆積と考えられる層を確認した。この層から遺物が出土していないため、時期は不明である。その下はラミナが認められる自然堆積の砂層である。

なお、その下層では褐色粘土層を確認した。

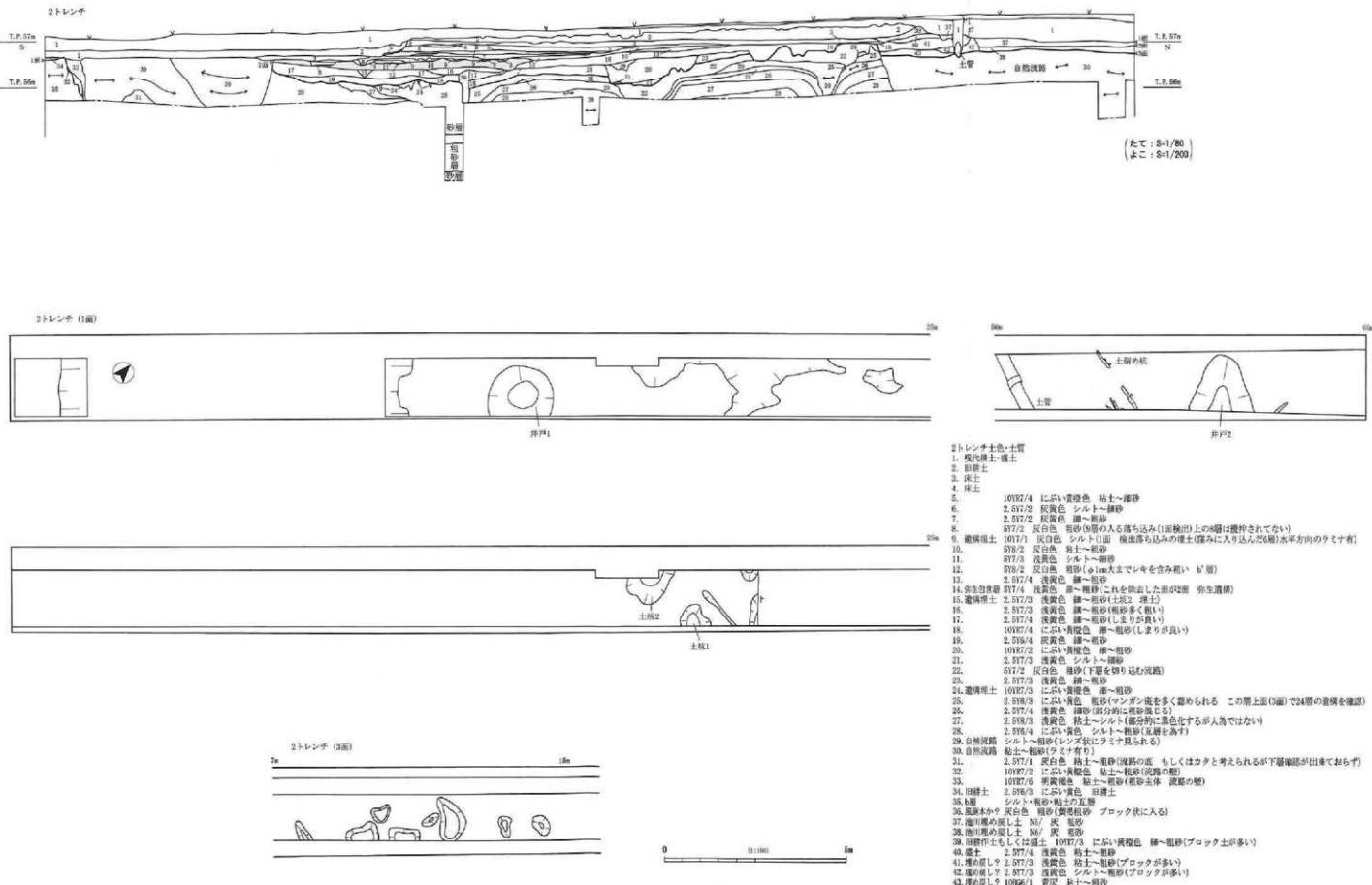
1-2 トレンチ

現代耕土を除去すると、粗砂を主体とする二次堆積と考えられる層を確認した。この層から古墳時代の須恵器（縫）が出土したが、後世に他所から流れ込んだ可能性が高い。

その下は自然堆積の砂層である。この自然堆積砂層中で、1-1 トレンチの褐色粘土層に対応すると考えられる粘土層を確認した。

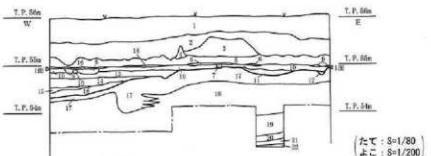


第49図 倉治跡跡 1-1 トレンチ・1-2 トレンチ断面図



第50図 倉治遺跡 2トレンチ 平面・断面図

3トレンチ



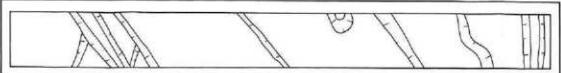
たて : S=1/30 よこ : S=1/200

第51図

3トレンチ土色・土質

1. 直土(表土) 55m/3 黄褐色 中纏混じり 中砂 上分化している
2. 亂層 55m/2 黄褐色 中纏混じり 中砂 上分化してある。柱状ブロック 中纏混じり 中砂
3. 亂層(直土含むブロック) 55m/1 灰色 粘土ブロック 粘土のブロック 中纏混じり 中砂
4. 旧耕土(アゼ? 55m/1) 杂色 黃褐色混じり 細砂 上分化している
5. 旧耕土 55m/1灰褐色 黃褐色混じり 細砂 上分化している
6. 亂層(底) 105m/2 オリーブ灰色 細砂 上分化している
7. 亂層(底) 105m/2 黄褐色 中纏混じり 粘土ブロックを含む
8. 亂層(底) 105m/2 黄褐色 中纏混じり 粘土ブロックを含む
9. 粘土層(底) 105m/2 黄褐色 中纏混じり 粘土ブロックを含む
10. 土壌化層? 65m/2 黄オリーブ色 中纏混じり 細砂 やや土壌化している 上からの影響か?
11. 亂層(底) 55m/2 黄オリーブ色 細砂混じり 細砂 東側がやや土壌化している

3トレンチ (1面)



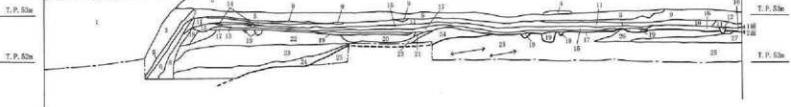
12. 亂層(底) 7.5m/2 灰オリーブ色 粗砂混じり 中砂

13. 土壌化層? (ベース層?) 7.5m/3 に近い褐色 中纏混じり 中砂
14. 乱層(表土) 2.5m/4 黄褐色 細砂混じり 中砂
15. 乱層(表土)? 3.5m/3 黄褐色 粗砂混じり 中砂
16. 粘土? 变土? 10m/2 英灰褐色 粗砂混じり 中砂
17. ベース層 7.5m/4 に近い褐色 中纏混じり 中砂
18. ベース層 65m/1 明オリーブ灰色 シルト
19. ベース層 7.5m/4 に近い褐色 中纏混じり 中砂
20. ベース層 65m/1 明オリーブ灰色 シルト
21. ベース層 7.5m/4 に近い褐色 中纏混じり 中砂
22. ベース層 65m/1 明オリーブ灰色 シルト

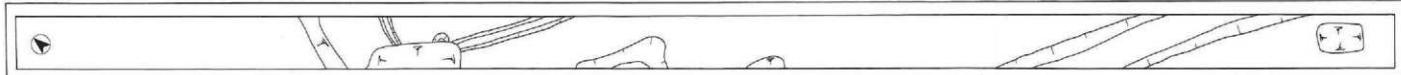
4トレンチ土色・土質

1. 稲ぬき层? ブロック土 粗土ブロック 撮丸
2. 極端 87m/2 浅灰色 大理岩混じり 粗砂
3. 极端 87m/3 褐色 中纏混じり 中砂
4. 粘土層(表土含む) 87m/1 中纏混じり 中砂
5. 粘土層 7.5m/1 黑色 粗砂混じり 中砂 土壌化している
6. 粘土層 7.5m/2 浅褐色 中纏混じり 中砂
7. 粘土層 2.5m/4 浅褐色 中纏混じり 中砂
8. 粘土層 2.5m/3 黑色 中纏混じり 中砂
9. 粘土層 2.5m/2 黑色 中纏混じり 中砂
10. 亂層(底) 105m/2 黄褐色 中纏混じり 中砂 粘土ブロック含む
11. 粘土層 105m/3 明黄色 中纏混じり 中砂
12. 黒 7.5m/2 黄オリーブ色 粗砂混じり 中砂
13. 粘土層 7.5m/1 黄褐色 中纏混じり 中砂
14. 粘土層? 7.5m/2 に近い褐色 黃褐色 中纏混じり 中砂
15. 粘土層 7.5m/3 黄褐色 中纏混じり 中砂
16. オランジーベース? 10m/7/6 明黄色 中砂
17. 土壌化層(粘土?) 15cm/1 に近い褐色 中纏混じり 中砂
18. 黄色層(粘土?) 15cm/1 に近い褐色 中纏混じり 中砂
19. 亂層構造層 105m/2 黄褐色 中纏混じり 中砂
20. 粘土層 105m/3 黄褐色 中纏混じり 中砂 粘土ブロック 粘土混じり 粗砂
21. 土壌化層(底) 12.5m/2 喀斯特灰色 粗砂混じり 中砂 土壌化層?
22. 土壌化層? (ブロックを含む) 10m/3 に近い褐色 山地ブロック混じり 中砂
23. 土壌化層 2.5m/4 黄褐色 中纏混じり 中砂 ラミナ層
24. 土壌化層 10m/3 に近い褐色 中砂
25. 粘土層 10m/3 に近い褐色 中纏混じり 中砂 ラミナ層
26. ベース層 10m/2/3 に近い褐色 中纏混じり 中砂 ベースが土壌化気味
27. 粘土層(ベース層) 2.5m/4 に近い褐色 中纏混じり 剥離 ベースが土壌化気味

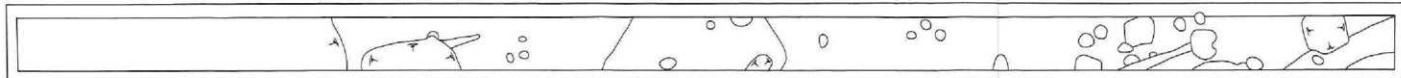
4トレンチ



4トレンチ (1面)



4トレンチ (2面)



0 5m 1:100

第51図 倉治遺跡 3トレンチ・4トレンチ 平面・断面図

2 トレンチ

盛土と旧耕土を除去して遺構検出をおこなった。この面では、トレンチ南半で極細砂が埋土の水溜り状の遺構と井戸1を、トレンチの北端で土留めの杭や井戸2を検出した（1面）。井戸1・2は現代耕土直下からの掘込みであり、近代のものと考えられる。

下層地形の影響で低くなったトレンチ中央部（トレンチ南端から13～26m間）では、弥生土器（後期後半）を包含する灰色粗砂層を確認した。

灰色粗砂層を除去した面で土坑・溝などの遺構を検出した（2面）。土坑1・2からは数個体分の弥生時代後期土器が出土したので、2面は弥生時代後期の遺構面と考えられる。

下位の層を除去したのち、砂層を母材とするマンガン沈着層の上面でピット・土坑などの遺構を検出した（3面）。これらは、遺物が出土せず、遺構形状・埋土の状況から木根痕・自然の落ち込みの可能性がある。

下はラミナが認められる自然堆積の砂層であり、下層で褐色粘土層を確認した。

3 トレンチ

旧耕土下の自然堆積粗砂層上面で、溝等の遺構を検出した（1面）。これらの遺構は出土遺物も無く、時期は不明である。

最も深い所で、G.L.-2.7mまで人力で自然堆積層を掘削したが、ほかに遺構・遺物は確認できなかった。

4 トレンチ

旧耕土下の耕土層下面（1面）と、自然堆積粗砂層上面（2面）で溝・ピット等の遺構を検出した。これらの遺構は出土遺物も無く、時期は不明である。

最も深い所で、G.L.-1.8mまで人力で自然堆積層を掘削したが、ほかに遺構・遺物は確認できなかった。

5 トレンチ

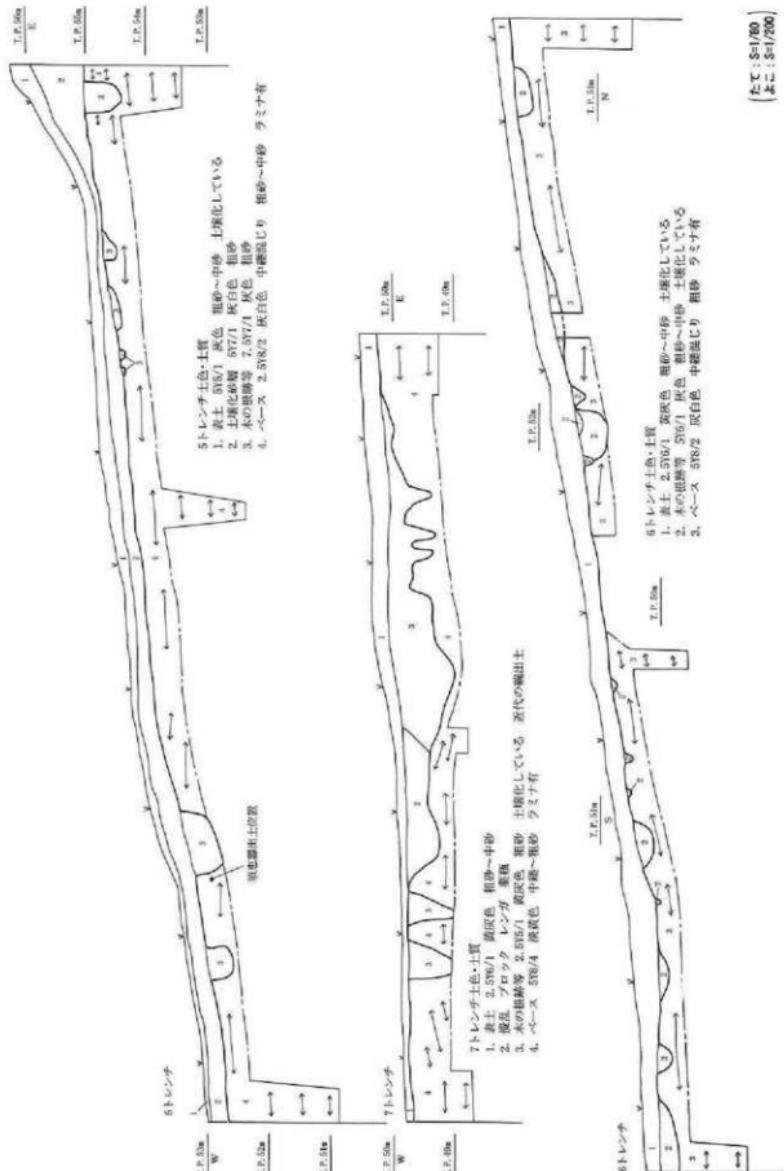
表土を除去すると、あまり締まりのない自然堆積粗砂層であった。粗砂層の中から古墳時代と思われる須恵器片を1点検出した。

最も深い所で、G.L.-2.8mまで人力で自然堆積層を掘削したが、須恵器片のほかに遺構・遺物は確認できなかった。

6 トレンチ

表土を除去すると、あまり締まりのない自然堆積粗砂層であった。粗砂層は出土遺物も無く、時期は不明である。

最も深い所で、G.L.-2.3mまで人力で自然堆積層を掘削したが、ほかに遺構・遺物は確認できなかった。



第52図 倉治遺跡 5トレンチ・6トレンチ・7トレンチ 断面図

7 レンチ

表土を除去すると、あまり締まりのない自然堆積粗砂層であった。植わっていた木の痕跡と推定できる落ち込み部分から、近代と考えられる時期の陶器器碗が出土した。しかし、粗砂層は出土遺物も無く、時期は不明である。

最も深い所で、G.L.-1.3mまで人力で自然堆積層を掘削したが、ほかに遺構・遺物は確認できなかった。

8 レンチ

現代耕土・床土を除去するとラミナが認められる自然堆積の砂層であった。それを除去すると耕土層を検出した（1面）。この耕土層は粗砂を母材として何層かに分かれるが、その間に洪水砂を確認している。この層から近世の土管が出土しているほか、瓦器・土師器などの中世遺物が出土している。

その下はラミナが認められる自然堆積の砂層であった。この層を除去すると土壤化したシルト層を検出し、上面を精査したところ、牛などの足跡を全面で検出した（2面）。

このシルト層からは、瓦器・土師器などの中世遺物が出土しており、この層の下面で耕作痕跡（溝）を検出した（2b面）。

2b面の下のラミナが認められる自然堆積の砂層を除去すると、土壤化したシルト層を検出し、上面を精査したところ、牛などの足跡を全面で検出した（3面）。

平面での検出は、安全面からここまでとなつたが、これよりも下はレンチ西半の側溝を広げて確認する限り、2枚の土壤化層が存在する。上は平面で検出したシルト層であり、下は粗砂混じりの締まった土壤化層（黒バンド）である。下の層から中世の土師器が出土した。

9 レンチ

現代耕土・床土を除去するとラミナが認められる自然堆積の砂層であった。それらを除去すると5層の土壤化層を検出した。

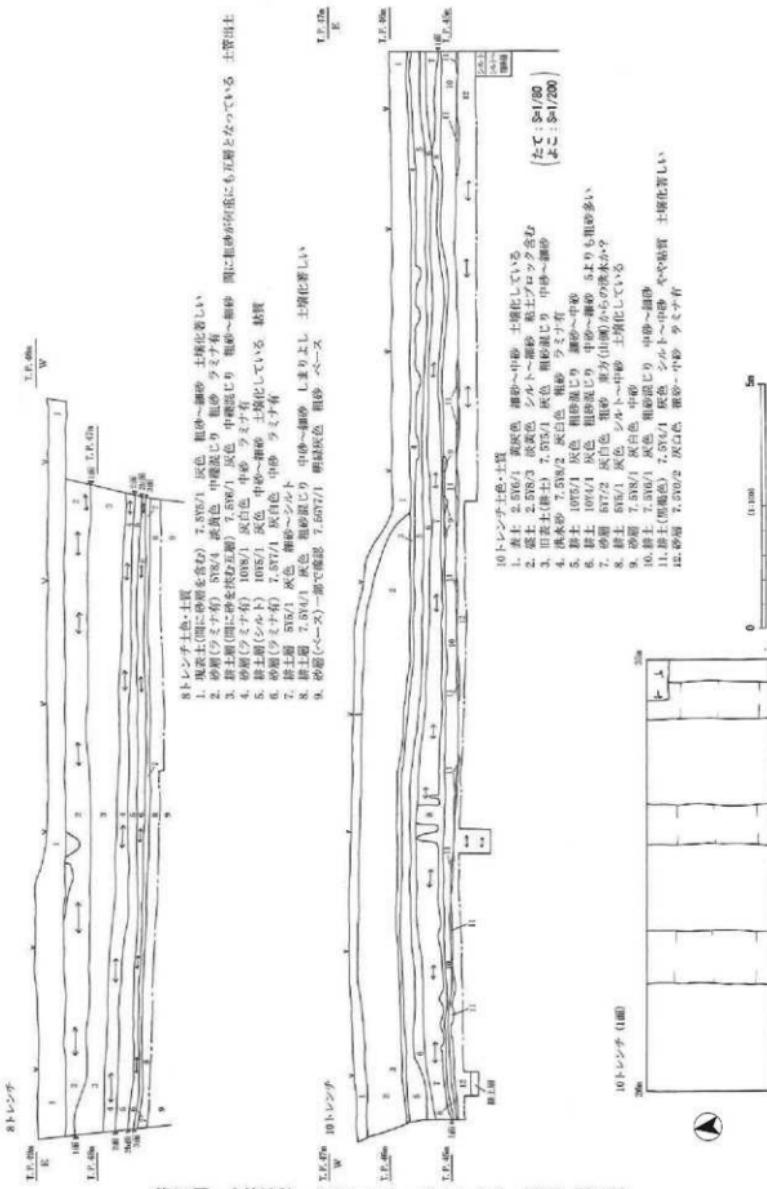
上の2層は粘質シルト層で、耕土層と考えられる（土層断面観察において、両層上面の一部で畦畔を確認）。下の3層は砂質で良く締まっている土壤化層（黒バンド1・2・3）である。

平面的な調査としては、上位の粘質シルト層を除去した面で、畦畔（耕作痕跡）・溝・ビットを検出した（1面）。1面で検出した畦畔の南側では、畦畔にすりつく砂を検出した。粘質シルト層から土師器・瓦器などの中世遺物が出土した。

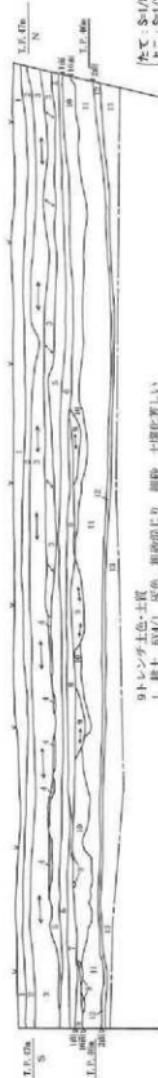
統いて下の土壤化層（黒バンド1・2）を除去して平面を精査したが、顯著な遺構は検出できなかった（1b面）。黒バンド1・2の出土遺物は、古墳時代の須恵器を主体とするものの、若干の中世遺物も包含しており、いずれも中世段階所産の耕土（土壤化）層と推定できる。

さらにその下は良く締まった粗砂層が堆積し、それを除去すると土壤化した砂層（黒バンド3）を検出した。その上面を精査したところ、レンチの北端で自然流路を検出した（2面）。

この黒バンド3を除去すると自然堆積と考えられる砂層がみられた。この層からは遺物は出土していない。

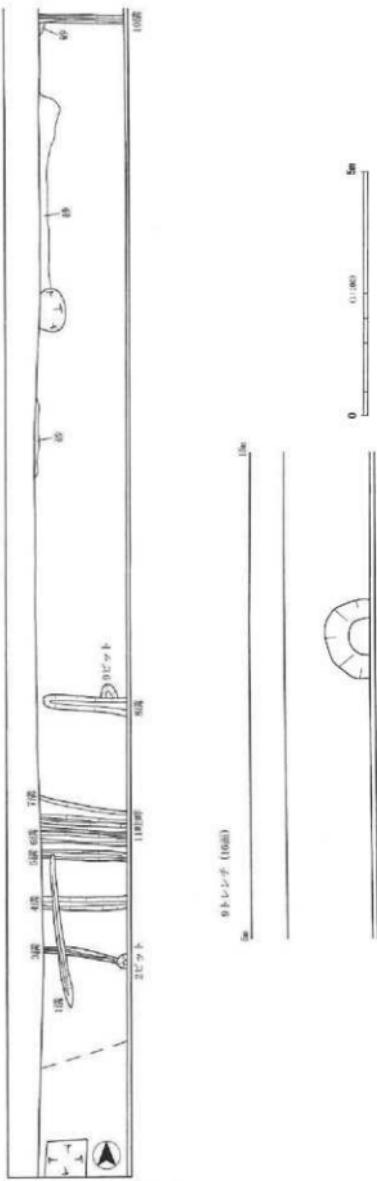


9トレンチ



第54図 倉治遺跡 平面・断面図

9トレンチ (10m)



10トレンチ

表土を除去すると、東側では洪水砂を検出し、その下からは砂層に覆われた旧耕作面を検出した（1面）。その耕土層を除去すると自然堆積粗砂層があり、その下で耕土層を確認した。

さらにその耕土層の下は、自然堆積の砂層であった。耕土層中から瓦器碗・土師器（中世）が出土したので、この耕土層は中世に属すると考えられる。

これら以下は、最も深いところでG.L.-2mまで掘削した。

3. 出土遺物

今回の調査では、図化するには至らなかった細片の土器が多く出土した。図化できた土器のみ紹介する。

1～5は8トレンチから出土した。そのうち1～4は耕土層（5）から、5は耕土層（7・8）から出土した。1～3・5は土師皿、4は瓦器碗である。いずれも中世と考えられる。

6～10は9トレンチの耕土層（5・6）から出土した。6～8は土師皿、9・10は瓦器碗である。いずれも中世と考えられる。

11は、2トレンチの2面検出土坑1から出土した。弥生土器甕の底部と思われ、弥生時代後期後半と考えられる。12は、10トレンチの洪水砂層（7）から出土した磁器碗である。

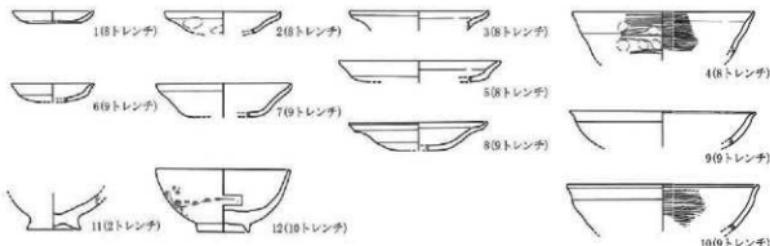
4.まとめ

今回の調査では、2トレンチと8～10トレンチで中世以前の遺構・遺物を検出した。

2トレンチの調査では、谷状に低くなったトレンチ中央部（トレンチ南端から13～26m間）で、弥生土器（後期後半）を包含する灰色粗砂層を確認した。また、これを除去した面で土坑・溝などの遺構を検出した。

そのうち、土坑からは数個体分の弥生土器が出土したので、弥生時代（後期後半）の遺構面と考えられる。2トレンチのこの部分は谷状地形であり、弥生時代の包含層と遺構面が削平を受けずに残存したと考えられる。

8～10トレンチの調査では、中世に属する時期の水田畦畔等の耕作痕跡を検出した。中世段階では、8～10トレンチ付近を耕作地（水田ほか）として利用していたと推定できる。



第55図 倉治遺跡 出土遺物実測図 (S=1/4)

第6節 津田城遺跡

1. 位置と環境

津田城遺跡は、生駒山地の北崖に位置し、北側を穂谷川が東西方向に流れる枚方丘陵の縁辺部に立地する。調査地周辺について概観すると、第1-1・1-2トレンチは、トレンチ北東側の南北に開口する大きな谷筋を望む独立丘陵上に位置する。また、第2-9トレンチ周辺については、北側に国見山へと続く現在の登山道があり、南側には、津田山の国見池から大原池の北側に向かって流れるガラト川を望む。

津田城遺跡とは、津田集落の北東部から順に、古城地区・城坂南地区・城坂地区・本丸山地区・本丸山北東地区・ばばん谷地区と続く地区や、他に国見山地区や広地区を総称して呼ぶ。津田城は、永徳2年（1490年）津田正信によって築かれた山城（国見山城）であり、天正3年（1575年）に織田信長によって焼き払われた。後に、第四代目当主の津田主水頭正時が、再び国見山麓の丘陵上に居館（本丸山城）を築いた。しかし、1582年、再び豊臣秀吉によって滅ぼされた。

今回の調査地と関連深い地区について概観したい。本丸山地区は、今回調査した地域と近接する地区的1つであり、第四代目当主の津田主水頭正時が、「本丸山城」を築いた国見山麓の丘陵上に位置する。本丸山城は、国見山に築城した国見山城が焼失した後、再建した居館であった。第2-9トレンチ北側の（財）枚方市文化財研究調査会による発掘調査では、城に関連する「堀切」や堀切を渡る施設等の遺構や、遺物が検出された。また、第1-1・1-2トレンチから第2-9トレンチ間を、平成12~13年に、（財）大阪府文化財調査研究センター（現 大阪府文化財センター）が、発掘調査を行った。この調査では溜池や、それに続く土管など、近世における水田造成施設等を検出した。

調査地と近接する地区の1つである城坂地区は、地蔵池付近から津田城跡に通じる道を「城坂」と呼び、その道の東側に続く平坦地に、古くから「しろさか砦」があったと言い伝えられている地域に位置する。（財）枚方市文化財研究調査会による発掘調査では、自然地形を利用した池状遺構や埋設瓦質土管等、近世初頭以降の田畠の灌溉に関する施設を検出したが、砦跡に関連する遺構・遺物は検出されなかった。

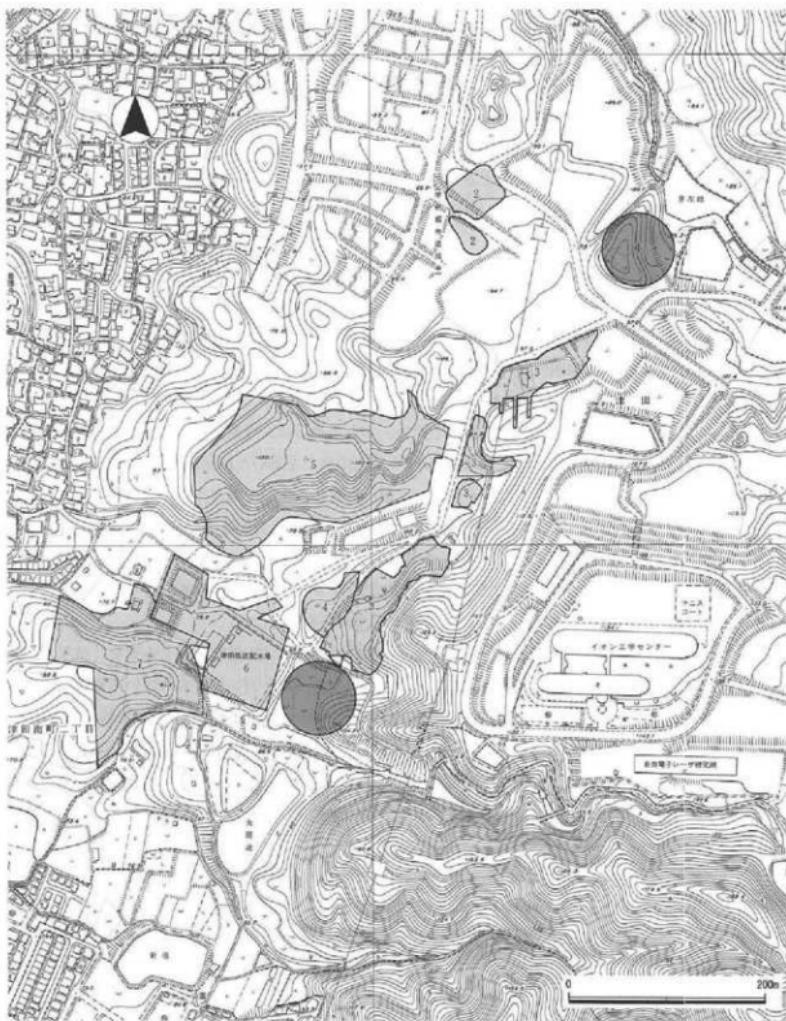
また、同じく第2-9トレンチの西側部に隣接する城坂南地区は、城坂地区の南西側にあり、古城と城坂道の間に位置する。（財）枚方市文化財研究調査会によって行われた発掘調査では、7世紀末から8世紀初頭の灰原の一部を検出している。

最後に、本丸山北東地区は、第1-1・1-2トレンチ西側に近接する。この地区は、（財）枚方市文化財研究調査会によって行われた発掘調査で、中世以降の焼失した建物跡や排水施設等が検出された。

以上のことから今回の調査地では、近接する地区で7~8世紀の灰原の一部や、本丸山城の関連遺構や遺物が検出されていることから、7~8世紀の須恵器窯や、本丸山城に関連する遺構を検出する可能性が考えられた。

2. 調査区の設定と調査方法

調査地は大阪府枚方市の東部、津田山手地区に位置する。調査地周辺地域では、古くから埋蔵文化財調査が行われ、今日までに多くの埋蔵文化財包蔵地の存在が知られている。平成12年度には、当センターによって津田城遺跡の調査を行ったが、今回の調査地は、その調査区の北側と南側にあたる地区である。



1. 今回の調査対象地
 2. 津田城遺跡〔第3次調査(本丸山北東地区)〕1985年度調査
 3. 津田城遺跡〔本丸山地区〕2001年度調査
 4. 津田城遺跡〔城坂地区〕1985年度調査
 5. 津田城遺跡〔本丸山地区〕1984～1992年調査
 6. 津田城遺跡〔城坂南地区〕1982年調査
 7. 津田城遺跡〔古城地区〕1983～1988年調査

第56図 津田城遺跡 周辺の既往調査区位置図 (S=1/5,000)



第57図 津田城遺跡 トレンチ配置図

今回の確認調査は、北東から南西方向にかけて幅約90m×全長650mの範囲に、合計9本のトレンチを設定した。なお、トレンチが立木等により分断されている場合は、枝番を付した。調査期間は、平成14年10月4日から12月27日をもって終了した。

3. 調査成果

第1-1トレンチ・第1-2トレンチ（第60図） 調査地は、南北方向にのびる丘陵（T.P.101～107m）に位置する。当初、この丘陵の尾根上に長さ40mのトレンチを予定していた。しかし、調査地中央に立木があった為、トレンチを2分割し、第1-1・1-2トレンチとし、調査を行った。幅2m、長さ24mの第1-1トレンチと、その北側に幅2m、長さ16mの第1-2トレンチをそれぞれ設定した。

第1-1・1-2トレンチではともに、表土（腐葉土含む）と木の根等に伴う地山崩壊土を除去すると、大阪層群の基盤層を確認した。第1-2トレンチの中央部では、人為的に掘削された幅約1.2m×深さ約2.0mのV字状溝を検出した。このV字状溝の埋土からは遺物は出土せず、時期の確定はできなかった。第1-1・1-2トレンチではともに、遺物は出土していない。

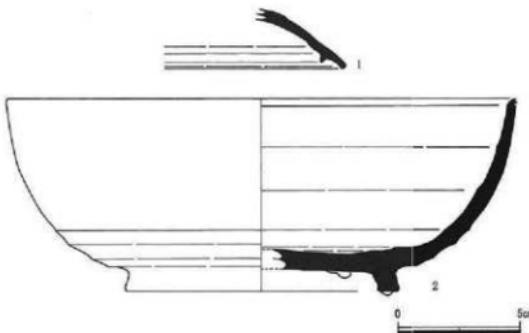
第2トレンチ（第60図） 調査地は、耕作地として利用されていた地域に位置する。この土地の平坦面上に幅2m、長さ16mのトレンチを東西方向に設定した。

表土（耕作土含む）と床土を除去すると、南北方向にのびる谷を検出した。谷の埋土は、地山と思われる土層をブロック状に多く含む層であり、トレンチ東端から中央にかけて、斜め下がり（東から西方向）に堆積していた。この谷埋土を除去すると、トレンチの西端では砂礫層が堆積しており、その中央部分から須恵器が7点出土した（第58図、写真図版23）。この砂礫層は7点の須恵器から、7世紀以降の遺物包含層と考えられ、トレンチ西端の南側にそれらの遺物包蔵地の主体となる遺構が存在する可能性がある。

谷埋土と砂礫層の下では粘土ブロック混じりの一層を挟んで、大阪層群の基盤層を確認した。この基盤層上面は平坦であり、人為的に形成された遺構面となる可能性がある。しかし、今回の調査では掘削深度の関係で平面的な調査ができなかったことから、遺構等は検出できず、遺構面かどうかは現段階では判断できない。また、この面では、トレンチの中央東側から、上層で確認した谷よりも小さな谷を検出した。谷の埋土は砂礫層である

が、トレンチ西端上層で確認した砂礫層には相当ないと考えられる。なお、この砂礫層から遺物は出土していない。

この調査区付近には大阪府の文化財分布図に記載されている城坂窯跡（8世紀）がある。また、調査区西側では（財）枚方市文化財研究調査会が過去におこなった調査（1982年）で須恵器窯の灰原が確認されており、7世紀末～8世紀



第58図 津田城遺跡 出土遺物実測図 (S=1/2)

初頭の時期の須恵器が多量に出土している。こういった周辺の状況を考えると、今回出土した須恵器は、須恵器の灰原に関する資料の可能性が考えられる。

第3トレンチ（第60図） 調査地は、西側が、枚方市津田低区配水場建設に伴う工事で削平を受けた丘陵上に位置する。この丘陵部頂上（T.P. 94m）に幅2m、長さ15mのトレンチを南北方向に設定した。

表土（腐葉土含む）と木の根等に伴う地山崩壊土を除去すると、トレンチ中央から北端にかけて段状の落ちを確認した。この落ちの埋土の堆積状況から、第59図で想定復元した谷筋と、一連のものとは考え難く、地滑り等による地山の崩落に伴う落ちと考えられる。またこの落ちの肩部から、落ちの埋没以降に形成された東西方向の溝状遺構を検出した。調査範囲が限られている為断言できないが、堆積状況から流路の可能性が最も高い。基盤層を構成する大阪層群の層中にある海成粘土層の粘土部が少ないとから、人为的に採掘した粘土採掘坑の可能性も一旦考えられた。しかし、この溝状遺構の方向が、段状の落ちと並行することから粘土採掘坑の可能性は低いと考えられる。これらの遺構埋土や、地山崩壊土を全て除去すると、大阪層群の基盤層を確認した。遺物は出土していない。

第4トレンチ（第61図） 調査地は、ほぼ東西方向にのびる丘陵（T.P. 104～105m）に位置する。この丘陵の尾根上に幅2m、長さ27mのトレンチを東西方向に設定した。しかし、調査地に谷が隣接していた為、十分な設定範囲が確保できなかったので、17m付近で屈曲させてトレンチを設定した。

表土（腐葉土含む）と地山崩壊土を除去すると、トレンチ中央東側で落ち込み状の崖地を検出したが、遺物は出土しなかった。これは、北方向に落ちる谷状地形である可能性が考えられる。それらの埋土を除去すると、大阪層群の基盤層を確認した。また、トレンチ西端では、地山層が疊層から構成される。トレンチ東端は擾乱のため不明であるが、おそらく大阪層群の基盤層が続いていたものと考えられる。遺物は出土していない。

第5トレンチ（第60図） 調査地は、耕作地として利用されていた地域に位置し、第2～3トレンチ間で一段上がりの耕作地にわたる範囲に及ぶ。この二筆にわたる土地に、幅2m、長さ23mのトレンチを南北方向に設定した。

表土（現代耕作土含む）と床土を除去すると、トレンチ中央部と第2トレンチとの交点であるトレンチ北端でそれぞれ、谷を検出した。

トレンチ中央部の谷であるが、谷埋土は砂層と砂礫層、シルト層からなり、南から北方向に下がって堆積が見られることから、トレンチ中央を南から北方向に谷が埋められたと推定できる。遺物は谷埋土の最下層から現代の瓦を検出し、谷埋土を除去すると大阪層群の基盤層を確認した。

トレンチ北端を南北方向に通る谷は、第2トレンチ西端で確認した谷と同一である。この谷の埋土も第2トレンチで確認した谷埋土と同一の砂礫層であり、砂礫層の中央部分から、須恵器片が7点出土した（写真図版23）。検出した須恵器は8世紀に該当し、トレンチ西側で以前確認された須恵器窯の灰原に含まれていた土器とはほぼ同時期であることから両者は、密接な関係を持っていると推定される。この谷埋土の砂礫層を除去すると、大阪層群の基盤層を確認した。

第6トレンチ（第61図） 調査地は、耕作地として利用されていた地域に位置する。この耕作地の平坦

面上に、幅2m、長さ17mのトレンチを東西方向に設定した。

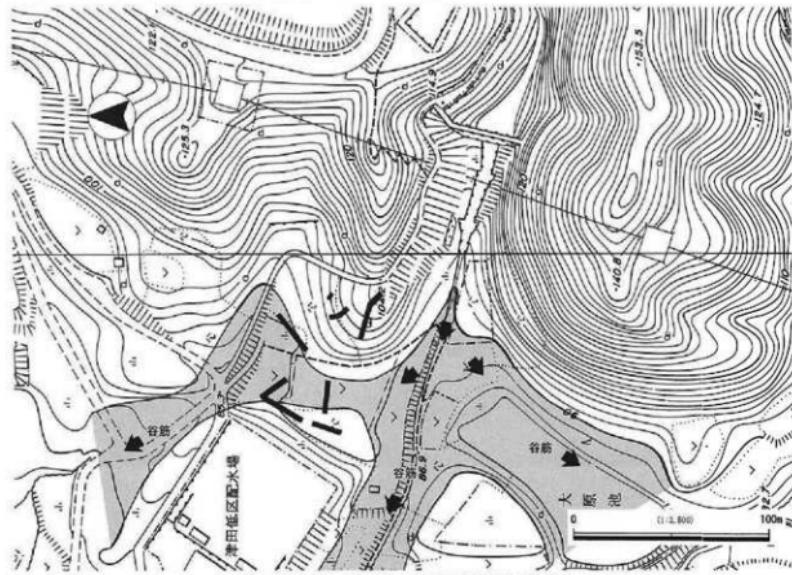
表土（現代耕作土含む）と床土を除去すると南北方向に通る谷（G.L.-2m以上）が検出された。谷の埋土は、上層で西方向から地山が崩落して堆積した砂層と、東側から地山が崩落して堆積した砂礫層に分かれる。谷埋土の下層部ではラミナを確認した。以上のことや、地元の人の話から、このトレンチ周辺は、かつてガラト川の氾濫原であった可能性が考えられる。

谷埋土を除去すると大阪層群の基盤層を確認したが、この基盤層上面は平坦であり、人為的に削平された可能性も考えられる。トレンチ中央部と東端では、東西方向に小さな断層が見られた。また、遺構・遺物は検出できなかった。

第7トレンチ（第61図） 調査地は、耕作地として利用されていた地域に位置する。この耕作地の平坦面上に、幅2m、長さ24mのトレンチを南北方向に設定した。

表土（現代耕作土含む）と床土を除去すると、トレンチの南端では、深さ約1mの溜池状の窪地を検出した。埋土は人為的に埋められたものと考えられるが、遺物は出土しなかったので、時期の確定はできなかった。埋土を除去すると大阪層群の基盤層を確認した。またトレンチの中央から北東側にかけても、整地土と地山崩壊土を除去すると大阪層群の基盤層を確認したが、起伏が激しく、人為的に掘削した結果と推定される。遺物は出土していない。

第8トレンチ（第61図） 調査地は、東西にのびる丘陵北側斜面の谷筋（T.P.95～98m）に位置する。この丘陵の北側に幅2m、長さ7.46mのトレンチを設定した。



第59図 津田城遺跡 旧谷地形想定復元図

このトレンチ周辺は、大阪府の文化財分布図に城坂窯跡（8世紀）があると記載された地域であったが、表土（腐葉土含む）と地山崩壊土を除去するとすぐに大阪層群の基盤層を確認した。遺構・遺物は検出できなかった。

第9トレンチ（第61図） 調査地は、東西にのびる丘陵の谷筋（T.P.97～99m）に位置する。この丘陵の北側に幅2m、長さ3.3mのトレンチを設定した。

このトレンチも第8トレンチ同様、城坂窯跡と記載された地域内に位置していたが、表土（腐葉土を含む）と地山崩壊土を除去すると大阪層群の基盤層を確認した。遺構・遺物は検出できなかった。

4.まとめ

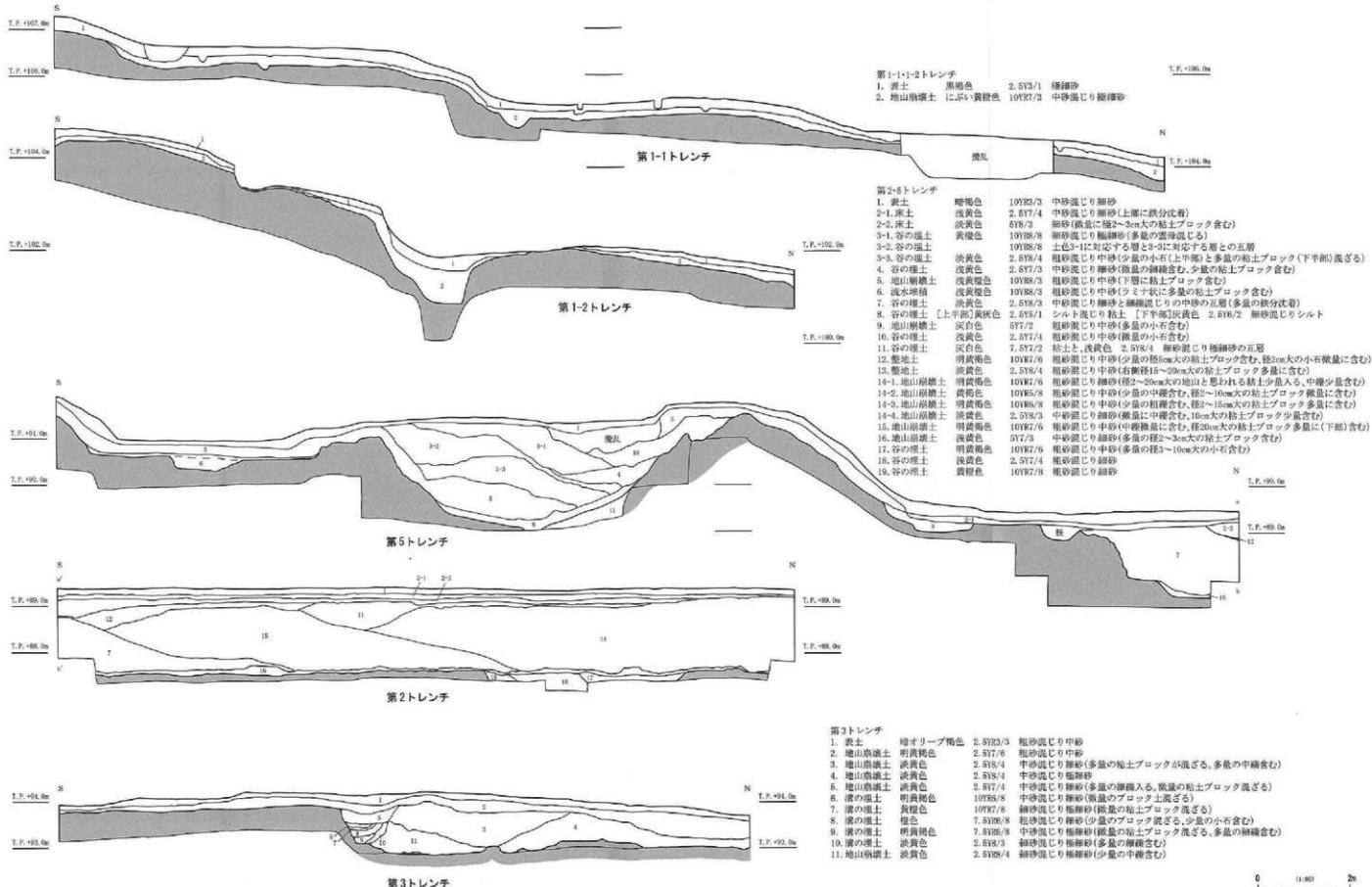
今回、調査した地域は、津田城遺跡（本丸山地区・城坂地区）や、城坂窯跡の範囲に位置することから、その関連施設の検出が期待された。

調査成果として、まず、14点の須恵器片が出土した第2・5トレンチを挙げることができる。第2・5トレンチの砂礫層から出土した須恵器は、調査区西側でかつて調査された須恵器窯の灰原や、調査区東側の城坂窯操業年代と一致する。このことから、須恵器窯の関連施設が、今回のトレンチのさらに西側や南西側の丘陵上に及んでいた可能性が考えられる。しかしその部分は、現在すでに人為的に削られてしまい崖面となっている箇所にあたる。

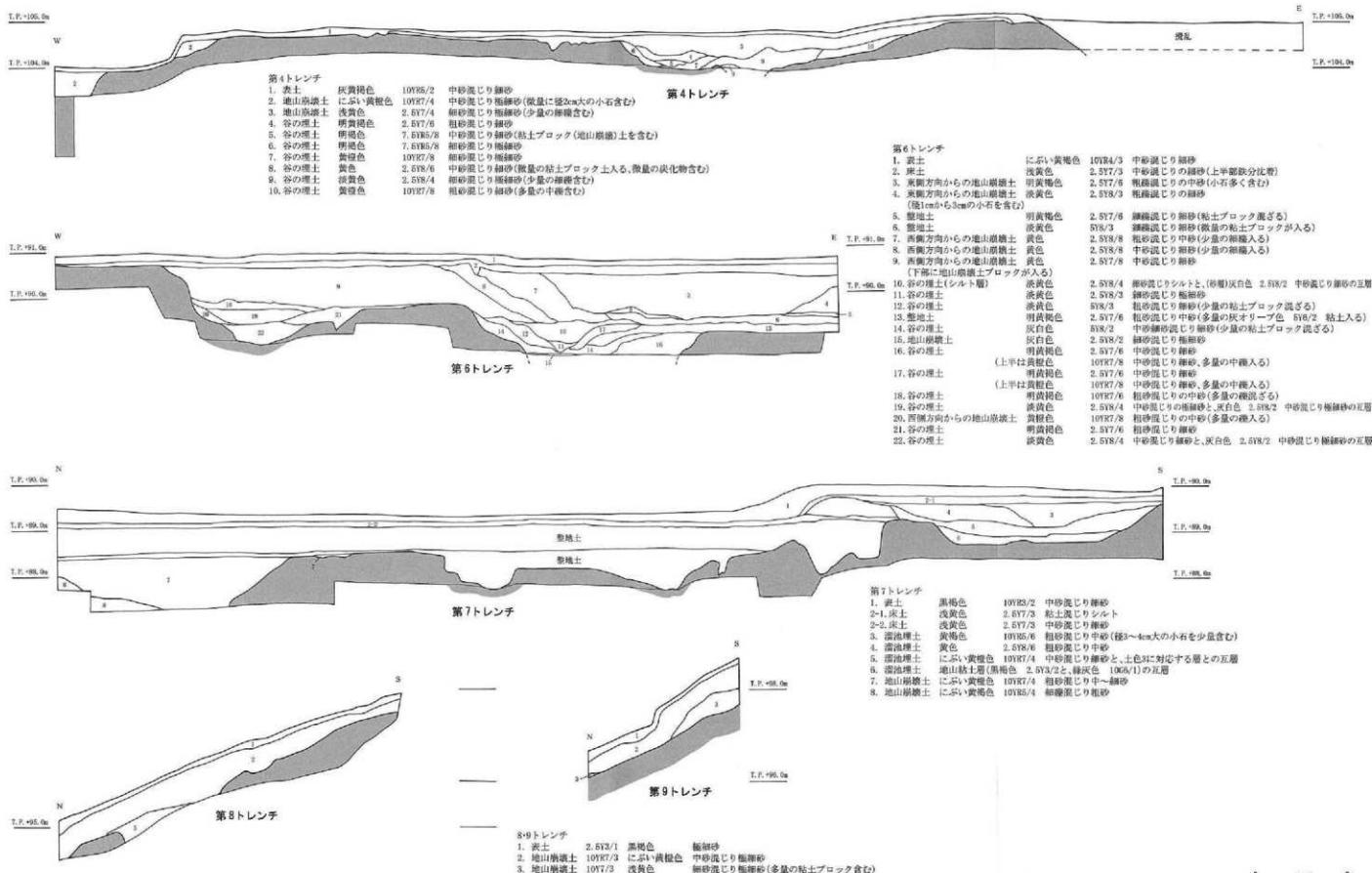
次に、第2～6トレンチの調査より谷地形の復元が可能となった。谷は津田山方向から古城地区に向かって流れる小規模な谷の1つである。この谷は8世紀以降のある時期に東側丘陵と西側丘陵の崩壊土によって埋没したと考えられるが、顕著な遺構や遺物は確認できなかった。

【参考文献】

- ・枚方市史編纂委員会 1986 「枚方市史 第十二巻」
- ・(財)枚方市文化財研究調査会 1980 「枚方市文化財年報I」「津田城遺跡（第3次調査）」
- ・+ 1982 「枚方市文化財年報II」「津田城遺跡（城坂南地区）」
- ・+ 1984 「枚方市文化財年報V」「津田城遺跡（本丸山地区）」
- ・+ 1985 「枚方市文化財年報VI」「津田城遺跡（本丸山地区）」
- ・+ 1986 「枚方市文化財年報VII」「津田城遺跡（城坂地区）」
- ・+ 1992 「津田城遺跡発掘調査概要報告」
- ・+ 1994 「枚方市文化財年報13」「津田城遺跡本丸山地区（第3次調査）」
- ・(財)大阪府文化財調査研究センター 2002 「津田城遺跡」



第60図 津田城遺跡 第1-1・1-2・2・3・5トレンチ 土層断面図



第61図 津田城遺跡 第4・6・7・8・9トレンチ 土層断面図

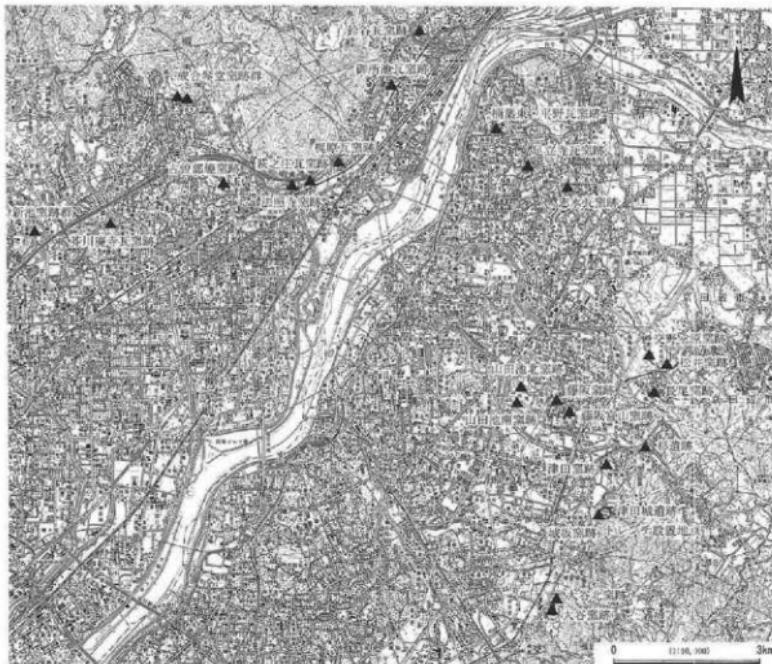
第3章 まとめ

前章では、実際に確認調査を行った担当者による調査成果の報告と見解を述べた。この章では、今回の一連の調査から得られた特徴的な資料について、周辺に立地する遺跡との比較から位置付けをおこないたい。また、これまで当センターがおこなった確認調査の成果から土層堆積データを抽出し、河内平野北部における沖積地堆積状況について集約をおこなった。

1. 津田城遺跡と枚方・交野古窯跡群

はじめに、津田城遺跡から出土した須恵器片と窯跡との関係について記述したい。今回、津田城遺跡内に設置した第2・第5トレンチからは、8世紀に所産時期をもつ須恵器片が数点出土した。調査担当者は、調査トレンチ西南方向に位置する城坂南地区において検出された須恵器窯灰原との関連に注目している。

津田城遺跡が立地する丘陵地は、一般に枚方台地と称され、大阪層群とその範野を縦取る段丘帯によって構成されている。枚方台地上では、これまでにも古墳時代から古代に操業された窯とその灰原が確認されており、「交野古窯址群」「枚方窯跡群」として周知されている（第62図参照・一部は京都府八幡



第62図 枚方台地における古窯址の分布図（6世紀～8世紀）

市に在地)。この二窯群のうち、最も早く土器焼成がおこなわれたと考えられているのは、6世紀後半に操業を開始した鶴谷川の右岸に位置する山田池窯跡群(山田池北窯・山田池南窯)と藤阪窯跡、船橋川右岸に位置する長尾窯跡群である。長尾窯は、短期のうちにその操業を終えたとみられるが、山田池窯と藤阪窯は、8世紀に至るまで操業を続け、一大窯跡群を形成した。また、やや遅れて操業を開始した柿葉・平野窯では、6世紀末期に須恵器焼成をおこなうものの、やがて瓦窯に転身し、この頃創建されたとみられる四天王寺からの需要に応えた。

7世紀にはいると交野山の縁辺において、須恵器窯が操業を開始する。まず、7世紀初頭頃に大谷窯群(大谷北窯址・大谷北窯址)が築かれ、次いで杉地区・津田地区・城坂地区の窯に火が灯された(杉遺跡・津田窯跡・城坂窯跡)。これらは8世紀前半頃まで修繕を繰り返しながら煙硝を立ち上らせたことが、灰原の層序堆積の確認から明らかとなっている。古代における窯業は、各時代のニーズにあわせて様々な製品を焼成したが、城坂窯跡の灰原からは円面鏡を含む多彩な器種が出土している。官衙との関連を示す資料の一端であろう。

これらの時代的趨勢をみると、今回おこなった津田城遺跡から出土した須恵器類は、8世紀前半に所産時期を持つものであり、城坂窯跡群との関連もおおいに想定できるところではある。もっとも今回の出土品には明確な溶着資料が見られず、窯出し時点で廃棄されたものか否かは不明である。また、遺物自体が包含層からの出土であり、丘陵上位部から転落してきた可能性が高いことなどから、今後は未確認の窯跡が斜面に存在することを予見して調査に臨む必要がある。

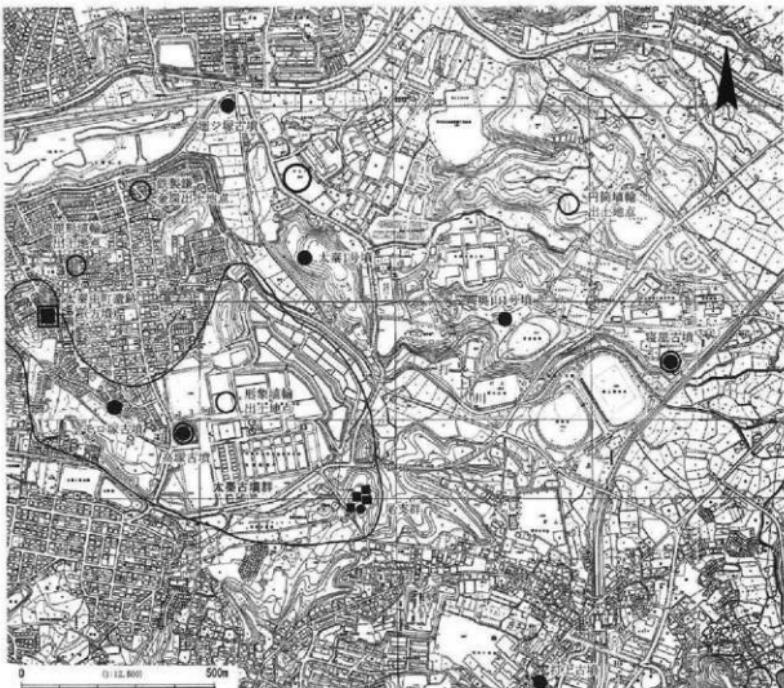
いずれにせよ、今回の調査は、城坂窯跡群がより広がること期待させる結果となった。

2. 奥山1号墳(寝屋南遺跡)と古墳群の広がり

次に、今回の調査によって6世紀末期に築造されたとみられる円墳一基(奥山1号墳)が新たに確認された寝屋南遺跡と、周辺に位置する古墳群のひろがりについて記述したい。なお、これまでにも当センターでは、打上川を挟んで対峙する太秦古墳群のひろがりについて、詳細な報告をおこなっているため、ここではその報告を参考にしつつ寝屋南遺跡近隣の状況について記したい。

打上川流域の南側に広がる太秦古墳群では、5世紀後半から6世紀前半に古墳築造の最盛期を迎える。この古墳群には円墳・方墳といった墳形差や規模の相違、埴輪樹立の有無といった格差が顕著にあらわれており、古墳の階層が明確に示されている。最も盟主的な古墳は、周溝を備える大型円墳である高塚古墳や同じく周溝を持つ方墳である太秦中町古墳などである。ともに尾根筋上に位置し、大量の形象埴輪や円筒埴輪をめぐらせている。この古墳造営地帯が、6世紀後半には打上川を越え、北東方向の寝屋地区・打上地区へも広がる傾向をみせる。打上川の上流に位置する寝屋古墳は、無袖の横穴式石室をもつ終末期古墳であり、今回新規に確認した奥山1号墳も、出土遺物から6世紀末頃の築造であることが確認されている。なお、同じ打上川下流には奥山1号墳とほぼ同サイズの円墳である太秦1号墳が築かれている。

奥山1号墳は、尾根筋上に位置しているが、これを古墳群の一角と捉えた場合、その北限はどこに求められるかが問題である。一昨年度おこなった寝屋南遺跡の確認調査では、奥山1号墳よりも300m程北東へ隔てた地点に設置したトレーンチから、円筒埴輪片と6世紀後半所産の須恵器甕・壺蓋・壺身等が出土した。トレーンチは、急峻な斜面と南方の尾根に続く小起伏の上に設置しており、その斜面からは焼土とともに溶着した須恵器片が出土した。このことから調査担当者は窯址の存在を想起し、起伏上から出



第63図 太秦古墳群の広がりと古墳分布図

土した遺物も灰原に関連するものであろうとして報告した。しかし、この起伏部の断ち割り断面には西へ傾斜する黄灰色疊まじりシルト層が認められ、須恵器片はこの層からの出土である。小片とはいえ、円筒埴輪がこの須恵器包含層とほぼ同レベルから出土していることを考慮するならば、古墳の存在を疑ってみてよいのではないかと考える。いずれにせよ、その是非については今後の調査を待たねばならないが、太秦古墳群の範囲拡大を考慮する一材料としてここに添えておきたい。

なお、今回の確認調査では、寝屋南地区の東側に位置する寝屋東遺跡内にもトレンチを設置して掘削をおこなっている。ここでは6世紀代の遺物包含層を確認しているが、今のところ埴輪片などの出土はない。寝屋東遺跡は、寝屋南遺跡とは「たち川」を挟む別丘陵上の立地となるため、古墳群のひろがりは及ばないのではないかとの見方が、今のところ有力である。今後の調査成果によって、古墳群の範囲が明確に示されることを期待したい。

3. 沖積地の堆積状況と遺構の立地

ここでは、これまでの確認調査によって得られた土層堆積データを用いて、古代以前の地形変化と遺構の変遷を中心として記述した。これまでにも当センターが刊行した報告書には、寝屋川市内に設置したトレンチから得られた成果を整理し、その堆積状況を想定した報告がある（表4参照）。今回はその報

告を参考にしつつ、新たに得られたデータを加えて柱状模式図を作成し（第62図）、時代区分ごとに当該地形の想定復元を試みた。

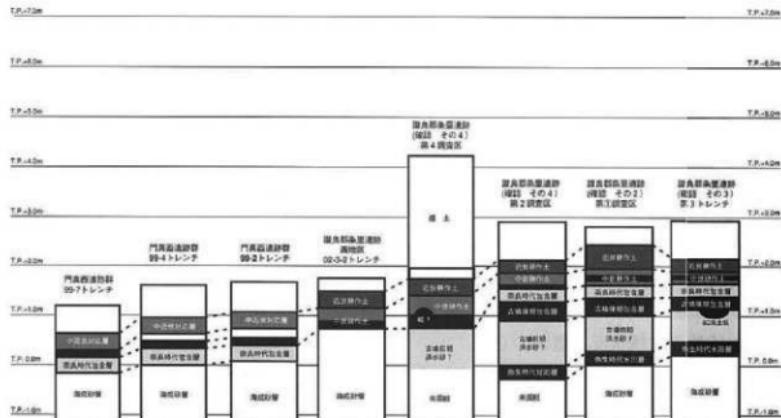
なお、生駒山から派生した丘陵地形は、現在寝屋川市域を縦断する国道170号大阪外環状線附近を境としてなだらかな沖積平野へと移行し、大阪湾へむかってひらくため、ここではその想定変化線を中心として東西約3.5kmの距離にわたって作図をおこなった。

縄文時代 縄文時代の遺物出土や包含層の確認は、丘陵地縁辺部（第63図では右上附近）に集中している。

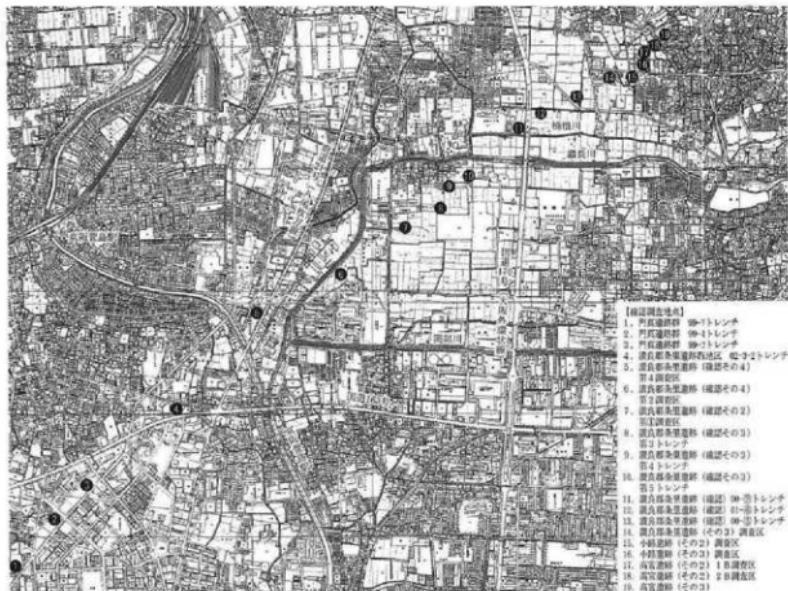
現地盤がT.P.+11.0mを測る寝屋川市高宮地区の丘陵縁辺地では、中近世の耕作土層直下に黄灰色砂礫層が確認された（第62-2図右端・高宮遺跡（その2）調査区）。この砂礫層からは、縄文前期大歳山式に類される土器片やサスカイト製石匙・石鐵他多数の石器切片が出土した。砂礫層直下には、高位段丘に相当すると考えられる硬くしまった灰黄色粘土層があり、国府型ナイフ形石器が出土した。そのレベルはT.P.+10.2m程度を測る。また、この調査区内には南西にもむかって開く縄文時代に埋没したとみられる小谷が検出された。この小谷は、砂礫を主体とする下層と、巨大な風倒木を含む高植土層である中層、黄褐色シルト層である上層の3層から成る。この上層上面では水成とみられる黒色粘土を主体とする小河川が錯綜する状況が認められ、谷の最終形態として捉えられる。

高宮遺跡（その2）調査区より丘陵地を50m程南へ下がった小路遺跡（その3）調査区では、高位段丘面は確認できず、大歳山式土器を含む縄文時代前期相当の砂礫層が、T.P.+6.0m以下まで堆積していた。

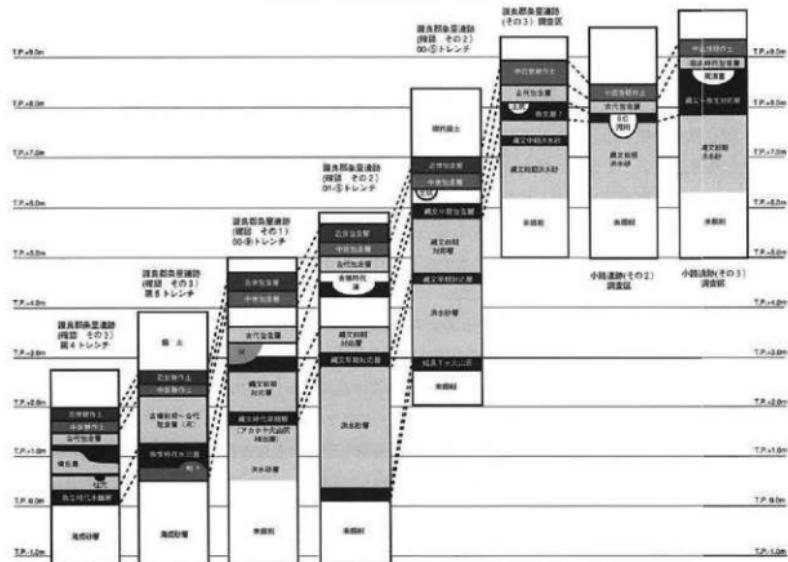
また、高宮遺跡（その2）調査区より流入した河川は、その幅を広げながらさらに西・南方向へと蛇行し、調査区外へと流出していた。



第64図（1） 沖積地の堆積状況 基本層序模式図（1）



第65図 確認調査トレレンチ設置地点



第64図 (2) 沖積地の堆積状況 基本層序模式図 (2)

小路遺跡（その3）調査区より市道を隔てて南側に設置した小路遺跡（その2）調査区内では、T.P.+8.0m附近に黒褐色を呈するシルト～粘土層がほぼ全域にわたって広がっており、その直下に灰黄色粗粒砂層が認められた。黒褐色シルト層からは遺物が出土しなかったが、砂層から北白川下層式に属する縄文土器底部が出土した。

小路遺跡（その2）調査区の西側に設置した讃良郡条里遺跡（その3）調査区でも、ほぼ同じレベルから黒褐色シルト層と砂層が確認されたが、この地点では、砂礫層の下に風倒木を含む腐植土層があり（T.P.+7.5m附近）、この下にはラミナを伴う砂礫が堆積していた。砂層からは縄文前期～中期に属する土器片が出土したが、縄文前期のものは最下層に集中すると報告されている。

なお、図示は控えたが、小路遺跡（その2）調査区北側に接する讃良郡条里遺跡（その1）調査区からは、縄文早期に遡る土器片の出土が確認されている。

讃良郡条里遺跡（その3）調査区より南西方向へ約150m程隔てた地点に設置した讃良郡条里遺跡（確認）00-⑤トレンチでは、鋼矢板の圧入を行い、地下5mまでの掘削を行った。その結果、T.P.+6.0m付近において鷹島～船元II式土器を含む黒褐色粗砂まじりシルト層を確認した。この下には粗砂層と黒褐色砂質シルト層が約3mの厚さをもって堆積していた。また、このトレンチではT.P.+3.0m付近において水成層である黒色粘土堆積を確認し、この中からA.T.火山灰（約24,000年前に降灰）が検出された。

00-⑤トレンチより南西方向へ150m程隔てた地点に設置した01-⑥トレンチと、さらに外環状線を跨いで100mほど隔てた地点に設置した00-⑨トレンチでは、各々T.P.0.0m、-1.0m附近まで掘削をおこなった。その結果、00-⑨トレンチではT.P.+1.8m附近においてアカホヤ火山灰（約6300年前に降灰）を含む黒色粘土層を確認し、01-⑥トレンチではこれに対応する層がT.P.+3.0m前後で検出された。

00-⑨トレンチより南西方向へ300m程隔てた讃良郡条里遺跡（確認その3）第5トレンチでは、T.P.0.0m付近より下に粘土と粗砂の互層がみられ、T.P.-0.5m以下では、海成砂層の堆積があった。このトレンチより西部では、T.P.-0.5m以下の深度では、ほぼ一定して海成砂層の広がりがみられ、これと同時に縄文土器の出土は皆無となる。

以上の成果を環境変化と対応して記述すると、以下のようになる。縄文時代前期には、砂礫層が丘陵地の隆起や海退によって形成された急峻な段丘・小谷を徐々にうずめ、低地へむかってなだらかな傾斜を作った。この砂礫層を地盤として樹木は繁茂し、一時期安定した植物帯が存続したものと思われる。丘陵縁辺地では人間の起居もあり、土器や石器の製作も積極的におこなわれていた。しかし、中期の海進に伴って木々は海底に没し、あるいは洪水砂に呑まれ、人々はその居住地を他所へ移したとみられる。海進時は、現在よりも5～6m程海水位は高かったと推測されており、当該地の汀線は国道170号（大阪外環状線）より200m程東側付近にあったと考えられる。これは、讃良郡条里遺跡（確認）00-⑤トレンチを設置した付近にあるが、縄文時代中期に属する遺物包含層を確認できるのはこの地点までである。また、海岸線の東進に伴い、外環状線より東300m程の範囲にわたって湿地化した干潟が形成された。現在黒褐色シルト層として残るもののがこれに相当するのではないかと見ている。

縄文後晩期には、低温化と降雨量の増加に伴って、海退と湿地の脱塩が徐々に進み、「河内湾」は「河内潟」へと姿をかえた。当該地の汀線は400m程西方向へと移動し、讃良郡条里遺跡（確認その3）第5トレンチ付近にあったと思われる。

弥生時代 次に弥生時代の景観復元を試みたい。弥生土器の出土は丘陵縁辺地では見られず、当該地で

は外環状線から西側約700m程の区域と、東側の丘陵上に位置する大尾遺跡（T.P.+40m前後）に限られる。

讃良郡条里遺跡（確認その3）第5トレンチでは、T.P.+1.5mの深度において黒色粘土をベースとする水田面を検出し、足跡と畦状遺構を確認した。同様の水田面は、讃良郡条里遺跡（確認その3）第4トレンチでT.P.+1.2m付近、讃良郡条里遺跡（確認その3）第3トレンチではT.P.+0.5m付近、讃良郡条里遺跡（確認その2）第①調査区ではT.P.+0.3mの深度で検出しており、これは100mに対して約35cmの勾配を持つ緩やかな斜面に、広範囲にわたって水田が営まれていたことを示している。また、讃良郡条里遺跡（確認その2）第①調査区南側には自然堤防が形成されており、ここから弥生前期～中期に属する土器片の出土が報告されている。このことから、水田脇に居住空間が確保されていたものと推測されるが、住居跡などは未確認のため推測に留めておきたい。

讃良郡条里遺跡（確認その2）第①調査区より300mほど南西へ隔てた地点に設置した讃良郡条里遺跡（確認その4）第2調査区では、T.P.0.0m付近において類似する黒色粘土層を確認している。これが水田遺構であるか否かは不明であるが、このトレンチより以西では、この層が確認できず、海成砂層が広がるのみである。このことから、弥生時代の河内湖は、この近辺が汀線であったと考えられ、これより東側約700mの範囲に限り、水田経営が可能な湿地帯が広がっていたものと推測される。

古墳時代 弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、河内湖は天満砂堆が海水の浸入を防いだため、完全な淡水湖である「河内湖」へと変化した。しかし、その河内湖も河川が運ぶ土砂によって徐々に埋め立てられ、随所に池や沼沢を残しながらも陸地化が進み、平野となった。当該地でも、汀線の移動と土地の乾燥に従って居住域の拡大が認められる時期である。

丘陵縁辺地や低地の自然堤防上では、古墳時代前期の集落が営まれ、その居住範囲を低地へと広げていく様相が確認できる。しかし、大規模な洪水砂層も隨所で見受けられることから、決して安定した気候が続いた時代ではなく、人々は自然災害を享受しながらも自ら居住地を移していたものと推測される。

高宮遺跡（その2）・小路遺跡（その3）調査区では、古墳時代初頭期の周溝墓群が検出され、集落の存在が指摘されたが、大型の前方後方形周溝墓の築造を最後として廃絶し、これに繋がる遺構・遺物の出土は皆無となる。かわって古墳時代中期頃の集落跡は、丘陵地頂部付近を中心として営まれ、高宮遺跡（その3）調査区内からは、30基を越える竪穴住居群が初期須恵器を伴って検出された。

また低地では、讃良川が形成した自然堤防上に周溝墓を有する集落の存在したことが、讃良郡条里遺跡（確認その3）第4・第5トレンチの調査から明らかとなっているが、これも中期までは存続せず、かわって南側の藤屋北遺跡調査区内において確認された集落が繁栄する。讃良郡条里遺跡（確認その4）第2調査区からは、円筒埴輪がまとまって出土したことから、墓域の移動も行われたとみられる。

なお、これよりも西側の門真遺跡群の各トレンチでは、古墳時代の包含層は認められない。河内湖の汀線の後退が比較的遅く、依然として湿地状地形を呈していた地帯であったとみられる。門真遺跡群99-4トレンチでは、海成砂層の上にラミナを伴う砂質シルトと炭化物・植物遺体の互層があり、その直上には奈良時代の包含層が認められた。このことは、古代以前の土壤がきわめて不安定な状態であったことを示している。当該地における古墳時代の河内湖汀線は、現寝屋川市域南部を横断する国道163号付近にあったものと推測される。

表4 国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設事業に伴う既往の埋蔵文化財確認調査一覧表(平成8年～14年度)

調査跡・地区名	所在地	調査年度	調査期間	参考文献・取締考察・本調査着手事業
三ツ島遺跡	門真市三ツ島 地先	H8年度	1996年12月26日 ～1997年3月31日	【文献】「三ツ島遺跡～一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う門真市三ツ島地区埋蔵文化財認証調査報告書」
四宮地区	門真市上原伏～ 横舟 地先	H10年度	1998年12月26日 ～1999年3月31日	【文献】「長尾台地区、杉、安富地区、御田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群～一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財認証調査報告書」第61集 2001.03.31
長尾台地区	枚方市長尾台 4丁目 地先	H10年度	1998年3月9日～ 5月29日	
津田城遺跡	枚方市津田 地先	H11年度	1999年7月20日～ 11月30日	
杉・水室地区	枚方市杉 地先	H11年度	1999年12月21日 ～2000年3月31日	【文献】「大阪府門真遺跡群中央部における完新世中頃以後の三角州と湿地の発達」
有池遺跡	交野市青山 地内	H11年度	1999年11月25日 ～2001年3月31日	【本調査】平成12年度／津田城遺跡 平成14年度／有池遺跡 平成15年度／有池遺跡 上私御跡
杉中貴谷道路	枚方市長尾台 3丁目 地先	H12年度	2000年12月26日 ～2001年1月26日	【文献】「杉中貴谷道路～第二京阪枚方遺跡群(杉地区)発掘調査報告書～」第82集 2002.10.31
讚良郡条里遺跡 (確認)	寝屋川市高宮 西条町地先	H12年度	2000年11月16日 ～2001年3月23日	【文献】「讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、扇子作遺跡、藤原大龜谷道路～長尾・東尾跡群、長尾・東尾地区～一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財認証調査報告書～」第77集 2002.08.31
小路遺跡・高宮遺跡 ～大塚遺跡	寝屋川市高宮 小路・高宮守町地先	H12年度	～2001年3月21日	
打上遺跡・大秦遺跡 ・太秦古墳群	寝屋川市打上 地先	H12年度	2000年11月16日 ～2001年2月28日	【考原】「讃良郡条里遺跡について ～寝屋川市城の讃良郡条里の再確認～」 「茄子(洋)上の山遺跡の歴史探求」
扇子作遺跡・ 上の山遺跡	枚方市扇子作南 町・交野市私郎 町	H12年度	2000年5月1日～ 9月25日	「高宮・小路遺跡から讃良郡条里的神積堆積状況」
藤代天塹谷遺跡 ・長尾駁跡群	枚方市長尾谷 地先	H12年度	2000年6月7月～ 2000年10月～11月	【本調査】平成13年度／小路遺跡(高宮地区) 小路遺跡(大尾地区) 打上遺跡(太秦古墳群) 讃良郡条里遺跡(その1～その3)
長尾東地区	枚方市長尾谷 地先	H12年度	2000年6月～7月	平成14年度／ 高宮遺跡(その2・その3) 小路遺跡(その2・その3) 讃良郡条里遺跡(その4・その5)
長尾東地区	枚方市長尾谷 地先	H13年度	2001年5月16日～ 2002年3月31日	
讃良郡条里遺跡 (確認 その2)	寝屋川市高宮・ 新家・四條畷市 砂 地先	H13年度	2001年6月19日～ 11月30日	【文献】「門真宮地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私郎南遺跡、東食治遺跡、津田城遺跡東地区～一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財認証調査報告書～」第93集 2003.02.28
門真西地区(確認)	門真市北東木本町 地先	H13年度	2001年11月20日 ～2002年3月25日	
門真西地区 (確認 その2)	門真市三ツ島 地先	H13年度	2002年2月15日～ 3月25日	
讃良郡条里遺跡 四地区(確認)	門真市北東木本町 地先	H13年度	2001年11月20日 ～2002年3月25日	【考原】「高宮・小路～讃良郡条里遺跡における耕植地堆積状況」
讃良郡条里遺跡 (その3)	寝屋川市新家2 丁目 地先	H13年度	2001年11月17日 ～2002年3月25日	
太秦・大尾・ 太秦古墳群	寝屋川市守町 地先	H13年度	2002年3月19日～ 6月30日	【本調査】平成14年度／寝屋東遺跡 平成15年度／ 寝屋東遺跡 讃良郡条里遺跡(その6～その8) 寝屋南遺跡 太秦遺跡(その2) 大尾遺跡(その2)
打上遺跡・ 寝屋南遺跡	寝屋川市寝屋 地内 他	H13年度	2001年6月19日～ 10月31日	
寝屋東遺跡 (確認)	寝屋川市寝屋 地内	H13年度	2001年11月16日 ～2002年2月28日	
寝屋東遺跡 (確認 その2)	寝屋川市寝屋 地内	H13年度	2002年2月15日～ 3月25日	
私郎南遺跡	交野市私郎南 1丁目 地先 他	H13年度	2001年9月5日～ 2002年3月15日	
東食治遺跡	交野市東食治 1丁目 地先 他	H13年度	2001年9月5日～ 2002年3月25日	
津田城遺跡東地区	枚方市津田 東町 3丁目 地先 他	H13年度	2001年8月10日～ 12月25日	
門真西地区 (確認 その3)	門真市北島 地 先	H14年度	2002年10月1日～ 11月29日	
讃良郡条里遺跡 四地区(確認 その2)	門真市北東木本町 育前町 上馬伏	H14年度	2002年9月2日～ 2003年1月31日	【文献】「讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、寝屋東遺跡、食治遺跡、津田城遺跡～一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財認証調査報告書～」第101集 2003.09.30
讃良郡条里遺跡 (確認 その4)	寝屋川市讃良民 町 地先	H14年度	2002年4月10日～ 2003年3月31日	
寝屋南遺跡西地区	寝屋川市寝屋 打上 地内	H14年度	2002年11月1日～ 2003年3月31日	【本調査】平成15年度／奥山遺跡
寝屋東遺跡 (その3)	寝屋川市寝屋 地内	H14年度	2002年11月26日～ 2003年2月28日	
倉治遺跡 (その2)	交野市青山・ 東食治 地内	H14年度	2002年8月1日～ 11月30日	
津田城遺跡 (その2)	枚方市津田 南町 地先	H14年度	2002年9月2日～ 2003年1月10日	

図 版

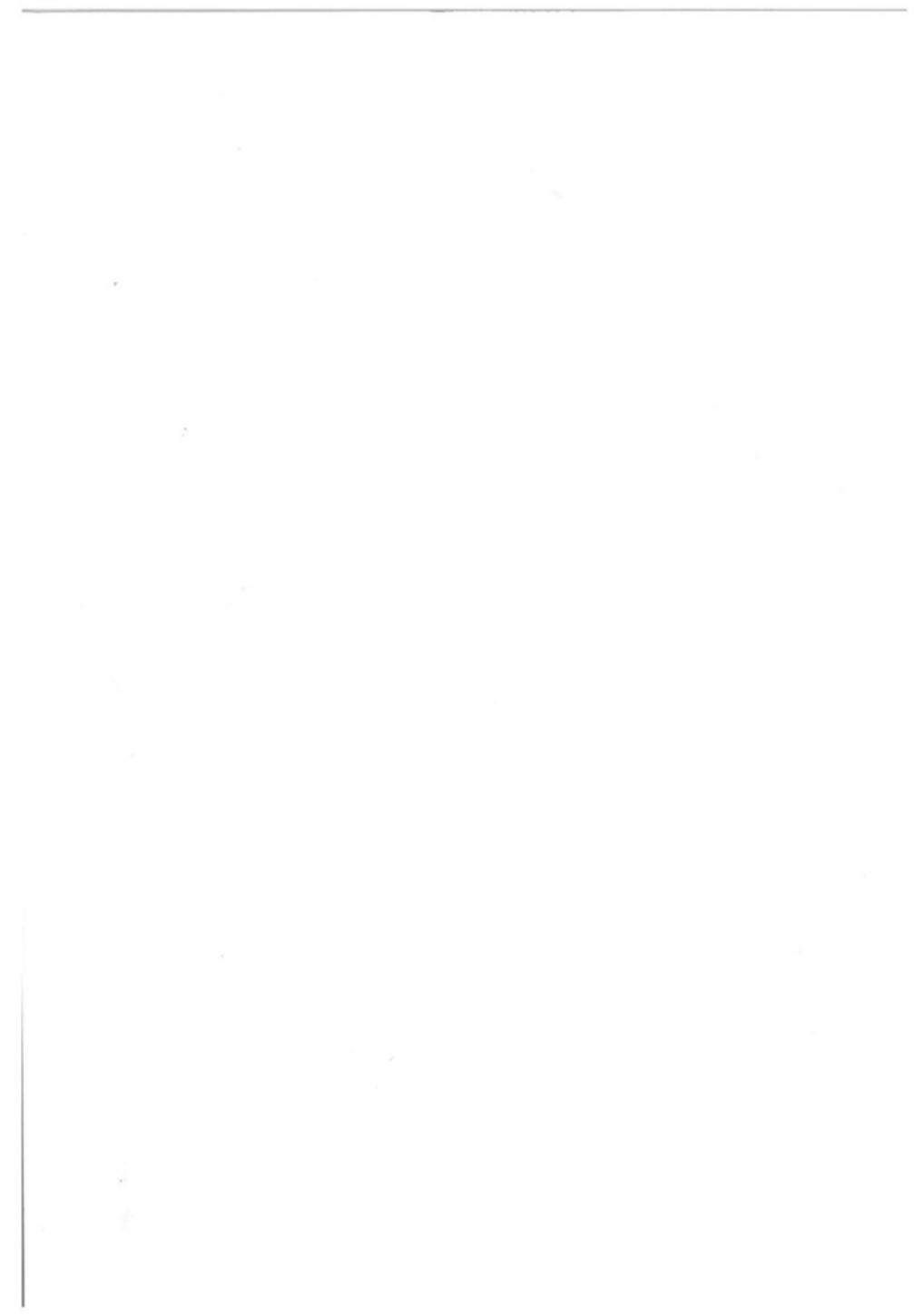




写真 2. 02-7 レンチ中央部 断面 (南から)



写真 1. 02-7 レンチ北東部 断面 (南から)



写真 4. 02-5 レンチ 第2b面 検出土坑断面 (南から)



写真 3. 02-5・6 レンチ 全景 (南から)

写真図版2 譲良郡条里遺跡西地区 2



写真1. 02-4トレンチ 全景（北西から）



写真2. 02-9トレンチ 第2b面 道耕検出状況（南から）



写真3. 02-4トレンチ 第2b面 土坑断面（西から）

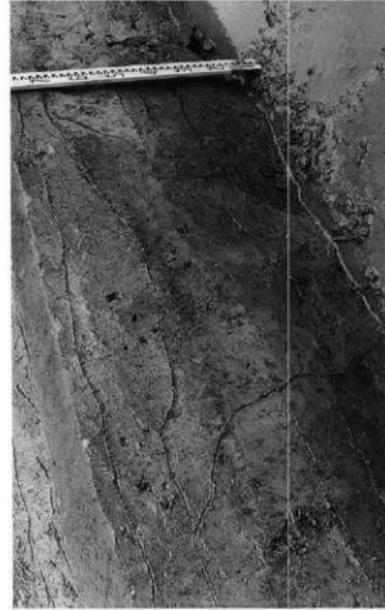


写真4. 02-4トレンチ 第3～4層 断面（南西から）

写真図版 3 講良郡条里遺跡西地区 3



写真2. 02-3-2トレンチ 1(溝)・2(溝) (北から)



写真3. 02-3-2トレンチ 3(溝)・26(溝) 断面 (南から)



写真4. 02-3-1トレンチ 第2b面 (南から)

写真図版4 譲良郡条里遺跡西地区 4



写真1、02-32トレンチ 壁面 (南東から)



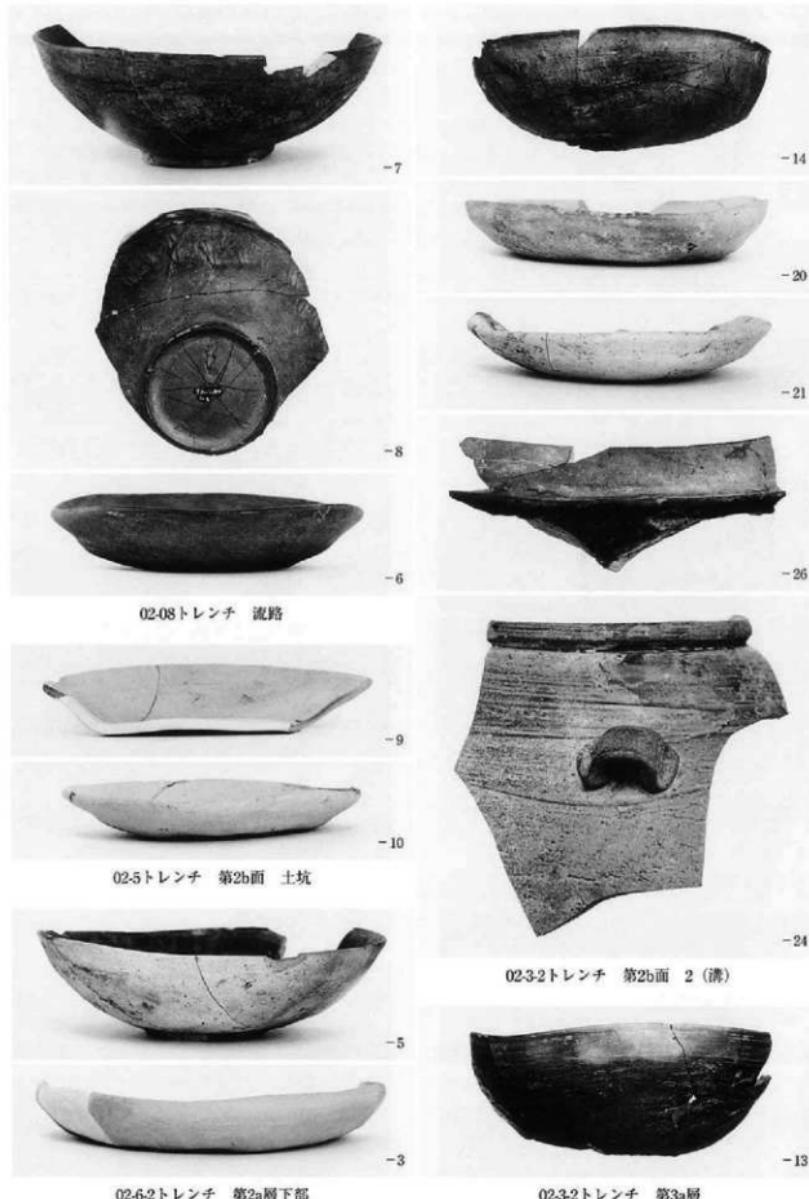
写真2、02-2トレンチ 第3a層 瓦器搬出土状況 (南から)



写真3、02-2トレンチ W51-W71層 斷色帶 (南東から)



写真4、02-1トレンチ 変形構造 (南東から)



写真図版6 講良郡条里遺跡（確認・その4） 1



写真2、第1-2調査区 第3面検出状況（北から）



写真1、第1-1調査区 第3面検出状況（西から）



写真4、第2-1調査区 第5・6面検出状況（西から）



写真3、第2-1調査区 第2面検出状況（西から）

写真図版7 譲良郡条里遺跡（確認・その4） 2

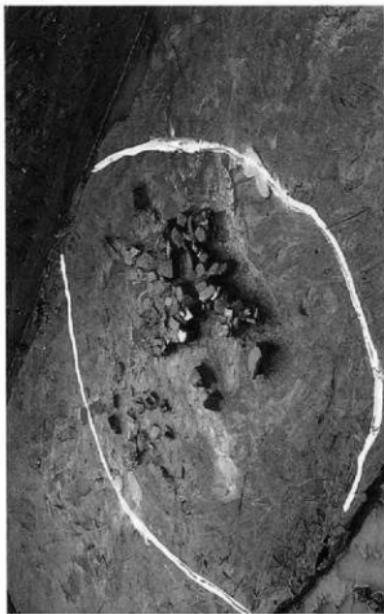


写真1. 第2-1調査区 土器たまり 1 遺物出土状況



写真2. 第2-1調査区 土器たまり 2 (土坑2) 遺物出土状況
写真4. 第5調査区 確認トレンチ土層断面



写真3. 第3-2調査区 確認トレンチ土層断面



写真1. 第1-2調査区出土 須恵器

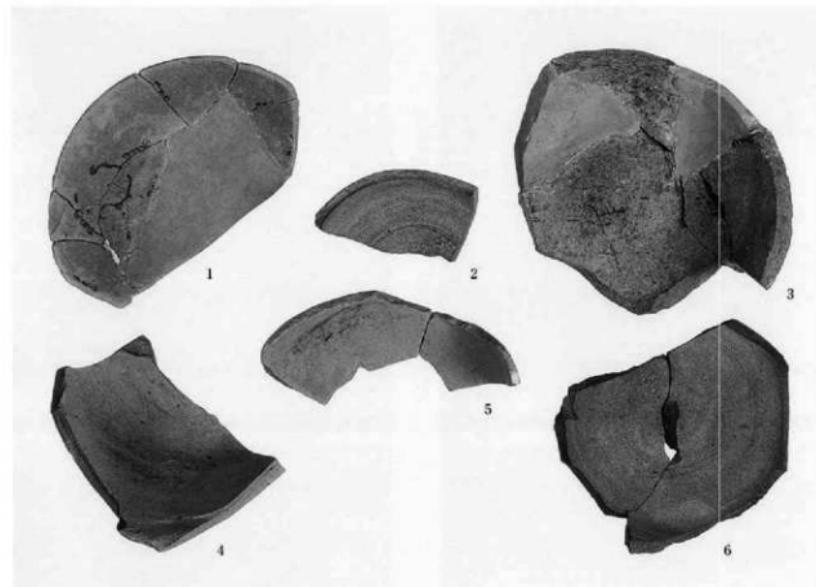


写真2. 第1-1・第2-1調査区出土 須恵器

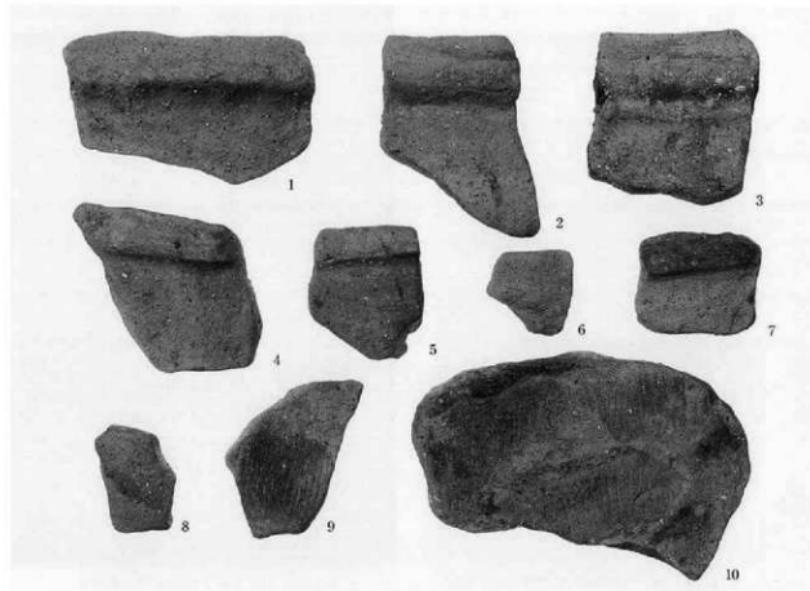


写真1. 第2-1調査区出土 円筒埴輪

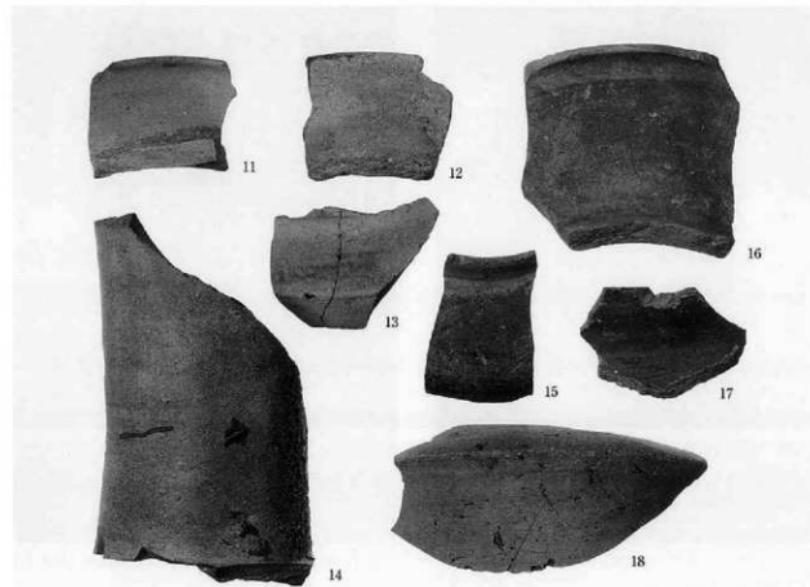


写真2. 第2-1調査区出土 須恵器

写真図版10 寝屋南遺跡西地区 1



写真1. 第1トレンチ 谷埋め立て状況（北から）



写真2. 第2トレンチ 全景（北から）



写真3. 第3トレンチ 全景（北から）

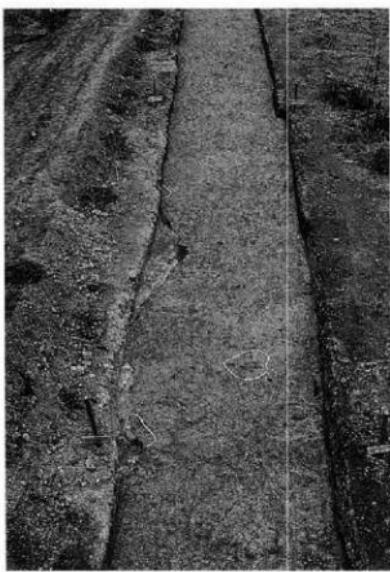


写真4. 第3トレンチ 掘立柱建物跡検出状況（南から）



写真1. 第3トレンチ 南端落ち込み（西から）



写真2. 第4トレンチ 谷脇部（北から）



写真3. 第5トレンチ 陥落状況（北から）



写真4. 第8トレンチ 正斜面山（西から）

写真図版12 寝屋南遺跡西地区 3



写真1. 第6トレンチ 全景（東から）

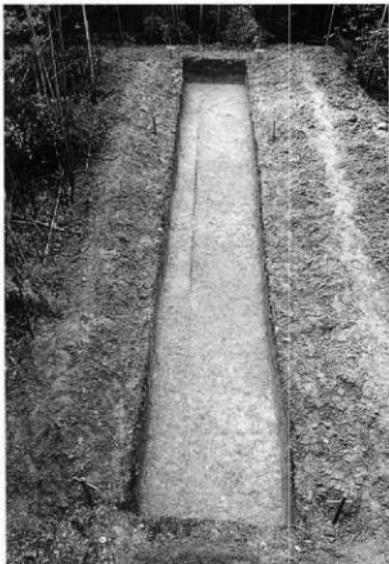


写真2. 第7トレンチ 全景（北から）



写真3. 第9トレンチ 全景（南から）



写真4. 第10トレンチ 全景（南から）



写真1. 第11トレンチ 全景（西から）



写真2. 第12トレンチ 全景（北から）



写真3. 第12トレンチ 焼土坑



写真4. 第13トレンチ 全景（東から）

写真図版14 寝屋南遺跡西地区 5



写真1. 第11トレンチ 古墳検出状況



写真2. 第11トレンチ 古墳周溝断面



写真3. 第11トレンチ 古墳周溝内須恵器出土状況



写真4. 第11トレンチ 南端部谷理め立て状況



写真2、第1・第3トレンチ 北東壁 断面（北西から）



写真3、第4・第5・第6トレンチ 遠景（北西から）



写真4、第6・第7トレンチ 遠景（南東から）

写真図版16 寝屋東遺跡 2



写真1. 第4トレンチ 全景（北西から）



写真3. 第5トレンチ 北東壁 断面（西から）

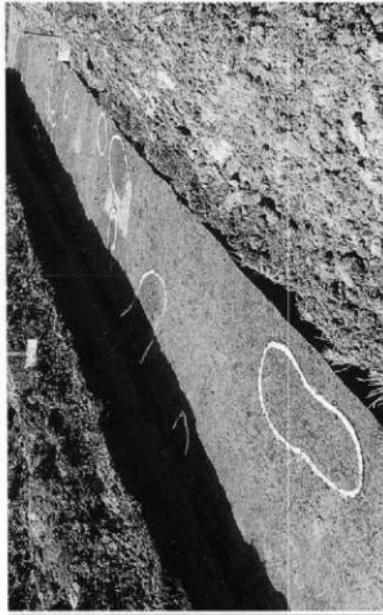


写真2. 第4トレンチ 遺構検出状況（南西から）



写真4. 第5トレンチ 遺構検出状況（西から）



写真1. 第6トレンチ 全景（南東から）



写真2. 第6トレンチ 遺構検出状況（南から）



写真3. 第6トレンチ 谷肩部 検出状況（南東から）



写真4. 第7トレンチ 北西壁 断面（南東から）

写真図版18 倉治遺跡 1



写真1. 第1-1トレンチ 全景 (西から)



写真2. 第1-2トレンチ 北壁 (南から)



写真3. 第2トレンチ 西壁 (東から)



写真4. 第2トレンチ 第2面 遺物出土状況 (東から)



写真1. 第3トレンチ 北壁(南から)



写真2. 第4トレンチ 北壁(南から)



写真3. 第3トレンチ 北壁(南から)



写真4. 第5トレンチ 北壁(南から)

写真図版20 倉治遺跡 3



写真2. 第8トレンチ 北壁 (南から)



写真1. 第7トレンチ 北壁 (北から)



写真4. 第10トレンチ 北壁 (南から)



写真3. 第9トレンチ 第1面 (北から)



写真2・第2トレンチ 東壁断面（南側から）



写真4・第4トレンチ 全景（南側から）



写真1・第1-1・第2トレンチ 全景（南側から）



写真3・第3トレンチ 全景（南側から）

写真図版22 津田城遺跡 2



写真1. 第5トレンチ 全景 (南西から)



写真2. 第6トレンチ 全景 (北東から)



写真3. 第7トレンチ 全景 (北東から)



写真4. 第8トレンチ 全景 (北から)

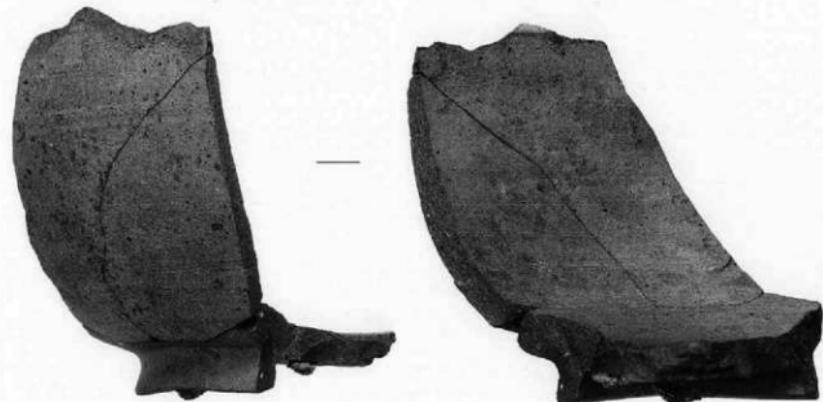


写真1. 第2トレンチ 出土遺物

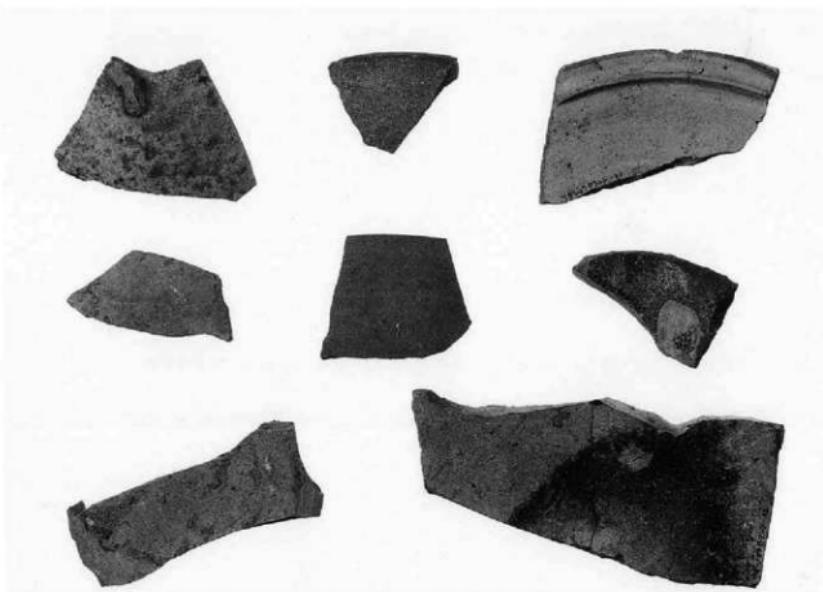


写真2. 第2トレンチ・第5トレンチ 出土遺物



報告書抄録

ふりがな	さらじんじょうりいせき、ねやみなみいせき、ねやひがしいせき、くらじいせき、つだじょういせき						
書名	讃良都条里遺跡・寝屋南遺跡・寝屋東遺跡・倉治遺跡・津田城遺跡						
調書名	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書						
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第101集						
編著者名	井上智博・伊藤武・黒須亜希子・河端智・河村恵理						
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階						
発行年月日	2003年9月30日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
さらじんじょうりいせき 讃良都条里遺跡 にしちく 西地区(確認)	かどまし 門真市 あなたとまち 北果本町 みやまたまち かみまほし 宮前町・上馬伏	27223		34°44'19" 135°37'15"	平成14年9月2日 平成15年1月31日	468m ²	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
さらじんじょうりいせき 讃良都条里遺跡 (確認その4)	ねやわわし 寝屋川市 かわのわざわ 寝島東3丁目・ うらがしまちともち 讃良東町地先	27215	36	34°44'37" 135°37'39"	平成14年4月10日 平成15年3月31日	356m ²	
ねやみなみいせき 寝屋南遺跡 にしちく 西地区(確認)	ねやかわし 寝屋川市寝屋 うちばげしない 打上地内	27215		34°45'34" 135°39'11"	平成14年11月1日 平成15年3月31日	721m ²	
ねやひがしいせき 寝屋東遺跡 (確認)	ねやかわし 寝屋川市寝屋 うちばげしない 地内	27215	24	34°46'04" 135°41'32"	平成15年2月27日 平成15年3月10日	335.5m ²	
くらじいせき 倉治遺跡 (確認)	かたのしくじちない 交野市倉治地内	27230	14	34°47'25" 135°42'00"	平成14年6月1日 平成14年11月30日	712m ²	
つだじょういせき 津田城遺跡 (確認)	ひらかなしだもない 枚方市津田地内	27210	63	34°47'56" 135°42'35"	平成14年9月2日 平成15年1月10日	305m ²	

所収遺跡名	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
讃良都条里遺跡 西地区(確認)	生産	中世	水田・溝	土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦	確認調査
讃良都条里遺跡 (確認その4)	集落・生産	古墳～中世	溝・土坑・落込み・水田	土師器・須恵器・埴輪・製埴土器・瓦器・陶器・磁器・瓦	確認調査
寝屋南遺跡 西地区(確認)	古墳・集落	古墳・古代	古墳・掘立柱建物	須恵器・土師器・瓦器	確認調査・新規発見・範囲拡大
寝屋東遺跡 (確認)	集落・生産	古代・中世	土坑・溝・ピット・落込み	須恵器・土師器・瓦器	確認調査
倉治遺跡 (確認)	集落・生産	弥生～中世	土坑・溝・井戸・水田	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・染付	確認調査
津田城遺跡 (確認)	生産?	古代・中世		須恵器	確認調査

財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第101集

讚良郡条里遺跡、
寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、
倉治遺跡、津田城遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

発行年月日：2003年9月

編集・発行：財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

TEL 072-299-8701 FAX 072-299-8905

印刷・製本：中島弘文堂印刷所